帝に愛された姫君
～華鏡（はなかがみ）～

東　めぐみ

海辺にて

～海辺にて～
　俺はいつも海を見ていた。そう、こうやって片手のひらを耳に当て、じっと聞き入ると、かすかに海鳴りの音が押し寄せてくる。寄せては返す白い波頭(なみがしら)を俺は海鳴りに耳を傾けながら、飽きることもなく眺めている。
　永遠に途切れることのない波は、人の生にも似ている。誰かが今日、亡くなっても、入れ替わるように翌日には新しい生命がこの世に生まれている。限りなく続いてゆく人の営みに俺は海を重ねてみる。
　俺の人生をたった一瞬で丸ごと変えてしまった海、俺の大切なものすべてを飲み込んだ海。それはこれまでの俺の二十年というけして長くはない人生を振り返る時、切り離して考えることのできないものだ。
―どうぞ生きて、我らの分まで生きて、我が一族の血を後世に伝えて下さりませ。
　今も絶え間なく鳴り響く潮騒の狭間から、無念の死を遂げた人たちの悲憤の声が聞こえてくるようだ。
　俺を抱き涙ぐんでいた祖母の最後の表情は、うっすらと微笑んでさえいた。それが祖母との永久(とこしえ)の別れに一実の母とも生き別れになるとは、その時、あまりにも幼すぎた俺は想像だにしなかったのだ。
―お祖母(ばば)さま、これから我らはどこにゆくのですか？
　そのときの俺の問いに、祖母はハッと胸をつかれたような表情になった。それもそのはず、当時、俺は六歳になったばかりの幼子にすぎず、祖母の眼に映じた俺はさぞあどけなく、いとけない童だったはずだ。
　祖母は一瞬、何かに耐えるように眼を伏せ、やわらかに笑んだ。あのように菩薩のごとくに穏やかで美しい祖母の笑顔をかつて俺は一度たりとも見たことはなかった。恐らく、あれは死を覚悟した者だけが手に入れることのできる諦観の滲んだ微笑だったのだろう。
―この千尋の海の底にも、都がございます。我らが暮らした都と寸分違わぬ賑やかな都がこの波の下にもあるのです。我らはこれからその都に参るのですよ。
　俺は祖母に言われるとおり、小さな手のひらを合わせて伊勢神宮がある西方を伏し拝んだ。
　波の下にも真に都があるのですか？　俺が訊ね返そうとする前に、俺は祖母に抱かれて冷たい早春の海に沈んだのだ。それから先はまさに地獄だった。
　水に飛び込んだときの苦しさは今でも俺を夜半、目覚めさせ悪夢を見させる。海中に身を投じた俺たちはすぐに苦悶に喘ぐことになったが、それでも祖母は気丈にも俺を抱きしめ離すまいとしていた。
　俺は懸命に喘いだ。あれほど生きたいと願ったことはない。わずか六歳の幼子がそれほどに生きたいと願ったのだ。そう、俺には果てしない未来が延々と続いているはずだった。
　だが、あれほど切ないほどに生きたいと願った俺は今、この瞬間、生きることに倦んでいる。自分という人間がこの世に生き存えていること自体が厭わしい。

何故、俺一人が助かった？
俺はお祖母さまや伯父上の一族の生命を犠牲にして、のうのうと生きているのか。この世ではとうに死んだものとされている俺は、最早生きながら死んだ人間だ。
空しい。本当の俺を知る者は誰一人としてなく、俺が生きていることを知る者は誰もいない。
自分は何のために生きているのだろう。俺は海を眺めながら、何度も自問自答を繰り返す。
そして、想いはいつも同じ場所へと還ってゆく。
一憎き源氏。頼朝め。
我らを滅ぼした源義経は死んだ。頼朝が殺したのだ。醜い骨肉の争いの挙げ句、頼朝は自らの弟たちを次々と殺した。血で血を洗う呪われた宿命を源氏一族が甘んじて受け容れねばならぬのも我ら一門の無念なのか、仏罰なのか。
俺は唇を噛みしめて、ただ浜辺に立つ。春まだ浅い三月、鎌倉の海は冷たく、海鳴りは一向に止まず響いていた。

父と娘

父と娘

　先刻から、その場の雰囲気はピリピリとして今にも割れそうなほどの危うさを孕んでいる。楓はむうと頬を膨らませて父を睨み上げていた。
　父恒正がこれ見よがしに盛大な溜息を洩らす。
「楓(かえで)、良い加減にせぬか」
　楓はそれでも花のような唇を引き結び、頑なに黙(だんま)りを決め込んでいる。恒正は呆れたように首を振った。
「これでは、この父が恥ずかしうて到底、北条どのにそなたを引き合わせることなどできぬわ」
　楓はこのときとばかりに叫んだ。
「それならば、いっそのこと、この縁組みを破談にしてしまえばよろしいではありませんか！　大体、私は最初から北条氏に縁づくつもりなどないと何度も申し上げております」
　恒正は不機嫌さを隠そうもしない。
「この縁組みはわしがそなたのためにと、わざわざ御所さまにお願いして北条どのに声をかけて頂いたのぞ？　その御所さまお声がかりのありがたくも勿体ない縁談を何故、そなたは不意にするような愚かなことばかりするのだ？」
　楓はつんと顎を反らした。
「大体、私はその御所さまという呼び方も好きではありませぬ。源氏のおん大将はいわば武家の棟梁でいらっしゃるのに、何故、武士が御所さまなどという公家風の呼び方を好まれるか解せませぬ」
　途端に恒正が顔色を変えた。
「おい、楓。良い加減にせぬかッ。御所さまは今や飛ぶ鳥を落とす勢い、この鎌倉の地では比類なきお方ぞ。その鎌倉どのに向かってそのような恐れ知らずの無礼な口を利いて、何とする。そなた、そのまま首と胴体が真っ二つになりたいのか？」
　楓はプイと横を向いた。
「二つでも三つになっても構いません。私は思うたところを口にしたまで。父上はその御所さまのお声掛かりの縁談で、まさに天にも上る心地なのかもしれませんが、私には良い迷惑です。出世なさりたいのなら、娘を贄にせずとも、ご自分の裁量才覚でなさいませ。私はそのための捨て駒にされるのは金輪際ご免ですから」
　言うだけ言うと、楓は部屋から足早に出た。背後では父がまだ何やら喚いているが、そんなことには頓着しない。そのまま自分の居間に戻るやいなや、部屋に閉じこもった。
　床に突っ伏している中に、涙が溢れきた。楓は十六歳。この鎌倉で生まれ育った。父河越次郎恒正は〝鎌倉どの〟と呼ばれ崇められる征夷大将軍源頼朝の側近中の側近。頼朝の舅であり妻の政子の父である大物北条時政とも懇意にしている。
　その時政の庶子の中の一人、五男だか六男だかとの縁組みを恒正が持ち出してきたのは、そも

そもみ月ほども前のことだった。最初は冗談か何かと思っていたのに、何と父は主君頼朝に頼み込んでまで、時政の倅との縁談を進めたかったらしい。
　初めて聞いたのは年末の何かと気ぜわしい時期で、恒正も多忙に取り紛れていたのか、以後は一切口にせず、楓はあの縁組みはもう立ち消えたのかと都合良く解釈していた。
　だが。年が改まってしばらくしてから、また北条氏との縁組みを蒸し返し始め、どうやら怖ろしいことに、この話は当人の楓の意思などおよそあずかり知らぬ場所で着々と進んでいるらしいのだ。
　最近はいよいよ件(くだん)の子息と楓の引き合わせをすると話も具体的になり、父は是が非でもこの縁談を纏めようと躍起になっている。必然的に父と娘も始終、諍いばかりしている有様だ。
　父の言っていることは嘘ではない。楓は生まれてほどなく生母を亡くし、父は再婚もせずに楓を愛し育ててくれた。乳母(めのと)がいるものの、父は仕事で多忙な最中でも、楓と過ごす時間を大切にしてきたのも判っている。父が言葉どおり、楓のために良かれと頼朝の外戚である北条氏との縁組みを進めているのも判っている。
　けれど、その愛情ゆえの行為の中に、ひと欠片の野心もないかといえば、そうでもないだろう。何しろ北条時政といえば、頼朝の妻政子の実父であり、頼朝に最も近い人物といえる。少年時代から伊豆で流人暮らしの長かった頼朝は猜疑心が強く、滅多に他人を信用しない。その頼朝が唯一心を許すのが妻である政子とその父時政だといわれていた。
　この鎌倉で随一の権力者頼朝の懐刀、その時政の息子と己が娘を娶せるのは御家人であれば、誰もが夢見ることであったろう。北条家と縁続きになることで、父も権力の中枢へ近づき、鎌倉幕府の中でより強固な立場を築くことができるというものだ。

何もこそまでしなくても、恒正は頼朝からの信頼も厚い。父は頼朝の流人時代から仕えているから、頼朝も実の同胞(はらから)に近い情を抱いているらしい。年齢も三つ下とほぼ同じで、長らくの苦楽を共にしてきた間柄だ。今更何も北条氏に媚を売ってまで、のし上がる必要もないのだ。

政子は大変に好奇心と自立心に飛んだ女性で、御家人たちと頼朝が談合する場にも必ず同席する。むしろ政において発言権が強いのは時政より政子であり、その政子は頼朝との間に二男二女を儲けている。いずれはその息子が二代将軍となるのは必至で、北条氏の血を色濃く引いた将軍が誕生する。父ははるか未来に備えての布石を打っているらしいのだ。つまりは、そのための北条家との縁組みであった。

楓とて、武家に生まれた宿命であれば、自分の気持ちのままに好いた男に嫁げるとは思ってはいない。時には家のため政略のために嫁ぐことも、物心ついたときから覚悟はしていた。なので、別に北条家に嫁ぐのがいやなのではない。

肝心の相手一良人となる男がいやなのだ。時政の何番目かの息子に当たるその時晴という男、歳は二十二だというが、ろくな噂を聞かない。時政に甘やかされて育ったせいか、我が儘のし放題、町に出ては好みの娘どころか人妻にまで手を出し、まるで人さらいのように略奪して連れ帰るという。

一晩、慰みものにして、さんざん辱めた挙げ句、翌朝にはまるでゴミを捨てるかのように門前にうち捨てる。よほどのことがない限り生命を取ることはないが、抵抗する女を怒りのために手打ちにしたとか、許婚のいる娘を手籠めにしたために、娘が事後に自害したとか、そんな聞くに耐えない噂まで流れていた。

相手の男が凡庸であったとしても、まともな神経の持ち主であれば良かったが、そのように女好きの気狂いと囁かれていては、幾ら楓でも嫁ぐ気にもなれないのは致し方なかった。

一お父さまは何故、判ってくれないの？

考えれば考えるほど、涙が溢れてきて止まらなかった。

一刻後、楓の乳母、さつきは控えめに部屋の扉を叩いた。

「姫さま、姫さま」

さつきは楓にとっては母代わりといって良い。代々、河越家に仕えてきた郎党の妻であり、さつき自身も二人の娘と一人の息子の母であった。既にその娘たちは他家に嫁ぎ、一人息子も一昨年結婚して、孫も生まれている。

「姫さまのお好きな砂糖湯をお持ち致しましたよ」

幼いときから、むずかる楓に甘い砂糖湯を飲ませると、不思議に泣き止んだ。今でも優しい乳母はこうして砂糖湯を作ってくれる。

しかし一。眠っているのかと遠慮がちに扉を開けたさつきは悲鳴を上げて、手にした盆を取り落とした。碗に入った砂糖湯がころがり落ちたが、さつきは手を口に当てたまま悲鳴を飲み込み、ゆっくりと首を振った。

楓の部屋には誰もいなかった。続きの間になっている寝所も念のため覗いてみたけれど、もぬけの殻だった。

　これは殿にお知らせする前に、典正に申しつけて姫さまをお捜しせねば。さつきは頼もしい一人息子の顔を思い浮かべ、一人で頷いた。良人に先立たれて久しいが、恒正は近臣の嫡男である典正を息子のように可愛がり、元服のときは自らが冠親となって名も片諱(かたいみな)を与えて〝典正〟と付けてくれた。
　恒正に楓失踪を知らせれば、また父と娘の間に余計な波風を立てることになる。それは避けねばとさつきは小袖の裾を蹴立てるようにして息子を呼びにいった。
　楓は小袖の裾を大胆に端折（はしょ）り、両手で持つと脚をそっと海水に浸した。流石に太腿までは見えないが、白い脹ら脛は露わになっており、それこそ父恒正が見れば卒倒するに違いない。
一嫁入り前の娘が恥ずかしい真似をしおって。
　額に青筋を浮かべる父を想像し、楓は思わずクスリと笑みを零した。
　その時、背後でクスクスという忍び笑いが聞こえ、楓はピクリと身を震わせる。振り向くと、長身の若い男がひっそりと佇んでいた。
「海の女神は色香溢れる女人だと聞いたことがある。先刻のそなたを見ていて、まさしくそのとおりだと思っていたのだが、どうやら、見た目と中身は違うらしい」
　最初、楓はそれが自分のことを指しているのだと気付かず、きょとんと見つめていた。と、男がまた愉快そうに笑う。クックッと咽を鳴らしてさも愉快そうに笑っているのが悔しく、楓は強いまなざしで男を見据えた。
「あなたは誰？　いきなり現れて、その言い草はないでしょう」

　男はそも愉快そうに楓を見て笑っている。その余裕たっぷりの態度は楓を余計に苛立たせた。
「そもそも海の女神が色っぽいだなんて、初めて聞きました」
　そのひと言に男はまた笑った。
「失礼な人ね。いきなり現れて、そんな風に馬鹿にしたように笑うだなんて。あなたのような無礼な人には出逢ったことがありません」
　と、男が悪戯っぽい笑みを浮かべた。刹那、楓の胸の鼓動がはねた。まじまじと彼の顔を見つめれば、この無礼な男がかなりの美男だと知れたからだ。その出で立ちからして、どう見ても武士(もののふ)ではない。漁師に違いないだろう。丈の短い上下を着ている。短い袖や括り袴からは陽に灼けた肌が覗き、日々の労働で引き締まった体軀には武士も負けないほどの筋肉がほどよく付いている。
　漁師をを生業(なりわい)とするには、どこかしら品のある端正な面と雰囲気だが、そんなのは所詮は気のせいだろう。だって、初対面の人の顔を見て、いきなり笑い出すような礼儀知らずで無知な男なのだ。
　楓は男の上着の胸許から覗く小麦色の膚にドキリとし、思わず眼を背けた。
　男はまだ笑いながら、近づいてくる。楓は大きな眼を瞠って、近づいてくる男を凝視していた。
「色っぽい海の女神というのは、あんたのことだよ、娘さん」
「え？」
　楓は当惑してまじまじと男を見つめ返す。男が漸く笑いをおさめて、真顔になった。
「あんたは綺麗で色っぽい。だから海の女神みたいだって言ったんだ」
　楓はカーッと頬が熱くなるのを自覚した。
「あ、あなたって、女と見れば誰にでもそんなことを言うのね」
　憎らしいことに、男は狼狽える楓を面白そうに眺めている。
「いや、残念ながら、淋しい一人暮らしでねぇ、そんなご大層なものを拝ませて貰える機会はなかなかないんで」
「え？」
　男の意味ありげな視線を辿れば、何と露わになった楓自身の白い脹ら脛が見えた。今も彼のまなざしは熱く、楓の脚に注がれている。
「無礼者ッ」
　楓は叫ぶなり、端折っていた小袖の裾を直した。何という憎らしい男だ。そうならそうと、早く教えてくれれば良いものを。
　男は楓の心を見透かしたかのように、肩をすくめた。
「別に俺はあんたに着物の裾をめくって綺麗な脚を見せて欲しいなんざ、これっぽっちも頼んじゃいないぜ」
「ー」
　確かに男の言うとおりなので、楓は返す言葉もなく押し黙った。また男がクツクツと忍び笑いを洩らした。

「何ていうのか、大切に育てられた世間知らずの姫さまって感じだな、あんた。俺を無礼者扱いするんだから、相当の家の娘なんだろう」
　男の黒い瞳はどこまでも深く、紫紺の夜空のように澄んでいた。態度は無礼極まりないが、見かけの粗野さは意図的に作られたものであるような気もする。そう感じさせる何かが彼にはあった。
　何故か、この無礼な男に自分の身分も何もかも打ち明けてしまいたい。そんな馬鹿げた衝動に駆られ、楓は男をじいっと見つめた。
　男が照れたように頬を上気させた。
「おい、こっちとら、鰥夫(やもめ)暮らしが長すぎて、女に飢えてんだって言ったろう？　そんなに可愛い顔でこちらを見ていたら、頭からがりがりと食べちまうぞ？」
　楓は大真面目に応えた。
「あなたは見たところ漁師のようですが、最近では、漁師というのは魚だけでなく、人間も食べるのですか？」
　しばらく男はポカンとしていたが、やがて腹を抱えて笑い出した。今度の笑いはなかなか止まらず、しまいには涙眼になってまで身体を震わせて笑っている。
「あなたって本当に失礼な人ね」
　楓が踵を返そうとすると、ふいに手が掴まれた。
「おい、待てよ」
　楓は首だけねじ曲げて振り向いた。
「この手を放しなさい」
　凜とした声音で命じるのに、男が言った。
「誰かと話して、こんなに笑ったのは生まれて初めてだ。あんた、本当に面白い女だな。俺はあんたとももう少し話してみたいんだ。この手を放しても逃げないと約束するなら、放してやる、どうだ？」
　窺うような眼で見つめられ、楓は眼をまたたかせた。星を宿したような漆黒の瞳はどこまでも深く、男が自分に害をなすとは思えない。小さく頷くと、男の手はすぐに離れた。それまで腕に感じていた温もりが消えて淋しいと一一瞬でも感じた我が身が信じられない。

　私はどうかしてしまったとでもいうの？
「あんた、つくづく箱入り娘なんだな。その姫さまが何でお付きもつけずに一人でこんなところに来た？　俺みたいな優しい男に出くわしたから良かったようなものの、とんでもないヤツだったら、それこそ頭からがりがりと食べられてたぞ、あんた」
「私は」
　そこで楓は男が真剣な顔でこちらを見ているのに気付き、うす紅くなった。こんな男に見つめられて自分が紅くなる理由が判らないまま、コホンと小さく咳払いして続ける。
「家出してきました」
　数日と思えるような長い沈黙が続き、男がまた吹き出した。
「家出？」
　楓は頬を膨らませた。
「どうせまた笑い飛ばされるだけでしょう。やはり、帰ります」
　途端に男が狼狽えた。
「悪ィ、別に意味があって笑ったわけじゃない。ただ、何というかだな、何でそもそも家出なんかしなくちゃならないんだ？」
　男が真顔になったので、楓は憤慨しつつも応えた。
「意に沿わぬ縁談を強要されそうになったからです」
　男は実に簡潔に話をまとめた。
「つまりは嫌いな男に嫁に行けと言われた？」
「そのとおりです」
「相手の名前を聞いても良いか？」
　そこで警戒するような視線を男に向けた。行きずりの漁師にそこまで打ち明けて良いものだろうか。
　が、次の瞬間、楓は極めて自暴自棄な想いに陥った。どうせ、この漁師ともこれが最後なのだから、少しくらい喋ったからとて支障はあるまい、と。
「お相手の名は北条時晴さまです」
　刹那、男の眼が見開かれた。
「そいつは、あんたも因果というか不運だな。北条の若さんの悪逆非道は町ではちょっとした噂になってるほどだからなぁ。何しろ女好きもあそこまで行けば、病気だ。俺の知り合いの妹もあの馬鹿殿に眼付けられて逃げ回るのに必死だったぞ。まあ、そいつの兄貴が遠国にいる遠縁にさっさと妹を預けたんで、事なきを得たけどさ」
「そう一ですか」
　何と返して良いものか判らず、楓は無難に相槌を打った。
「マ、奢る北条も久しからず、だな」
　男は唾棄するように言い、そのときだけ、楓は違和感を憶えずにはいられなかった。夏のきらめく海のように屈託のない男にはおよそふさわしくない投げやりさだったからだ。
　愕いている楓を尻目に、男は質問を続ける。

「あんたを北条に嫁がせようとしているのは？」
「ー私の父です」
「そっか」
　彼は得心したように幾度も頷いた。
「あんたの父親の名前はどうやら訊かない方が良さそうだな。天下の北条と縁組みできるほどの家の娘だ、相当の家の姫さまだろう。で、あんたは親父さんの言うなりに、北条家に嫁ぐのか？」
「嫁ぐのがいやだから、家出してきたのです」
「なるほど、こいつは訊くのが野暮だったな」
　男がまた少し笑った。ドキン、と、また楓の胸が高鳴る。
　何故、私はこの男の素敵な笑顔を見ると、ドキドキするのかしら。そこまで考え、ハッとする。素敵？　この無礼な男が素敵ですってー。
　楓が一人で紅くなったり蒼くなったりしているのも知らぬげに、男は人懐っこい笑みを見せた。
「だけどな、悪いことは言わない。今日のところはとにかく屋敷に帰りな。親っていうのは子どもは心から可愛いもんだから、あんたが心と言葉を尽くして頼めば、親父さんも理解して諦めてくれるかもしれない。世間知らずのあんたがたとえ屋敷を出たからといって、庇護してくれる男もおらず暮らしてゆけるとは思えねえ。大体、家出するっていいながら、荷物も何も持ってきてねえだろ」
　そこで、男が意味ありげな流し目をくれる。
「まァ、俺もそろそろ身を固めたいと思ってたし、あんたがその気なら嫁に貰ってやっても良いけど。夫婦になれば、今夜から、あんたのその抱き心地の良さそうな身体を好きなようにー」
　男は皆まで言うことはできなかった。彼は紅くなった頬を押さえ、恨めしげに言った。
「冗談だろ、冗談。この暴力女め。初対面の男をひっぱたく女なんざ、こっちから願い下げだよ」
「私も初対面の女性を相手に下品な冗談を言う男の妻になりたいとは思いませんから！」
　しばらく二人は顔を見つめ合っていたかと思うと、やがて、どちらからともなく吹き出した。

「何か俺たちって、似た者同士かもな」
「ですね」
　楓は頷き、そっと手を伸ばし男の頬に触れた。小柄な楓は背伸びをしなければ、長身の男には届かない。
「ごめんなさい、さっきは痛かったでしょ」
　男がふふっと笑う。
「俺も悪い冗談がちと過ぎたから、お相子だ」
　男の大きな手がそっと楓の手に重なる。
「あんた、優しいんだな。俺は色っぽくて綺麗で優しい女は好きだよ」
　更にまた、余計なひと言を付け加える。
「あと、短気で怒りっぽい女も」
「何ですって？」
　また拳を振り上げようとする楓をひょいと身軽に交わし、男は屈託ない笑顔を見せる。
「二度も同じ手は通じないぞ」
　フンと、楓はそっぽを向き、ややあってから彼を見た。
　静かな時間と海鳴りの音だけが二人を包み込む。しばらく見つめ合った後、楓が問うた。
「あなたの名前を教えて下さい」
「とき、言(とき)ー」
　言いかけて、男は緩く首を振り、自嘲気味に笑った。また、こんな陰惨な笑い方をする。彼にはちっとも似合わないのに。どうしてか、この男がこんな風になると、楓の心まで刺すように痛むのだ。
「時繁（ときしげ）」
　今度は淀みなくはっきりと言った。
「時繁、漁師の名前ではありませんね」
「元々、親や祖父の代は武士だったというからな。まあ、身分の低い武士だったから、今もこんな名前に拘らなくても良いのかもしれないが。知り合いは皆、トキって短く呼んでるから、あんたも好きに呼べば良い」
　ひっそりとした笑みは今度は自虐的でもなく、何とも淋しげだった。何故、彼はこんな笑い方をするのだろう。
ーどうして、あなたはこんな淋しげに笑うの？
　その日、楓の心の奥底に沈んだ問いは長く彼女から離れなかった。時折見せる、晴れ渡った空が翳るように見せる冷酷な表情、淋しげな笑み。見る度に、楓は胸が締め付けられるようだ。
　想いに耽る楓の耳を時繁の声が打った。
「それからな、先刻のあれは冗談じゃないから」
　物問いたげに見つめると、彼はうす紅くなった。
「ああ、鈍い女だな。俺はこれでもあんたに求婚してるんだぞ。もし、どうしても親父さんを説得できなくて、また屋敷を出るような羽目になったら、俺が貰ってやるから。贅沢はさせてやれ

ないけど、あんた一人なら俺でも養える、いや、あんたと子どもくらいなら養えるからさ」
　律儀に言い直し、彼はニッと笑った。
　楓はその時、抱えていた疑問を彼にぶつけた。
「時繁さま、一つだけお訊きしても良いですか？」
　ブッと彼が吹き出した。
「時繁さまア？　いや、済まない、そんなご大層に呼んで貰ったことがないんで、愕いた」
「時繁というのは本当の名前なのですか？」
　それは直感的に感じた疑問だった。名を訊ねた時、彼は明らかに別に名前を言おうとしていた。そこで言い淀み、時繁と応えたのだ。
　時繁はまた、ひっそりと笑う。楓の心がツキリと痛んだ。
「あんたって、鈍いのか聡いのか、よく判らん女だ。あんたの言うとおり、俺には昔、もう一つの名があった。だが、もう気が遠くなるくらい昔の話だよ。最初の名はもうこの海の底に棄てた」
「海の底に棄てた？」
「ああ、とっくの昔に棄てた。名前だけでなく、その名前で生きていたときの人生もすべて、波の下に棄てて生まれ変わったんだよ。今の俺は時繁。だから、あんたもそう呼んでくれ」
　消え入りそうな語尾が絶え間なく続く海鳴りに混じって消える。楓は何も言えず、ただ寄せては返す白い波を見つめていた。
「そろそろ帰りな。お屋敷では今頃、大騒ぎだぞ。今は親父さんを極力怒らせない方が良いんじゃないのか」
　時繁の言うとおりだ。楓は素直に頷き、時繁を見上げた。
「お話を聞いて頂いて、ありがとうございました」
　時繁が照れたように頭をかいた。
「止せやい、跳ねっ返りの姫さんに改まって礼を言われると、こっちの調子が狂うだろうが」
「それでは、これで失礼します」
　何故かその場から立ち去りがたくて、楓はその場に立ち尽くしていた。
「今は帰ることが大切だ」
　優しい声音とともに大きな手が背中をそっと押した。それがきっかけとなったかのように、重たい身体が呪縛から解けたように動き出した。
　それでもなお、心を残して、ゆっくりと歩き出した楓の背中に男の声が追いかけてきた。
「俺に逢いたくなったら、ここに来い。俺はいつでもここにいるから」
　帰れと言いながら、ここで待つという男。もしかしたら、時繁もまた楓と同様、離れるべきだと判っているのに離れがたい矛盾した気持ちを抱いているのかもしれなかった。
　カモメが白い翼をひろげて蒼い大海原の上を旋回する。繰り返す波が白砂を洗う。楓は後ろ髪を引かれるような想いで、砂を一歩ずつ踏みしめて帰り道を辿った。
　建久九年（一一九八）弥生の初め、鎌倉は由比ヶ浜で楓は時繁という不思議な漁師の若者に出逢った。

嵐の夜

　当然ながらというべきか、屋敷に立ち返った楓はおろおろと足り乱した乳母に出迎えられ、その後、父恒正からたっぷりとお説教をされた。
　父は怒りのあまり、涙ぐんでいた。握りしめた拳を小刻みに震わせて、持ってゆき場のない感情を持て余すかのように、唇を噛みしめていた。
「どれだけ、わしの寿命を縮めたら、気が済むのだ？　そなたがいなくなって、わしが平然としておられるとでも思うたか？　亡き東子(とうこ)の今のわの際の願いをわしは今でも生命に代えても守り通そうと思うておるに。もし、そなたの身に何ぞあったときには、わしはあの世の蓮のうてなにおるそなたの母に申し開きができなんだ」
　それは幼い時分から父に繰り返し聞かされた母の遺言だった。
―どうか殿、楓のことをよろしく頼みまする。
　母東子は楓を出産後、後産がなく、そのまま亡くなった。息を引き取る間際、枕辺の良人恒正の手を握りしめて涙ながらに懇願したという。
　結局、楓はゆうに一刻余りにわたって延々と父に絞られた挙げ句、自室に幽閉された。翌日から、恒正は楓に逢おうともしなかった。楓はさつきを通じて幾度も父に目通りを願い出たが、父は顔を見せてもくれない。
　しかもまた脱走することを警戒してか、部屋の周囲には屈強な家臣たちで固め、部屋の外に出ることさえ叶わない。
　日だけが徒に過ぎていった。その折々、楓はあの由比ヶ浜で出逢った不思議な男一時繁を思い出すのだった。日に三度届けられる食事もろくに手に付かないのは何も幽閉されているからではない。しょっちゅう瞼にちらつくあの男のことで心が一杯になり、胸がつかえる心地がするからだった。
　更に悪いことに、時繁の存在は日毎に薄れるどころか、大きくなってくる。ひと月ほどの間に楓はろくに食事も受け付けなくなり、ひと回り痩せた。元々の雪膚は更に白く透き通り、半病人の体になった。恒正は婚礼前に大切な娘の身に何かあってはと医師を呼んで診させたものの、特に異常は見当たらずと体力を増進させる滋養強壮の薬が処方された。
　そんなある夜。暦は既に卯月を迎えていた。鎌倉でも桜が本格的に咲き始めたある日のこと、父恒正が漸く姿を見せた。
　楓は歓び、父を迎えた。それまで床に横たわっていたが、慌てて飛び起きた。恒正は上座にゆったりと座り、楓は手をつかえて出迎える。
「しんどいのであれば、横になっていても良いのだぞ」
　恒正の機嫌はけして悪くない。というより、むしろ上機嫌であった。このひと月の間に、何があったのだろうか。楓は訝しげに父を見つめた。

　と、恒正がおもむろに切り出した。
「今日は、そなたに話が合って参った」
　父の視線を真正面から受け止め、頷く。
「私も父上に折り入って聞いて頂きたい話があるのです」
　だからこそ乳母を通じて毎日のように目通りを願っていたのだが、今更、過ぎたことを口にしても利はない。また、今夜は父の機嫌は損ねない方が賢明だ。
「まずは父上から、お話をお聞かせ下さいませ」
　淑やかに促すと、恒正は満足げに頷いた。
「我が娘ながら、ほんにそなたは美しうなった。これならば、北条の時晴どのも満足して下されよう」
　その瞬間、楓の眼が射るように恒正に向けられた。
「父上、今、何と、何とおっしゃいましたか？」
　恒正は至極上機嫌で繰り返した。
「そなたの嫁入りが明日に決まった。夕刻、北条家から迎えの輿が寄越される。時晴どのは既に一度、御所で遠くからそなたを見かけたことがあるそうでの、祝言にもいたく乗り気だとのことじゃ。本来ならば六月にというところを早めて欲しいと仰せになるほどの執心ぶり。加えて、わしとしてもそなたがまた妙な心を起こさぬ中にさっさと嫁がせてしまうが良いと思うて、急遽、予定が早まった。そなたもそのつもりでおるように」
「父上、私は一」
　楓が桜色の唇を戦慄(わなな)かせると、恒正が覆い被せるように強い口調で言った。
「何事もそなたのためじゃ。時晴どのは庶子とはいえ、時政どのがご子息たちの中でもとりわけ眼をかけておられる。その愛息の許に嫁げば、そなたの将来は安泰というもの。この上は良人に愛され、よく仕え、良き妻となり母となるように心がけよ」

　その断固とした表情からは、もう何を言ったところで聞く耳は持たないと告げていた。蒼白になった楓を一人残し、恒正は部屋を出ていった。表に控えていたさつきに何か小声で指図しているのを見れば、また逃げ出さないようにしっかりと見張るようにと言いつけているのかもしれない。
　何故、こんなことになってしまったのか。まさか六月に予定されていた祝言がふた月も早まるとは思ってもみないことだった。次から次へと涙が溢れて止まらない。
　ひとしきり泣いた後、楓は思案に沈んだ。先刻、恒正は北条時晴が既に楓を見知っていると言った。だが、楓自身は時晴を知らない。だからこそ、余計に悪しき噂ばかりの彼の人となりに絶望したのだ。
　御所で楓を見かけたというから、恐らくは楓が頼朝の住まいに参上したときにどこかで見かけたのだろう。楓は重臣の娘ということで、頼朝の住まいに上がったことは少なからずある。頼朝やその妻政子、長女大姫、次女三幡姫に拝謁し、政子直々に小袖と帯を賜ったことさえあった。
　頼朝やその一族が住まう屋敷一体は〝御所〟と呼ばれている。いかに頼朝の権威がこの鎌倉では大きいか一有り体にいえば都の帝すから凌ぐほどであるかを示していた。
　そこで楓は首を振った。
　いや、今はそんなことはどうでも良い。女狂い、当代一の好き者と呼ばれる男なぞ、たとい天地が裂けようとも、楓は受け容れられない。今は心を落ち着かせて今後について対策を考えるべきだ。
　その時、扉が音もなく開いた。
「姫さま」
　乳母のさつきが丸い塗り盆を捧げ持っていた。
「砂糖湯をお持ちしました」
「ありがとう」
　楓は微笑もうとしたけれど、どうしても無理があった。泣き腫らした眼は恐らく真っ赤だろう。そんな楓を痛ましげに見つめ、さつきはうつむいた。その様子には何かを躊躇うそぶりがかいま見える。実の母のようにいつも楓に対しては良きにつけ悪しきにつけ、はっきりと物を言う彼女にしては珍しいと思った。
「明日は婚礼だというのに、そのように泣いてばかりおられては」
　漸く紡いだ言葉は祝言前らしいものだった。しかし、さつきは小さく首を振り、吐息と共に今度はまったく別のことを口にした。
「姫さまが北条家の若さまとのご縁組みをそこまでお厭いになる理由、真に時晴さまがおいやだから、それだけなのでしょうか？」
　その瞬間も、楓の脳裡に真っ先に浮かんだのは時繁の整った面だった。しかし、たとえ母とも信頼するさつきにだとて、時繁のことは話せない。頑なに口をつぐんだ楓に対して、さつきはまた小さな溜息を洩らした。
「私は姫さまの乳母とはいえ、あくまでもこのお屋敷にお仕えする使用人でございます。その分際で口にするのもはばかられることゆえとこれまで胸におさめて参りましたが、このひと月の姫

さまの憔悴ぶり、到底見てはおられませんでした。実の母なれば必ずや娘に告げたであろうことをこの際、はきと申し上げまする」
　燭台の灯火だけの薄い闇が満たす室内で、さつきの眼が射貫くように楓を見つめていた。
「食が進まず、しまいには何も食べられぬようになり、一見病かと見紛う症状、そんな病の名を私は一つだけ存じております」
　薄い闇の中、さつきと楓の視線が交わった。
「それは恋というものにございます。私自身、申し上げるのも恥ずかしいことながら、亡き良人との馴れ初めはそのようなものでしたし、下の娘も好いた男と結ばれました。ゆえに、身に憶えのある病なのです」
「一」
　それでも、楓は何も言わなかった。さつきは力強さを感じさせる声で言った。
「姫さま、もし万が一、私の推量が当たっておりますれば、私は姫さまの生まれて初めての恋を力の限り応援致します」
　楓は力ない声で問うた。
「何故、そなたはそのように考えたの？」
　さつきはやや声を潜めた。
「数日前、薬師がおいでになる前までは私も姫さまが何ぞ病に取りつかれておいでかと思いましたが、姫さまのお身体には何の障りもないとお聞きした折、恐らくは恋の病なのではと拝察仕ったのです」
　なおも無言の楓にさつきはにじり寄った。
「教えて下さいませんか、姫さま。姫さまのお心には誰ぞ別の殿御がおいでなのでございますね？」
　永遠に続くかと思われる沈黙の後、楓はコクンと頷いた。さつきからはホウっと溜息が洩れた。覚悟はしていても、心のどこかでは間違いであることを祈っていたのだろう。

　だが、さつきは昔から切り替えも頭の回転も速い女だった。乳母は更に膝をいざり進め、声を落とした。
「どこのどなたさまかをお伺いしてもよろしいのでしょうか？」
　これには小さくかぶりを振ることで応えた。さつきは予め予測していたらしく、今度は落胆した様子ではなかった。
　彼女はさっと立ち上がると、そのまま部屋を突っ切り、扉に手を掛けた。
「今宵は見張りの者も手薄になっております。殿も時ここに至り、姫さまがご観念なさったと思し召したのでございましょう。むろん、わずかながらも警護はおりますれど、その者たは私が先ほど軽い眠り薬を潜ませた酒を差し入れと称してふるもうて参りました。ですから、今頃は白川夜船で夢見心地かと」
　そこから先は言われずとも知れた。さつきは、この忠実無比な乳母は養い君楓をひそに逃すつもりなのだ。
　楓は烈しく首を振った。
「それはできぬ！　もし祝言を明日に控えた今となって、そなたが私を逃したと知れば、父上が激怒なさる。最悪の場合、そなたの生命をもって詫びることになるぞ。そなたはそれでも良いというのか？」
　恒正は長年、忠勤を励んできたさつきの生命まで望みはしないだろうが、北条家の手前、彼女の罪を問わないわけにはいかない。その時、さつきの身に危険が及ぶことは必定だ。
　さつきは決然として言い切った。
「構いませぬ。姫さま、口はばったい言い様ですが、私は姫さまを我が子と思うてお育てして参りしました。良人は既になく、三人の我が子らもそれぞれ片付き、嫡男はこちらの殿から可愛がって頂いております。私がこの世に思い残すこと、やり遂げねばならぬことはもう何もございません。もし、心残りがあるとすれば、それは泣く泣く北条に嫁いでゆかれる姫さまをなすすべもなく見送るしかないこと。さりながら、姫さまに恋い慕う殿御がおいでとあれば、私の心は決まっておりまする」
　さつきが楓の手を握った。その手のひらはどこまでも温かく慈愛に満ちていた。
「さあ、お行きなされませ。私がして差し上げられるのはここまでにございます。どうかこれより後もお健やかに、心で想われるお方と末永く添い遂げられますようにお祈りしております」
　さつきはその場に跪いて、頭を垂れていた。
「母は己の身よりも子の幸せを願うものにございます。さあ、見つからぬ中にお行き下りませ」
「さつきー」
　楓はそれでもまだ迷いのある瞳でさつきを見ていた。
「早く！　行くのです」
　楓にはそれが極楽にいる顔も知らぬ生母東子の声と重なった。その声に背を押されるかのように、楓は部屋を出た。短い階(きざはし)を降りた先には草履が用意されていた。楓はそれを素早く突っかけ、周囲を窺った。
　まだ誰もいない。さつきが飲ませた眠り薬が効いて、警護の者たちは眠り込んでいるのだろ

うか。楓はもう迷わなかった。庭に植わった樹木が濃い影を落とす中、一心に走り出した。

　ひそやかな夜のしじまに、波の打ち寄せる音だけが低く響いている。女人の繊細な眉のような月が危うげに紫紺の空に掛かかり、大海原の上には銀砂子を撒いたような夜空が一杯にひろがっていた。
　月明かりが白い砂浜を銀色に染め上げていた。すべてが月光に濡れ、光り輝くような美しい夜、その男は浜辺にひっそりと佇んでいた。
「時繁さま」
　名を呼ぶと、彼はつと振り向いた。その端正な顔に驚愕の色が浮かぶのに、楓は落胆した。
　やはり、来てはいけなかったのだろうか。屋敷を抜け出すこと自体は造作もなかった。屋敷をぐるりと取り囲む築地塀に一箇所だけ人ひとりがやっと通れる穴が空いている。それは楓が子どもの頃に見つけた秘密の抜け穴になった。
　町に出たいときには、よくその穴を利用したものだ。もっとも、小柄な楓ならばこそで、大人の男なら通れないだろうが。そして、その抜け穴の存在は父も知らない。普段は生い茂った低木に隠れて見えない位置にあるのだ。
　抜け穴から屋敷を出て、そのまま町を通り抜けて浜辺まで来たのだが一。当の時繁は確かにここで待っていてくれたものの、楓と再会しても嬉しそうどころか、迷惑そうに見えた。
一私ってば、どこまで浅はかなの。時繁さまが幾ら来ても良いとおっしゃったからといって、言葉どおりに信じて厚かましく押しかけるなんて。

　嫌われるのも迷惑だと思われるのも辛すぎた。逢えない一ヶ月余りもの間、時繁に対する恋心は自分で思う以上に深く烈しいものになりすぎていた。
　彼の顔を見た刹那、自分がけして歓迎されていないことが判った。楓は一歩下がった。大好きな男に嫌われるよりはいっそのこと、このまま誰も知らない場所に行って、海に入って消えてしまいたい。
　そう思って去ろうとした楓は、突如として背後から抱きすくめられた。
　熱い吐息混じりの声が耳朶をくすぐる。
「本当に来るとは思わなかった」
　そのひと言が余計に楓の哀しみを誘う。楓は厭々をするように身を捩った。すると背後から楓を抱いていた腕が緩まった。
「ごめんなさい、私が愚かでした」
　楓はともすれば溢れそうになる涙をまたたきで散らした。
「やはり、来るべきではなかったのです」
　と、楓の小さな身体はそのままくるりと回され、時繁と向き合う形になった。
「何を言っている？」
　時繁が覗き込もうとするのに、楓は下を向いたまま彼を見ようともしない。
「姫、俺を見てくれ」
　だが、楓は頑なにうつむいたままだ。焦れたのか、時繁が楓の頬に両手を添えて、そっと仰のかせた。
「俺はまだあんたの名前も知らない。それでも、忘れられなかった。ずっと毎日、ここに来て、来るはずもないあんたを待っていたんだ。流石に最近はそんな自分が馬鹿だと思えるようになっていたよ」
　楓は声を震わせた。
「時繁さまも私を待っていて下さったの？」
　時繁が何度も頷いた。楓の大きな黒い瞳から大粒の澄んだ涙が転がり落ちた。
「私もずっと時繁さまを忘れられなくて、ひとめで良いから逢いたいと願い続けていました。まさか、あなたも私と一緒の気持ちだとは思っていなくて」
「親父さんは説得できなかったのか？」
　それは問いかけの形ではあったが、確認でしかない。楓は頷いた。
　時繁はフウーっと大息を吐いた。
「俺はそのことを歓ぶべきかどうか。本音を言えば、こうして、あんたに再び逢えたのも親父さんが諦めなかったからだが」
　彼のまなざしの先には星を撒いたような紫紺の空があった。
「俺はずっと、あんたが幸せになることを願っていた。女狂いと評判のイカレた男だが、それでも北条の息子だからな。あんたのためには北条との縁組みがまとまった方が良いのだと判っていながら、心のどこかでは、あんたがまた以前のように屋敷を抜け出してここに来てくれれば良いと願っていた。どこまでも卑怯で自分勝手な男だ」

「私の幸せは」
　涙をぬぐって口にした楓を時繁が見た。
「私の幸せは好いた男(ひと)の傍にしかありません」
　熱い焔を孕んだ二つのまなざしが静かな空間で火花を散らしながらもつれ合った。
「その世にも果報な男は俺だと自惚れても良いのか、姫」
　逞しい腕に抱き寄せられながら、楓は呟いた。
「楓と呼んで下さい」

　時繁に手を引かれて連れてゆかれたのは、さほど遠くない場所にある小さな小屋だった。周囲に他には人家はなく、どうやらここにポツンと一軒だけ建っているようだ。
　外見はどこにでもあるような漁師の住まう小屋で、小屋内も極めて質素な造りだ。少なくとも頼朝随一の側近といわれる河越恒正の屋敷に比べれば、御殿と厩舎ほどの違いがあった。
　それでも時繁の几帳面な性格を物語るかのように、屋内はきちんと片付けられ、雑然とした印象はない。
　時繁がのべた薄い夜具に並んで横たわり、楓は彼を無心に見上げていた。覆い被さってきた彼も楓も何一つ身につけていない、生まれたままの姿だ。
　夜具の周囲には二人の着物や帯、下着が無造作に散らばっていた。
「俺はこれから楓に痛みを与えるかもしれない。できるだけ優しくするつもりだが、少しの間、辛抱できるか？」
　楓は微笑んで頷いた。北条時晴との婚礼が具体的になった時、さつきから祝言の夜、夫婦となった男女の間にどのようなことが起こるのかは聞かされた。しかし、それは肝心なところは曖昧にぼかして伝えられた知識で、実のところ、具体的には何も理解できていない。
　時繁を好きだから、祝言を控えた身で屋敷を飛び出した。けれど、正直、ここまでは想像したこともなかったし、再会した夜、すぐに彼が自分を抱くとは考えてみなかった。

　だから、怖い。心の準備が何もできていないのだ。楓は気丈に微笑んではいたが、震えていた。まだ桜花の季節で、深夜の夜気は冷たいこともあった。
「俺が怖い？」
　覗き込まれ、優しく問われると、楓は返答に窮した。時繁が優しい手つきで楓の枕辺にひろがった黒髪を撫でた。
「俺って堪え性がないかな。本当は何日かは待つつもりだったけど、楓を見ていたら、どうにも我慢がきかなくなっちまった」
　好きな男にそこまで求められると思えば、女としては嬉しい。でも、やはり、これから脚を踏み入れようとする未知の領域は怖いものでしかなかった。
「本当に大丈夫か？」
「はい」
　楓が頷くや、唇が塞がれた。烈しく舌を絡める濃厚な口づけだ。熱い唇は楓の身体中を辿る。不安に脈打つ首筋から鎖骨、胸の谷間、臍のくぼみからすんなりとした腰と太腿。更に悪戯好きな唇はこんもりとした豊かな膨らみの先端を掠める。
「ここが良いの？」
　乳首に口づけられる度、楓が身体を仰け反らせるのが時繁には伝わっているらしい。今度は重点的にそこばかりを責められた。
　豊かな膨らみを形が変わるほど揉まれ、先端を膨らみに押し込まれる。じんじんとした痺れとも快感ともつかぬ感覚に感じやすい突起が支配された頃、その部分が今度はすっぽりと口に含まれた。
「ぁあっ」
　無意識の中に洩れ出た艶めかしい声が自分のものとは信じられず、楓は頬に朱を散らして両手で口を覆った。
「大丈夫だから、ちゃんと感じている証拠だから、恥ずかしがらないで」
　優しく手をどかされ、後はもう彼の思うがまま乳首を吸われ舐められ、敏感になって勃ち上がった朱鷺色の胸の飾りを舌で弾かれる度に、楓はすすり泣きのような声を洩らした。
　時繁は楓の乳房に時間をかけて丹念な愛撫を施した後、彼女の太腿に手を掛けた。
「下も可愛がってあげるから、開いてごらん」
　楓は真っ赤になり、首を振る。今夜はこれで限度だった、これ以上、恥ずかしいことはしたくないし、できそうにない。小さな声で訴えても、時繁は止まらなかった。
「駄目だ」
　きっぱりと言われ、そのまま強引に両脚を大きく開かされた。
「これだけ濡れていれば、大丈夫か」
　意味不明の科白を彼が呟き、生暖かい感触がいきなり閉ざされた蜜壺に侵入した。
「ー？」
　何が自分の身に起こったのかも理解できず、身体を起こそうとして楓は固まった。あまりの衝撃で涙が溢れた。時繁の頭が自分の股間に埋まっていたのだ。

「時繁さま、何を―」
　怯えて身を退こうとしても、時繁に再び乱暴に押し倒されてしまった。
　先刻見たばかりの光景がちらついて、羞恥のあまり気を失いそうだ。
「じっとしていて。怖がることはない。俺を受け容れた時、少しでも楓が痛くないようにするんだ」
　幼子に言い聞かせるように優しく囁かれ、楓は抵抗を止めた。
―そう、私は時繁さまを信じて、ここまで来たのだから、今更、ここで躊躇う必要はない。
　その間にも、時繁は楓の不安を宥めるように、優しい手つきで太腿から脹ら脛を幾度も撫でた。
「この綺麗な脚に俺はひとめ惚れしたのかもしれないな」
「脚にひとめ惚れ？」
　その言い様がおかしくて、楓はクスクスと笑った。時繁が鹿爪らしい顔で頷く。
「そう、楓が小袖の裾をめくって綺麗な脚を惜しげもなくさらしているあの姿を見た時、俺は一瞬で恋に落ちたんだ」
「脚にひとめ惚れされただなんて、歓んで良いのか悪いのか判らないわ」
「もちろん、歓ぶべきさ」
　ふいに蜜壺につぷりと異物が差し入れられ、楓の華奢な身体が陸(おか)に打ち上げられた魚のように撥ねた。
「あーんっ」
　またしても予想外の声が洩れだし、楓は紅くなった。
「何をしたの？」
　不安を宿した瞳で問いかけると、時繁が笑った。
「指を挿れたんだ」
「指？　そんなものを挿れたの？」
「指よりもっと大きなものを挿れるんだよ」
　判るようで判らないことを言われ、楓はますます不安になり眼を潤ませた。
　時繁が笑いを含んだ声で言う。
「それよりも、初めて逢ったときより痩せたんじゃないか？」
「そうかしら」

　時繁を恋慕するあまり、恋煩いで食事も満足に取れなかったなんて、当人を前に言えるものではない。
「病か何かにかかっていたのか？」
　彼があまりにも不安そうだったので、つい楓は口を滑らせてしまった。
「乳母が教えてくれたわ。こういうのは恋の病というんですって」
「恋の病ーだって？」
　しまったと思ったときには遅かった。その言葉は彼をたいそう歓ばせたらしく、時繁は実際、初めて見るような嬉しそうな表情だ。
「一ヶ月前に見たときは、もっと肉が付いてて胸も大きいように見えたけど」
　途端に、楓は口を尖らせた。
「失礼ね。それでは、私の胸が小さいみたい」
「小さくはないよ。それに、女人の胸は夜毎、こうすれば育って豊かになると聞いたことがある」
　生温かな舌で乳暈の回りをゆっくりとなぞられ、下半身に言いしれぬ痺れがひろがる。楓はまた腰を浮かした。
「時繁さま、髭が伸びているのでしょ？　何だかちくちくするわ」
　今や執拗な愛撫で紅く熟した果実のような色合いを見せる乳首に時繁の少し伸びた髭が当たる。くすぐったいのと感じするのと両方で、楓は堪らず笑いながら身をよじる。
「そろそろ行くぞ」
　楓の気が逸れた隙を見計らい、時繁が大きく割り裂いた両脚の間に陣取った。そのまますんなりとした両脚を肩に担ぎ、ひと息に押し入ってくる。
「あ？　ああーっ」
　突然、激痛が蜜壺から下半身を貫き、楓の眼に涙が溢れ出した。
「痛い、痛」
　楓があまりに泣いて痛がるため、時繁は不安そうに訊ねてきた。
「そんなに痛いかい？」
　楓はしゃくり上げながら頷いた。
　それから時繁は最初のようにひと突きで入ってこず、慎重に楓の表情を確かめながら少しずつ挿入ってきた。楓が少しでも痛がったり身を捩れば、覗き込んで気遣う言葉をかけてくれた。
　しかし、時繁の言い聞かせたように、快感はいつまで経っても訪れず、痛みだけが長引いた。痛みのあまり溢れる涙を堪えて健気に耐え続けている楓の様子は彼にはちゃんと判っていたらしい。
　かなりの後、時繁が楓の頭を撫でた。
「今夜はこれで止めよう。俺が幾ら気持ち良くても、お前が痛いばかりでは辛いだろう？」
　労りの言葉をかけてくれる彼は本当は最初のようにひと息で挿入したいのに、我慢してゆっくりとしか動いていない。
　楓はできるだけ自分の笑顔が不自然に見えないように祈りながら微笑んだ。

「大丈夫です、何ともないから。ちゃんと最後までして下さい。時繁さまのお嫁さんにして」
「楓、お前ー」
　時繁が息を呑んだ。楓は一糸纏わぬ姿で白い身体を彼にさらしている。豊かな丈なす黒髪は扇のように夜具の上にひろがっている。その姿は何とも扇情的で男心をそそろってやまない。時繁は傍に散らばっていた小袖を拾い、楓の裸身を覆った。
「お前の身体は今夜はこれ以上は目の毒になりそうだ」
　だが、今度は楓が自らその小袖を取り去った。
「時繁さま、お願い」
　懇願する眼許がまた露の滴を宿してきらめいている。
　時繁はそれでも躊躇った。
「良いのか？　今ならまだ途中で引き返せる。挿入っているのは半分ほどだから。だが、これから先に進めば、俺は止められない。楓が泣いて嫌がっても止めて欲しいと頼んでも、俺は止めてはやれないぞ、それでも良いのか？」
　最後の言葉で、時繁が単に楓の痛みのことだけでなく、彼との結婚ー時繁と生きる道を選ぶことそのものについても今なら引き返せると警告しているのが判った。
「今更、あなたがここで止めてしまった方が私は哀しいわ」
　何もかも棄てて選んだ道だから、あなたと生きたいと願い、生まれてから十六年間過ごしてきた家もたった一人の父親ですらも棄ててきたのだから。
　だから、私にこの道を選んだことを後悔させないで。
　楓の瞳の奥に閃いた決意を見たのか、時繁は頷いた。
「判った、お前が今夜、俺を選んでくれたことを後悔させないようにする」
　その言葉が終わらない中に、今度こそ時繁は一挙に挿入ってきた。深々と最奥まで刺し貫かれ、楓は想像を絶する痛みに涙を流した。しかし、それは痛みからくるものだけではなく、愛しい男と結ばれた歓びの涙でもあった。

いつしか風が出てきたのか、戸外では風が唸り吹きすさぶ音が聞こえていた。この嵐で、八分咲きになった桜も散るかもしれない。
楓の瞼の向こうでは、嵐に翻弄される薄紅色の花びらが舞い踊っていた。時繁の動きは実に多彩を極めた。あるときは腰を回しあるときは彼自身を抜けそうなほど引き抜いて、またひと息に差し貫く。
彼は直に楓自身の感じやすい箇所を知ったらしく、楓が反応を返した場所を執拗に責め立ててくる。そんなことを繰り返している中に、痛みしかなかった感覚の中に、次第にくすぐったいような―いや、くすぐったいのとも違う心地良さのようなものが混じり始めた。
時繁は注意深く楓の様子を見ながら動いている。最後に時繁が楓の最奥の最も感じやすい壁めがけて突き上げた瞬間、ひときわ大きな快感の波に見舞われた。瞼の中で雪のような薄紅色の花片が降り注ぎ、花びらと戯れ合うように無数のきらめく蒼い蝶が飛び交っている。
蝶と花びらはやがて煌めく光の塵となり、大きく一つの輪となり旋回していきながら消えていった。
果てのない交わりの最中、ついに意識を手放した楓を時繁は切なげな瞳で見つめた。
誰かを愛することは素晴らしいことである反面、怖ろしいこと、危険極まりないことでもある。大切な存在を得た時、人はそれを失えば、どうなるのか？
自分にはいまだ果たすべき復讐がある。既に彼は楓が頼朝第一の近臣、河越恒正の娘であることを知っている。この世で最も愛しい女の素性を知りながら、俺はそれでも復讐を止めることはできないのだ。
自分の真実の姿を知れば、楓はきっと彼への信頼を棄て、憎むようにさえなるだろう。それが彼には何より怖ろしい。漸く見つけた愛する者、家族と呼べる存在を失うのがよもや、こんなにも怖いものだとは考えたこともなかった。
思えば、自分はあまりにも長い間、深すぎる孤独の中で生きてきたかもしれない。時繁は深い息をつき、ゆるりと首を振った。
―お前が俺の正体を知って離れてゆこうとした時、俺はお前を潔く手放せるだろうか？
彼は妻となったばかりの愛する女の髪を宝物のように撫でる。初めて男を受け容れる娘をさんざん啼かせ、挙げ句には許しを請うまで責め立てた。
楓の目尻に堪った涙の雫を親指の腹でぬぐい、時繁はもう一度、切なげなまなざしで妻を見つめた。
彼は立ち上がり、小さな小屋に一つしかない明かり取りの窓から外を覗いた。海はどす黒く染まり、今は海鳴りよりも吹き荒れる風の音が耳をつんざく。
あれほど穏やかな月夜であったのが、嘘のような荒れようだ。自分たちが結ばれた夜が滅多にない嵐とは。暗い色に染まった荒れる海は自分の心のようだ。
憎しみに満ちた自分の心。もう一度、背後を振り返り、楓の安らいだ寝顔を見る。何があっても、この女だけは哀しませたくない、裏切りたくない。
だが、自分がこれからなそうとしていること、なさねばならぬことは明らかに彼女への裏切り行為となろう。かといって、無念の想いを抱き海に散っていった祖母や伯父、一門の恨みを今

になって忘れることもできはしないのだ。
　夢の中で楓は天(そら)を駆けていた。いや、天というよりは宙(そら)と形容した方が良いのだろうか。普段眼にするよりは何倍も濃い藍色の蒼空を大きな龍が翔けている。
　龍はよく屏風絵などで見るものと形は似ているが、はっきりと違いは認識できる。体全体が透き通るようで、大きな体のところどころに銀色の鱗が燦然と輝いている。その鱗が濡れたように輝いているため、龍全体がしっとりと濡れているように見えた。
　龍の周囲を蓮の花びらが舞い、そのはるか彼方には蒼い月が丸くくっきりと浮かんでいるのが見える。
　これは、水龍。
　火を司る火龍に対し、水を司る水龍ではないか。水龍は気持ち良さげに巨躯をくねらせ、蒼空を旋回し泳ぐ。時折、銀色に光る角と髭を震わせ、回りを揺るがせるような雄叫びを上げる。
　しかし、不思議なことに、その魂を揺すぶられるような咆哮を聞いても、楓は少しも怖ろしいとは思わず、むしろ、心が凪いだ海のように静まってゆくのを感じていた。
　更に面妖なことは続く。龍の背に突然、一人の少年が出現したのである。少年はまだ元服前、十歳ほどで童水干姿だ。深紅の小袖袴に白い水干を纏っている。貴人が纏う色だ。
　美しい少年が琵琶をかき鳴らし始める。
　ふいに玲瓏とした声が哀切な琵琶の音色に乗って流れてきた。

祇園精舎の鐘の声
諸行無常の響きあり
沙羅双樹の花の色
盛者必衰の理を表す
おごれる者も久しからず
ただ春の夜の夢のごとし
楓の眼に熱い滴が滲んでいた。何という哀しい詩だろう。これは確かに〝平家物語〟ではないだろうか。
源氏の宿敵平家が滅びたのは今から十三年前のことになる。平家滅亡を決定的にしたのは源頼朝の異母弟義経だった。だが、滅ぼしたのは義経でも、すべての采配をふるい義経に平家追討を命じたのは鎌倉の頼朝だ。
そして、平家滅亡に大功のあった義経を頼朝は後に用済みとばかりに討ち滅ぼした。平家にとって源氏は百年千年経とうが、けして許せない宿敵に相違ない。頼朝の第一の側近として長年仕え続けてきた父河越恒正もまた紛うことなく源氏の一党であり、平家滅亡にはひと役もふた役も買っていた。
平家物語はこの悲運の平家一門の栄枯盛衰を描いた軍記物語である。
楓自身は源氏側の娘として生まれたものの、平家滅亡のときはまだ襁褓の取れぬ赤児に過ぎず、そのときのことは物語としてしか知らない。
が、今、この少年が切々と歌い上げる平家物語からは、無残に討ち滅ぼされた平家一門の深い悲嘆が伝わってきて、哀しみに同調するあまり膚が粟立つほどだった。
楓が少年の歌声に涙しているその最中、ふいに勇壮な龍の姿も少年もかき消えた。代わりに蒼空にぽっかりと浮かんでいるのは透き通った光り輝く手のひら大の玉。
玉は水晶のように見えるが、ゆらゆらと浮かび漂っている。息を呑んで見つめていると、やがて小さな光る玉はスウーと流れて見守る楓の胎内へと入った。
ーえ？
楓は愕き、自身の身体を見つめるが、夢の中では実体がなく、楓の意識は感じられても姿は見えない。戸惑っている中に、眩しい光が眼前に洪水のように溢れ、思わずその眩しさに眼を閉じた。
突然の覚醒が訪れ、楓は長い睫を震わせた。そっと眼を開くと、褥の上に上半身を起こす。小屋の東側には、小さな明かり取りの窓がついている。その窓の戸がわずかに開いて、そこからひとすじの光が差し込んでいた。
改めて自分が何も身につけていないのに気付き、楓は頬を赤らめた。褥の傍に散らばっていた下着や小袖を手早く身につけ、帯を締めた。
あれほど荒れ狂った夜は一夜して鎮まり、空も海も穏やかに凪いでいる。聞き慣れた潮騒の音がどこか懐かしく耳に響き、まるで子守歌を聞いた赤児のように心が安らいでいった。
すぐ傍らでは、時繁が熟睡している。何もかも委ねて眠り込んでいるのは、彼が楓を信頼して

くれている証だと思うと、彼への愛しさがふつふつと湧いてくる。
　楓は眠っている時繁を起こさないように気を付け、軋む戸をそっと開けて外に出た。二人が初めて出逢ったあの場所ー浜辺まで歩く。
　海は今日も大きく偉大だ。その上にひろがる空は東の端から序々に茜色に染まり始めていた。空全体はまだ夜の名残を残し、薄い藍色がひろがっている。夜明けが近いのだ。
　楓は淡く微笑し、次第に明け初(そ)めてゆく黎明の空を眺めた。ふいに背後から抱きしめられた。
「ー時繁さま？」
　時繁の逞しい胸が背中に当たっている。この温もりがこんなにも懐かしく愛おしいものになるとは思いもしなかった。
「目覚めたら、楓がいない。俺を置き去りにして、河越の屋敷に戻ってしまったのかと思った」
　彼らしくない気弱な呟きに、楓は嬉しいような困ったような気持ちになり、眉尻を下げた。
「どこにも行かないでくれ」
　時繁が顎を楓の頭に乗せるのが判った。より強く抱きしめられ、楓は深く頷いた。
「私はどこにも行きません。これからは生きるときも死ぬときも、時繁さまと一緒、あなたさまの隣が私の生きてゆく場所です」
「後悔はないか？」
　いつもは自信に満ちた物言いをする彼には珍しく、今朝の彼は気弱だ。楓は殊更明るく微笑んだ。
「何度も言わせないで下さい。私は時繁さまを心よりお慕いしておりますから、たとえ、あなたさまが出てゆけと仰せになっても、あなたさまの傍を離れません」

「可愛いことを言うな、楓は。その昔、唐という国には玄宗皇帝という悪名高い帝がいたそうだ。玄宗は楊貴妃という稀代の妖婦に惑わされて国を傾けたというが、俺も楓の色香に血迷って、とんでもない腑抜けた男になりそうだよ」
「まあ、私は稀代の妖婦でもないし、そもそも殿方を惑わせるほどの色気なんてありません」
　呆れて言いながら、ふと違和感を憶えた。何故、一介の漁師が唐のいにしえの皇帝の逸話など知っているのだろうか。が、すぐに彼が元々は武家の生まれだったと語っていたのを思い出す。
　しかし、彼はあの時、下級武士だと言っていたはず。下級武士にすぎない生まれの者がいきなり外つ国の皇帝について語るというのも不自然な気がする。
　と、楓の思考はそこで中断された。今、輝く日輪が東の空を黎明の色に染めながら、まさに天高く昇ってゆこうとしている。
「綺麗」
　思わず呟いた彼女の横で、時繁もまた感慨深そうに朝陽を眺めていた。
「結婚しよう、楓」
　楓はハッとして時繁を見た。彼は晴れやかな表情で生まれたばかりの輝く太陽を見ている。
「祝言も何もしてやれない。でも、今日から俺たちは夫婦(めおと)だ」
「はい」
　楓も深く頷いた。光り輝く太陽を見ている中に、昨夜見た不思議な夢のことを思い出し、楓は問わず語りに口にした。
「時繁さま、昨夜、とても不思議な夢を見たのです」
「一夢？」
　時繁が興味をそそられたようにこちらを向く。
「水龍が天翔る夢といえば、お笑いなりますか？」
「水龍一」
　彼が眼をまたたかせた。楓は夢の一部始終をかいつまんで話した。
「貴人の盛装をした童子が琵琶を弾きながら平家物語を語ったと」
　最後に水龍が光り輝く玉となり楓の胎内に入ったと聞いた彼は息を呑んだ。
「一」
　ふいに黙り込んだ時繁は何かをしきりに考え込んでいるようだ。楓は不安になった。
「私、何か良くないことを申し上げたのでしょうか？」
「いや、別にそんなことはない。昨夜は楓も色々とあったし、気が動転していたから、あり得ない夢を見ただけだろう。気にするな」
　一瞬の後、時繁はもう屈託ない彼に戻り、優しく楓に微笑みかけたのだった。

　源氏の一族

その日から、楓の新しい日々が始まった。時繁は得難い良人となった。妻を労り、声を荒げることなどなく、よく働く。夜は楓を情熱的に幾度も求め、時には暴走しすぎて楓を泣かせることもしばしばだったが一、それも良人に愛されている裏返しだと思えるのも、楓もまた時繁に腑抜けるほど惚れているからだろう。
　結ばれてひと月が経った頃、二人は連れ立って町に出かけた。楓は人眼に立ってはまずいため、滅多と町には出ない。今のところ、河越家では楓は急病にて伊豆で療養中と苦しい言い訳をしているらしい。北条との縁談はこれにより、無期延期、つまり事実上の破談となったと聞いた。
　時繁は毎日、漁に出て獲った魚を町へ出て売りさばいてくる。その折々に得た情報では、河越恒正は突如として行方知れずになった娘をしばらくは手を尽くして探させていたらしい。しかし、娘の行方は杳として知れず、探索は十日余りで打ち切られたとのことだった。
「さつきは？　さつきはどうなったか判りませんでしたか？」
　楓は時繁に勢い込んで訊ねたけれど、彼は申し訳なさそうに首を振った。
「悪いが、乳母どのの消息は知れなかった」
　魚の行商をしながら町を歩くため、比較的情報を手に入れやすい立場ではあるが、あまりに執拗に河越の娘のことばかりを訊き出していては、逆に怪しまれかねず、そこから足が付いてしまうこともある。
　それを考えれば、これ以上、踏み込んで訊ね回るわけにはゆかなかった。さつきは北条時晴との婚礼前夜、楓を意図的に逃がした。仮に故意ではないと恒正が認めたとしても、乳母として姫君監督不行届の責任は大きいだろう。
　何らかの処罰を受けたのは明白で、楓としては、それが知りたかった。が、時繁の立場を思えば、これ以上の無理は言えない。また、それが原因で河越の父の手の者に見つかり、無理に時繁と引き離されることになっては悔やんでも悔やみきれない。
　その日は、ひと月ぶりの外出で、楓も何とはなしに浮き浮きと心が弾んでいた。河越の探索が無くなって既に半月は経過している。用心のため、楓は市女笠の周囲に紗(うすぎぬ)を垂らしたものを目深に被り、漁師の女房らしい粗末ななりをしていた。
　もっとも、時繁と暮らすようになって以来、文字どおり漁師の女房だったから、暮らしに合った質素な小袖しか買えなかった。屋敷を出た時、身に纏っていた小袖は上物だったため、古着屋で売ることも考えたが、そこからまた河越の父に居場所を知られては困ると止めた。
　用心には用心を重ね、時繁は目抜き通りには行かず、あまり人通りのない道を選んで歩いた。それでも、道の両脇には露店が居並び、物売りのかしましい声が聞こえている。
　鎌倉こそが今は都とは、誰もが認める動かしようのない事実であった。市の賑わいや道をゆく人々の活気に満ちた表情はこれから伸びてゆくこの東の武士の都のゆく末を示し、ことほいでいるかのようである。

　楓の手を引いて歩いていた時繁が突如として止まった。
「何か欲しいものはない？」
　楓は眼をこらして紗の向こう側を透かし見た。見れば、正面には小さな露店があった。台の上に様々な櫛が並んでいる。
「可愛いわ」
　傍らの時繁を見上げて微笑んだ。
「では、一つ買ってあげよう」
　楓は慌てた。
「いえ、要りません。大丈夫です」
　魚を獲って稼ぐ日銭は知れている。そんな贅沢品は買えないと言おうとしたのに、時繁は有無を言わせず手に取った櫛を買い求めていた。
「可愛い奥さんに」
　差し出された大きな手のひらには不似合いな小さな櫛は、黒塗りで白く桜が描かれていた。一箇所だけだが、小粒の真珠もはめこまれている。高かったに違いなく、楓は胸が熱くなった。
「ありがとうございます。大切にしますね」
　櫛を押し頂くようにして眼を潤ませる妻を、時繁は切なげに見つめる。
「済まない、俺が甲斐性なしなばかりに、楓には辛い想いばかりさせる。お前も年頃の娘だ、綺麗な着物や紅も簪も欲しかろうに」
　楓は真顔で首を振った。
「時繁さま、そんなことはありません。私は時繁さまのお側にいられるだけで幸せなのです。それに、私は河越の屋敷にいた頃から、綺麗な小袖にもお化粧にも興味はありませんでした。ですから、どうか、そんなことでお悩みにならないで下さい」

「楓は優しい娘だな」
　時繁は泣き笑いの表情で言った。
「だが、俺も男だ、たまには楓に頼られたい。いつも我慢ばかりせずに甘えてくれ」
「はい」
　楓は元気よく頷くと、櫛屋の傍らで野菜を売っている老婆を見つけて歓声を上げた。
「時繁さま、見て。大根がたくさんあるわ。今日は時繁さまが獲ってきた鰯と大根にしまょう。大根は少し辛めに煮れば、お酒のつまみにもなりますよ？」
　言い終わらない中に老婆に近づき、山盛りになった大根を間に、にこやかに話している。
「閨の中では随分と大人になったのに、昼間は最初に出逢ったときと変わらぬな、まるで子どもだ」
　時繁は呟き、妻と過ごす毎夜の濃密な時間を思い出し、それから我に返った。二十歳で所帯を持つまでにむろん女性経験はあった。数度関係を持ったのはもちろん素人女ではなく、辻で春をひさぐ女であった。
　だが、時繁は特に自分が好色だと思ったことはないし、適度に欲求が満たされれば無理に女を抱きたいと思ったことはない。なのに、楓が傍にいると、つい触れたくて手を伸ばし、触れれば、そのみずみずしい肢体を抱きたいと思う。しかも、ひとたび火が付けば楓が泣いて許してと泣くまで、ひたすらその身体を求めずにはいられない。
　だとしたら、自分がよほどの好色漢だったのか、それとも、楓だから泣かせるまで烈しく求めるのかー。恐らくは後者なのだろうが、どちらにしても、楓にとっては迷惑な話かもしれない。
　それでも、妻と過ごす今夜を想像しただけで、あられもない話だけれど、身体がすぐに反応してしまう。交渉成立したらしい。楓が腕に大きな大根を二本抱えて走ってくる。
「おい、大きな大根を抱えて往来を走ったら危ないぞ」
　過保護ぶりを発揮し、時繁は妻の手から大根を造作もなく受け取った。
「時繁さま、以前から申し上げようと思っていたのですが、私はもう十六です。子どもではないのですゆえ、子ども扱いはしないで下さい」
　楓が頬を膨らませるのに、時繁は笑った。
「ほれ、そういうところが子どもだというんだ、すぐに拗ねるだろう」
　やわらかな頬を指でつつくと、更に楓は膨れる。
「知りません」
　怒った楓は一人で先に歩いていった。時繁は慌てて追いかけてゆく。
「お前が子どもでないことはよく判ってる」
「本当ですか？」
　期待に込めた眼で見上げる無垢な瞳に、時繁は耳許で囁いた。
「閨で見る楓の身体はどう見ても子どもじゃない、立派な大人だ」
　楓は瞬時に真っ赤になり、拳を振り上げた。
「酷い、それでは私が身体だけ大人で、頭の弱い娘のようではありませんか！」
　可愛い妻は本気で怒っている。大きな黒い瞳には涙さえ浮かべていた。

　時繁は狼狽える。楓に泣かれるのはいちばん弱いのである。
「す、済まん。別にそういう意味で言ったのではないんだ」
　楓の振り回した拳が時繁の腕に当たった。
「痛ぇ。この暴力女め、今夜はお仕置きだ。覚悟しておけよ？」
　わざと蠱惑的な声音で囁くと、楓は熟した林檎のように紅くなる。楓が今夜の夫婦の営みを想像しているのは明らかだ。
　泣かせて嗜虐的な歓びを感じるのは閨の中だけで良い。しかも、楓は彼のために慣れない料理も頑張って拵えている。少しでも彼を歓ばせようと奮闘しているのはいじらしいほどだ。何しろ河越家の姫として大切に育てられた楓には料理をしたことがあまりない。
　今でも、砂糖と塩を間違えたりすることは日常茶飯事で、彼はひと口食べただけで吹いてしまいそうな代物を食べさせられている。それをさも美味しそうに食べるのは、いかに楓を愛している時繁にも至難の業だ。
　今夜も彼のために腕を振るおうと期待に眼を輝かせている楓に、実は夕餉よりはその後の夫婦の密事の方が愉しみなのだとは口が裂けても言えなかった。そんなことを口にでもすれば、楓は本当に怒って出ていってしまうかもしれない。どこまでも楓に弱い時繁である。
　二人はいつしか喧嘩していたことも忘れ、楓は時繁の腕に自分の腕を絡めて、老婆が大根の他に青菜もおまけしてくれたのだと得意げに良人に報告した。寄り添って歩くその姿は、どこから見ても仲睦まじい若夫婦そのものだった。

楓は毎日、幸せだった。愛する男の傍にいられるのがこんなにも幸せだったなんて、考えたこともなかった。父の命じるままに北条時晴に嫁がなくて良かったとつくづく思う。
町に出かけた数日後の昼下がり、楓は時繁の着物を繕っていた。こう見えても、料理は苦手だけれど、裁縫は得意なのだ。小袖も縫おうと思えば縫える。時繁のためにも新しい小袖と袴を用意してあげたい。それも漁師が着るような簡素のものではなく、武士が着るような、それなりのものを。
元々、彼の両親は武家だと言っていた。そんな彼に一度だけでも武士としての晴れ着、狩衣を着せてあげたい。でも、今は彼は漁師なのだ。余計なことをするとかえって怒るだろうか。それでも、楓は狩衣を着て盛装した彼を見てみたいと思った。
だが、そのためには布を買う必要がある。時繁は楓に町で魚を売ってきた金はすべて渡してくれている。その金はたいしたものではないが、時繁は楓の好きに使って良いと言ってくれていた。かといって慎ましい暮らしを維持しなければならないと判ってるのに、無駄遣いはできない。なので、日々の糧を得る以外に使うことはなかった。
時繁は元々、着る物に気を遣う質ではないようで、持っているのは粗末な小袖と袴が数組だけ、それをすべて繕うのに時間はかからなかった。まだ繕うものがないかと楓は部屋の片隅の柳行李に近づいた。
既に繕い終えた着物は今朝、時繁が漁に出る前に自分で出していったものばかりだ。まだ行李の中に何か残っていないかと蓋を開き、覗き込む。と、衣類ではなく、使ってはいない薄い夜具が二枚重ねて入れてあった。
夜具をのけると、その下からは立派な黒塗りの箱が突如として現れ、楓は眼を瞠った。
「これは何ー？」
思わず声に出して言ってしまい、慌てて周囲を見回す。誰がいるはずもなかった。
黒塗りの箱はかなりの大きで、縦長だった。表には蒔絵細工で咲き誇る牡丹とつがいの蝶が描かれていた。いずれ有名な職人の手になるものに違いないことは判った。
興味を惹かれて蓋を開ければ、中からは更に古びて色褪せた布に幾重にもくるまれた品が現れる。武家の娘として生まれ育った楓には、そも何なのか、おおよその見当はついた。
恐る恐る手を伸ばしたのと、小屋の扉が勢いよく開いたのはほぼ時を同じくしていた。
「何をしているんだ！」
血相を変えた彼が駆け寄り、楓の眼前で蓋の開いたままの行李や蒔絵の箱と楓を鋭い眼で交互に見やった。
「何故、勝手に開けた」
時繁は楓の両肩を掴み、揺さぶった。
「よもや中身を見たのではないだろうな」
あたかも楓が大罪を犯した罪人のように剣呑なまなざしで見つめてくる。その酷薄とさえいえるほどの表情はどこまでも冷め切っていて、楓がよく知る良人とはまったくの別人だ。
「私は一中身は見ておりません。そんなに大切な品だとは知らず」
楓は別の男のようにしか見えない時繁が怖くて、怯えた。小刻みに身体を震わせて涙ぐむ妻を

しばし時繁は惚けたように見つめた。
　短い静寂が流れた後、時繁がポツリと呟いた。
「悪かった」
　時繁は低い声で言い、楓を引き寄せた。
「済まん、大きな声を出したりして、怖かったろう。別に楓を怒ったわけじゃない。ただ、もう今後は、あの行李は開けないでくれ」
「何か大切なものなのですね？　私には刀のようにお見受けしましたけれど」
　つい訊かずにはいられなかった。普段は穏やかな海のような男を瞬時にあれほど惑乱させるものとは何なのだろうか、知りたいという欲求には勝てなかった。
　言った後で、また機嫌を悪くするかと思いきや、彼は小首を傾げて意外にも教えてくれた。
「流石は河越恒正どのの娘、武家の姫だけはある。やはり、バレてしまったか」
　それから彼は一瞬だけ遠い眼になった。
「これは祖先から受け継いだ大切な刀だ」
「家宝のようなものですか？」
　恐る恐る問えば、これにも時繁は笑顔で頷いた。
「まあ、そのようなものだ。それゆえ、今後は何があっても、あの行李を開けてはならない、約束してくれるか？」
　楓は時繁の深い瞳を真っすぐに見つめた。
「判りました。お約束致します。旦那さま、私は良人が見るなと言ったものを無理に見ようとは思いませぬ、どうか楓を信じて下さいませ」
　時繁が破顔し、楓の髪をくしゃっと撫でた。もう、いつもの優しい彼に戻っている。楓は心の底から安堵して、時繁の広い胸に身体を預けた。

　その日、楓は町に一人で出かけた。もちろん、時繁には内緒である。心配性の彼に一人で出かけるなどと言えば、反対されるのは判っている。
　楓が時繁と暮らすようになってはや、ふた月を数えていた。海辺の家で初めて結ばれたのはまだ桜が咲く時分だったのに、今はもう水無月に入っている。
　ひと月前、時繁に連れられてきた時、櫛屋の斜向かいに古着屋があったのを記憶している。あの店では布も多少は商っていたようだから、あそこで時繁の狩衣を仕立てる布を求めてはどうかと思案したのである。
　古着屋の主人は五十前後の痩せた男だった。丁度、昼時なのか、竹包みを開いて大きな握り飯を頬張っているところだ。
「おじさん、こんにちは」
　愛想よく声をかけると、座っていた主人は細い眼をちらりと動かして楓を見上げた。その前には十数着はある古着がかかった棒が立てられている。傍らの台に無造作に単布が積まれていた。
「お昼時にごめんなさい。少し良いかしら」
　主人は肩を竦めた。
「客に来てくれる時間を指図できるほど、うちは儲かっちゃいないからな」
　ニッと笑った口の中、前歯が欠けていた。
「今日は古着ではなくて、布を見せて頂きたいんだけど」
「判った、あるのはこれだけだが、良かったら、見ていってくれ」
　見かけは無愛想で取っつきにくいが、話してみると人の好さそうな男である。丁度、河越の父と同じ年頃なので、楓はつい父のことを思い出してしまった。
　そのときだった。斜向かいから、腰の曲がった老婆がこちらに近づいてきた。
「徳八さん、気張って商いしとるかね」
　楓も見憶えのある老婆だ。あの大根を買った野菜売りである。
　二人は親しい様子で、近況を賑やかに喋っている。その中、楓の耳に飛び込んできた科白に、愕然とした。
「そういえば、頼朝さまの第一のご家来衆といわれる河越さまが病に倒れなさったというがね」
　思わず老婆に取り縋り、詳しい話を聞きたいと思ったが、ここで不必要に自分の存在を印象づけない方が良い。楓は布を選ぶふりをしながら、細心の注意を払って二人の会話に集中した。
　どうやら老婆は時折、河越家に立ち寄り、台盤所の賄い方が彼女から野菜を買い上げているらしい。それで多少は河越家の内情に通じているのだ。幸いなことに、主君の娘である楓は厨房に近づくことは殆どなかった。
　だからこそ、老婆が楓の顔を知らないのだ。
「それは大変ではないか。河越さまといえば、北条さまと並んで頼朝さまの懐刀と呼ばれているだろうが」
　主人が言うのに、老婆はしたり顔で頷いた。
「頼朝さまに取り入ろうとする輩は多いが、河越さまがおいでじゃから、なかなか悪い虫は寄りつけんと専らの噂だからのう。何せ、河越さまは謹厳実直を絵に描いたようなお方、己が栄達し

か頭にない連中とは違い、頼朝さまのおんために動かれる。頼朝さまもそのことをよおくご存じなのじゃろうて」
　市井の老婆には不似合いな鋭い見解を披露し、老婆は声を落とした。
「何でも河越さまの姫さまがふた月ほど前にゆく方知れずになったとか。お屋敷では病気で伊豆にお行きだとごまかしとるらしいが、賄い方のお喋り女がわしにそっと教えてくれた極秘情報じゃ」
　古着屋は細い眼を見開いた。
「おお、そういえば、あの北条の馬鹿殿に河越の姫さまが嫁ぐという話があったがや」
　老婆は面白い芝居を見たかのように愉快そうに笑った。
「マ、あの女狂いの若さまにもちっとばかり良い薬になれば良いがの」
「ならば、姫さまは馬鹿殿がいやで、逃げ出したと？」
　老婆は鼻を鳴らした。
「あのような女の尻を追いかけ回すしか能のない阿呆男は、わしでもご免じゃ」
　と、古着屋が吹き出した。
「しかし、言わせて貰えば、あの若さまも婆さんには流石に手は出すまいて」
　老婆は真顔で首を振る。
「いやいや、あの阿呆は女であれば、皺だらけの婆ァであろうが襁褓の取れぬ赤児であれば、何でもござれよ」
「そいつは厄介だ」
　古着屋はおどけたようにピシャリと我が手で広い額を叩いた。随分と芝居がかった仕種だ。
「マア、あの倅にはとかくの悪評があるし、姫さまとの縁談が持ち上がる前から既に側妾との間に子が三人もおるというぞ。そのようなうつけに嫁がずに済んで、姫さまは幸いじゃった。河越の殿さまも気の毒に、ゆく方知れずの姫さまを案ずるあまり、気鬱の病に倒れたというからの」
　それから少し、別の話をして、老婆は漸く自分の持ち場に帰っていった。
　古着屋の主人が楓に声をかけてきた。
「待たせたな、で、決まったかい？」
　楓は選んでおいた単布と引き替えに銭を払い店を後にした。

　浜辺の小屋までの道のりをどうやって帰ったのかも判らなかった。それから数日というもの、楓は沈み切っていた。そのことに敏感な時繁が気付かぬはずがない。
　五日目の夜、夕餉がいつもより早くに終わった後、楓は仕立物の続きをしていた。むろん、時繁の狩衣を縫っているのである。
「一えで、楓」
　焦れたような声に、楓は弾かれたように顔を上げた。
「あ、どうかしましたか？」
　眼前に時繁の整った面が迫っていて、楓は慌てる。時繁は苦笑していた。
「お前、俺に何か隠し事をしているな。先刻から幾度呼んでも、返事をしない」
「そんなことはありません」
　時繁の深い瞳には何もかも暴かれてしまいそうで、楓はさっと顔をうつむけた。
「嘘をつけ。楓がここ数日、ずっと沈んでいたのは知っているぞ」
　楓が黙り込んだのを見て、時繁はあからさまな溜息を吐いた。
「楓が強情なのは知っている。だが、俺はこれでも、いつもそなたの傍にいて誰よりもお前を見ている。お前がいつもと違うのくらいは判る」
　楓は胸をかすかに喘がせ、顔を上げた。その眼に見る間に大粒の涙が溢れたので、時繁は動転した。
「どうしたんだ！　俺の言い方はそんなにきつかったか？　何も別に怒ったわけではなくー」
　楓の涙には弱い時繁は慌てふためいている。楓は首を振った。
「違うのです、そうではないのです」
　時繁がポカンとして楓を見つめる。
「なに？　俺のせいで、泣いたのではないのか？」
「実は数日前、町に出かけました」
　怒られることは覚悟で、楓は外出のことから、古着屋と老婆の話までを時繁に打ち明けた。
　時繁はじっと楓の話に耳を傾けていたが、すべてを聞き終えて難しい表情で腕組みをした。
「それで、楓はどうしたい？」
　え、と、楓は時繁を見返した。時繁が薄く笑った。
「あれほど一人で外出してはならないと言ったのに、楓が町に出かけたことも愕いたが、今はそんなことを話している場合じゃない。親父どのが病に倒れているというのなら、楓は帰りたいとそう思っているのではないか？」
　楓は大粒の涙を零しながら、烈しく首を振った。
「時繁さまは何故、そのような残酷なことを平然とおっしゃるのです？　私は河越の父も心配です。さりながら、時繁さまのお側を離れたくもない。時繁さまも今は父と同じくらい大切な方だから」
　時繁が淋しげに微笑む。時折、彼の美麗な顔にちらつく翳りがいっそう濃くなった。
「だが、親父どのが病に倒れたと知った今、俺はお前をここに縛り付けておくことはできない。楓、俺も辛いんだぞ」

　彼は小さく息を吸い込んだ。
「思えば、俺はいつかこんな日が来るとどこかで覚悟していたような気がする。大切な人、愛する者たちはいつも俺だけを置き去りにして去ってゆく。だからこそ、俺は長い間、誰も愛さず求めず、ひっそりと一人で生きてきた。だけど、お前に出逢って、楓を愛してしまった」
　楓は泣きながら時繁に縋り付いた。
「私はいや、時繁さまのお側を離れたくない。屋敷を出る時、父とはこれが今生の別れになると私も覚悟して出て参りました。ですから、屋敷にはもう戻りません。戻ったら、父の顔を見るだけでは済まないもの、父は必ず激怒して時繁さまと私の仲を裂こうとするでしょう。私はそんなのは耐えられません。時繁さまと離れるくらいなら、海に飛び込んで死にます」
　泣きじゃくる楓の背を撫でながら、時繁が低い声で言った。
「間違っても海に入ろうなどと言うな。楓は入水するのがどれだけ苦しいか、知らないだろう？
　水に飛び込んだ途端、呼吸もできなくなって、生きながらの地獄を見て本物の地獄に行くことになる。俺の大切な人たちも一祖母や伯父たちは入水して亡くなったんだ」
　楓は怖ろしい予感に顔を上げ、時繁を見つめた。
「もしや、時繁さまもその時、ご一緒に？」
　時繁がかすかに頷いた。
「何の因果だろうな、俺だけが一人、陸に打ち上げられて助かった。俺を助けてくれたのは流れ着いた先の漁師だった。最初は溺死した幼い子どもだと思い込んだそうだが、虫の息があったので、蘇生処置を施したのだと聞いた。俺は大量の水を吐いて、息を吹き返した。俺を助けてくれた漁師は本当に奇蹟のようなものだとその後、何度も言っていた」

　その漁師の養子となり、時繁はそこで成長したのだという。故あって十五の時、育ててくれた両親に暇乞いをし、ここ鎌倉の地に来たのだと語った。
「お前が行李の底で見つけた品は、俺が暇乞いを告げた時、両親が渡してくれたものだ。俺が流れ着いた傍に、これも同様に流れ着いていたそうだ」
　時繁が眼をしばたたいた。
「養父も養母も優しい人たちだった。あのまま漁師の倅として一生を終えれば、平穏な生涯が送れただろう。養父がよく言っていたよ。家宝の宝刀は持ち重りのするものなのに、海の底に沈まず俺と一緒にほぼ同時に見つかった。俺が助かったのと同じように、宝刀が俺とともにあったのも奇蹟のようなものだと笑っていたな。人倫にもとる行為を天はけして認めない、だからこそ、正当な宝剣の継承者である俺と共に宝刀が現れたのだと」
　楓は涙をぬぐった。
「時繁さまはきっと由緒ある武家のご子息なのですね。下級武士の子だというのは嘘。鎌倉には、何ゆえ来られたのですか？」
　時繁が楓を見つめた。
「宿願を果たすために」
　楓は何故か、時繁のその瞳を怖いと思った。何かを一途に思いつめたような光が閃くその瞳の底に燃えるのは間違いなく復讐の焔だった。
　時繁はそれからしばらく寝転んで眼を瞑っていた。眠っているのではないことは判っていた。思案の邪魔をしてはならないと楓は傍らで狩衣を縫い続けた。
　唐突に時繁が眼を開いた。彼は身を起こし、〝楓〟と妻の名を呼んだ。
「お前はどうしても俺と離れたくないと？」
　楓はコクリと頷いた。
「あなたさまにいつか申し上げました。たとえ、あなたが私に飽きて出ていけと仰せになっても、私は出ていきません」
　時繁が小さな声で笑った。
「俺がお前に飽きる日が来るはずがないだろう。俺はもう楓なしで夜は過ごせない」
　楓の白い頬に朱が散った。
「もう！　こんなときにご冗談は止めて下さい」
　頬を膨らませた楓に手を伸ばし、彼はいつものように人差し指でつついた。
「ならば、俺も共に参ろう」
「えー」
　楓は針を持つ手を止めた。
「俺は楓の良人だ、違うか？」
　茫然としている楓の顎先を掬い、時繁は軽く唇を触れ合わせ啄んだ。
「そなたが河越の者に戻るというのであれば、俺もついてゆく」
　楓は唇を戦慄かせた。愛する時繁がここまで言ってくれたのは嬉しい。けれど、河越の屋敷に脚を踏み入れて、時繁が無事でいられるとは思えない。楓は北条時晴との祝言前夜に屋敷を抜け

出し、時繁の許に走った。
　時繁は楓の氏素性、北条との縁組みを知った上で楓を抱いた。父がそれを知り、時繁を許すはずもない。まず彼の生命はないだろう。
「さりながら、時繁さま」
　何か言おうとする楓を時繁は眼で制した。
「もう、何も言うな。仮に親父どのが俺を殺せば、所詮は俺の命運もそこまで、早々に尽きる宿命だったということになる。天の導きが真にあるなら、俺はまだ死なない」
「本当によろしいのですか？」
　楓のまなざしに、時繁もまた、まなざしで応えた。それに、楓は判っていた。時繁は優しいけれど、その意思は誰よりも強固だ。最早、楓が何をどう言って説得したところで、時繁の意思を変えることは不可能だ。
「時繁さま」
　楓は濡れた瞳で良人を見上げた。
　せめて今夜だけは、何もかも忘れてこの男の腕の中にいたい。その想いが楓から恥じらいも何もかも消していた。
「抱いて下さい」
　その夜、二人はこれまで以上に烈しく求め合った。潮騒がかすかに鳴り響く浜辺の小屋で、二人は夜明けまで幾度も共に昇りつめ、互いを満たし合った。

復讐のとき

　先刻から、恒正は苦い薬でも飲んだような顔で端座している。二人きりになって、かれこれ四半刻になろうというのに、咳(しわぶき)一つしない。広い室内は、どうにもやり切れないほどの沈黙が張りつめていて、楓はこのままでは押し潰されそうだ。
　そっと隣の時繁を窺えば、彼の方は真正面を見据えたまま、これもきちんと正座している。その視線は上座の恒正に向けられているようで、その実は恒正よりやや外れていた。目上であり、初対面の相手をあまりに不躾に眺めすぎないようにとの配慮であることは判った。
　さて、これだけ細かな気配りのできる時繁を、父がどのように見るか。それだけは楓は気掛かりであった。
　既にこの前、時繁は父と二人だけで半刻ど話をしている。楓が時繁を伴い河越の屋敷に戻ったのは今朝のことである。門前払いを喰らわされるか、良くて自分だけが中に招じ入れられると覚悟していたにも拘わらず、あっさりと二人共に屋敷内に入ることを許され、拍子抜けした。
　が、逆に、何ゆえ、父が時繁を屋敷に入れたのか、その意図も計りかねた。最初に通されたのもこの部屋で、長らく待たされた後、漸く父が姿を現した。時繁も楓も平伏して恒正を迎えた。
　父はざっと二人を見下ろし、楓に向かって
―よく帰ってきた。
　それだけ言い、時繁に顎をしゃくった。
―少し、そちらの男と話をしたい。二人だけで話させてくれ。
　しまいはまた楓の方に向いて言った。
　刹那、楓は自分で思い返しても恥ずかしいほど取り乱した。
―それは何故ですか？　よもや父上は時繁さまを殺すおつもりでは。
　時繁は素直に恒正の言に従い、立ち上がった。
―少し父御と話をしてくる。
　楓に安心させるように微笑みかけたのだが―。楓は半狂乱になった。
―時繁さまッ、行ってはなりませぬ。
　時繁に取り縋り号泣する娘を恒正は呆れたように眺めていた。
―我が娘はそなたによほど惚れていると見える。さても、厄介なことになったものよ。
　時繁はいつものように楓の髪を撫で、優しく言い聞かせるように囁いた。
―私は死なない。ちゃんと楓の許に戻ってくる。
　楓は泣き泣き頷き、やっと時繁の小袖を掴んでいた手を放した。今日、時繁が纏っているのは楓が丹精込めて仕立てた狩衣だ。浅黄色に幸菱が散った柄で、少し精悍で端正な面立ちの時繁にはよく似合っている。
　その狩衣を着た彼を初めて見た瞬間は、息を呑んだほどだった。それほど時繁には生まれながらの品というものが備わっている。それは単に着物を上物に替えただけではない、彼という人間

の内側から滲み出る光輝のようなものであった。
　家宝の宝刀の正式な継承者という彼自身の言葉からしても、時繁はいずれ名のある武家の子息に違いない。楓にはある種の不安があった。
　時繁が幼い頃、入水したという話だ。時繁がいつ入水したのは判らないが、話しぶりから、まだ頑是ない幼子の頃ではないかと推察された。時繁がその年頃の時分は丁度、平家と源氏が闘った時期と一致する。更に入水といえば、平家が壊滅した壇ノ浦の悲劇を厭が上にも思い出す。
　もしや時繁は平氏の若君なのではないだろうか。その疑念が芽生えたのも当然ではあった。
―時繁さまは何ゆえ、鎌倉に来られたのですか？
　楓の問いに、時繁は間髪を入れずに応えた。
―宿願を果たすために。
　あの宿願というのが何を意味するのか。楓は考えるのも怖ろしかった。時繁が平氏の若君ならば、彼が最もこの世で憎むのは源氏だ。そして、楓の父恒正は明らかに源氏の将であり、楓は源氏方の娘であった。
　だから、楓は無理に時繁の素性について考えまいとした。
―時繁さまと離れて、生きてはいけませぬ。
　彼に告げた言葉は誇張でも何でもない。楓は今、彼と引き離されたら、生きてはいけないだろう。それほどに時繁を愛してしまった。
　結局、時繁は不安に怯える楓を優しく宥め、楓は父と別室に赴く時繁を大人しく見送った。恒正は時繁の一挙手一動を鋭い眼で注視していた。
　二人が去った後、入れ替わるように、さつきが現れた。放心したように宙を眺めていた楓はいきなり現れた乳母を惚けたように見つめていたが、やがて、その瞳に涙が溢れた。

―さつき。
―姫さま。
　二人はひしと抱き合い、泣いた。さつきが語ったところによれば、楓の失踪後、恒正は特にさつきを処罰することはなかった。むろん、恒正のことだから、さつきがわざと楓を逃したのは知っていたはずだが、表向きは乳母は姫君の失踪は知らず、姫一人が勝手になしたこととされたのだ。
―あの方が姫さまのお選びになった方なのですね。なかなか秀でた良いお顔立ちをなさっておられます。
　さつきに時繁を褒められ、楓は我が事のように誇らしくもあり、頬を染めた。そんな楓の髪ををさつきは愛おしむように撫でた。
―あのおん幼かった姫さまがこのように大人の女性の表情(かお)をなさるようになるとは、このさつきも歳を取るはずでございますよ。
―時繁さまは大丈夫かしら。
　それとなく胸の不安を訴えられるのも心を許したさつきだからだ。それに対して、さつきはにっこりと笑った。
―殿は姫さまをわざと逃した私でさえ、お咎めにはならなかったのです。大丈夫でございますよ、きっと、あのお方はご無事です。

　楓とさつきがそのような会話を交わしている頃、別室では恒正と時繁が対峙していた。
　恒正は鼻下にたくわえた髭を無意識に撫でつつ、下座で手をつかえる若者を見つめていた。
―この男、ただ者ではない。
　恒正は父祖の代から源氏に仕えてきた。頼朝には十代の頃から仕え、その流人時代も影のように寄り添ってきたのだ。いわば源氏の御家人の中でも筆頭格である。当然、頼朝の傍にあって、様々な労苦も重ね、人を見る眼も長けている。
　その恒正の眼に、時繁とい若者は到底、ただの漁師には見えなかった。慎ましやかにふるまっているが、生まれ持った気品や存在感は隠せるものではなく、隙のない身のこなしや鋭い視線は紛れもなく武士のものだ。
　だが、何故、武士が漁師と身分を偽っているのか。それが判らない。
　ただ、一つだけいえるのは、娘の楓がこの男を恋い慕っているという事実だけだ。楓が北条時晴との縁組みを嫌って蓄電したときは、たいそう怒りもしたが、今となっては、悪評しかない男に娘を無理に縁づかせようとした己れが招いた不始末だと反省している。
―仕方ない。楓があれほど惚れておる男をむざと殺すこともできまい。このまま追い払っても良いが、それでは楓は今度こそ自害でもするやもしれぬ。
　それにと、恒正は眼前の若者をつぶさに観察しながら考えた。
―この男、使いようによっては河越家の役に立つやもしれまいて。
　短い時間ではあったが、恒正は時繁の言動はずっと見てきた。他人の心を読むことに長け、物事の機微を鋭敏に察知することのできる男だ。

　だが、恒正はこの若者に腹の内をさらけ出すつもりは毛頭なかった。
―面を上げるが良い。
　その言葉で、漸く時繁は伏せていた顔を心もち上げた。
―何ともはや、我が娘を上手く手なずけたものよのう。
　聞きようによっては手練手管で娘を骨抜きにし誑かしたと時繁を侮蔑する科白とも取れたが、時繁の表情は微塵も揺るがなかった。
　彼の様子を見守る恒正の前で、時繁は淡々と言った。
―そのお言葉は私ではなく、他ならぬご息女を愚弄するもの。楓はあなたさまの娘であるとともに、既に私の妻にございます。妻を愚弄するようなお言葉はお慎み願います。
　その鮮やかな切り返しには、海千山千の恒正も唸った。
　そのひと言で、恒正の心は迷いなく定まった。
―我が娘と河越のゆく末をこの男に託してみようぞ。
　恒正は再び時繁を伴い、娘の待つ広間へと戻った。今頃、楓はこの男の安否を気遣い、やきもきしていることだろう。
　だが、掌中の玉と愛でる娘が突如として失踪してしまった後、父が味わった不安と絶望を考えれば、多少は楓をやきもきさせたところで罰は当たるまいと、およそ大人げないことを考える。
　それにしても、と、恒正は感慨深く思った。
　あの幼い娘が恋をするとは。先刻、時繁を別室に連れて行くと告げたときの娘の取り乱し様は尋常ではなかった。いかに娘がこの男に惚れているかを親として思い知らされた瞬間だった。
　昔から、楓は賢い子だった。親馬鹿であることは重々承知だが、それならば、恒正は父として娘の選んだ男に賭けてみようと思ったのである。

「楓」
　河越の屋敷に戻ってきてからの慌ただしい出来事を思い出していた楓は、父の声で現に引き戻された。
「はい」
　居住まいを正した娘に、恒正はわざと渋面を拵えて重々しい声音で告げた。
「時繁はなかなか見所のある若者だ。わしも思うこと言いたいことは山のようにあるが、既にこうなってしまったことを今更とやかく申しても致し方あるまい。また、男女のことはとかく思うようにはならぬもの。わしは時繁を選んだそなたを信じることにする」
　刹那、楓は眼を潤ませた。またたきをした瞬間、はらはらっと涙の粒が零れた。
「お父さま、本当にごめんなさい。祝言の前夜に逃げ出したりして、お父さまに恥をかかせて困らせてしまって、本当に申し訳ありませんでした」
　楓は涙を零しながら、その場で深々と頭を下げた。
　恒正は笑った。今日、初めて見る父の笑顔に、楓は胸が熱くなった。
　町の市で、野菜売りの老婆から父が病の床にあると聞いたときには愕いたが、意外にも恒正は以前より更にかくしゃくとしているようだった。後に判ったことだが、半月ほど前、恒正は急な食あたりで数日、寝込んだことがあった。
　普段が頑健そのものであるため、下々の使用人たちの間では、
一殿は姫さまのご不在で、気落ちのあまり床につかれた。
　ということになっていたらしい。
　野菜売りの老婆はその誤った情報をそのまま鵜呑みにして古着屋に喋った。それをたまたま買い物にきた楓が聞いたというわけだ。
　が、よくよく考えてみれば、その誤った噂のお陰で屋敷に戻る決意もでき、こうして時繁と晴れて夫婦になることを父から許して貰えた。人生、何が幸いするかは知れたものではない。
「北条家との縁組みをそこまでそなたがいやがってるとは思わなかったのだ。幾ら探させても見つからぬゆえ、自害でもして人知れず果てているのではと諦めていた。また、いずこでひっそりと生きておるならば、それでも良いともな」
　時繁のその言葉で、何故、楓失踪後の探索があんなにも早く打ち切られたかも判った。
　時繁は慈愛に満ちた父の顔で楓に言った。
「そこまでそなたを追いつめたと、わしはかえって自分を責めていたのじゃ」
「お父さま一」
　涙ぐんだ楓に、時繁は頷いて見せた。
　楓は少し迷った末、気になっていたことを口にした。
「北条さまの方は大丈夫なのでしょうか？」
　時政は〝鎌倉どの〟と呼ばれる将軍頼朝の義父であり、次代の将軍の外祖父である。その時政をさぞ怒らせ、ひいては河越氏に対する心証を著しく害したのは違いなかろう。
　皆まで言わずとも、恒正は楓の気持ちを察してくれたらしい。笑いながら首を振った。
「もう、良いのだ。時政どのにはさんざん嫌みを言われ、御所さまもご不快を示されていたの

だが、意外なところから助け船が出てな」
　楓は眼をまたたかせた。
「意外なところから？」
　恒正は破顔した。
「御台さまがお口添えをなさって下されたのだ」
「御台さまが―」
　楓は茫然として呟いたが、潔癖で神経質なところのある頼朝を政子は常にその傍らにあり、宥め、取りなしている。大らかな性格の政子ならば、あり得る話だと思った。
「さよう、御台さまが御所さまと時政どのに仰せ下さったのだ」
―殿、若い者たちの考えることは今も昔も同じにございますよ。
　訝しげな面持ちの頼朝に対して、政子は婉然と微笑んだという。
―私たちもその昔、父上がお決めになった縁談をふいにして、駆け落ちのように一緒になったではありませんか。思えば、あの頃が私の生涯でいちばん幸せな時期でもありました。歳を取れば若いときの情熱など忘れがちですが、時には思い出して若い者たちに情けを示してやるのも鎌倉どのとして、殿のご威光をますます高めることになりましょう。
　当時、伊豆の目代山木兼隆に嫁すはずだった政子は、祝言を目前にして嵐の夜、恋仲だった頼朝の許へ走ったという過去がある。当時としては非常に珍しい情熱的な恋愛結婚であった。
　また、傍らの時政に対しては、
―父上、あの頃は父上も怒り心頭に発しておいででしたが、私が頼朝さまに嫁いだことで、北条の家も将軍家の外戚となることができたのです。人生、何が福となるかは判りませぬ。

これには流石の頼朝と時政も参ったらしい。頼朝は暑くもないのに扇を出して何やらパタパタと顔を扇ぎ出し、時政はいかつい猪のような顔を真っ赤にして黙り込んだそうだ。
時繁は愉快げにそれらの逸話を語った後、こう締めくくった。
「御所さまは一度こうと思われたら、なかなか周囲をご覧にならぬが、御台さまは女人にしておくのは惜しいほど、ひらけた見識とお心をお持ちだ。鎌倉どのはほんに、得難い方を伴侶となされた。御所さまに仕える御家人はあまたおれども、御台さまほどの名参謀は他におるまいよ」
それは暗に生真面目な頼朝は政子の補佐あってこその将軍だと言っているようなものだ。長年、頼朝の傍にある恒正だからこその言葉かもしれない。
最後に、恒正は黙って控える時繁に言った。
「政は女の気を惹くのとは違う。わしは、そなたに大切な娘とこの河越の家を委ねたのだ、心して励め」
「はっ」
時繁は慇懃に頭を下げ、楓は漸く愁眉を開いたのだった。
こうして、時繁は正式に河越氏の婿養子として認められた。楓が既に北条時晴と婚約した身で蓄電、時繁と夫婦になったことについて、頼朝は道義に反していると依然として不快感を抱いていた。そのため、時繁を婿とすることにも異を唱えたのだが、この度も御台所政子の口添えがあり、無事、時繁は婿となり、河越四郎時繁と名を改め、〝鎌倉どの〟の正式な家臣となった。
時繁が直接仕えるのは舅である恒正だが、結局、頼朝の臣下の一人となったことに変わりはない。
すべては順調にいっていた。楓にとって再び幸せな日々が戻ってきたかに見えた。が、楓は時繁の微妙な変化を見逃さなかった。一見、それまでと変わりないように見えるが、別人のように厳しい表情をしばしば見せるようになった。
よもや、それが敵の懐に飛び込んだ時繁の葛藤一理想と現実への相容れぬ心から起因しているとは知る由もない楓だった。その良人のわずかな変化はよくよく注意して見ていなければ、うかと見落としてしまうほどのささやかなものだ。けれど、楓には、そのほんのわずかな変化が何か咽に刺さった小骨のように気になってならなかった。
暦が七月に変わったその月の半ば、楓は良人時繁と共に御所に参上した。結婚の挨拶と同時に時繁が改めて家臣となったことに対するお礼を兼ねたものだ。
拝謁が伸びたのも、やはり頼朝が逢いたがらなかったせいだと聞いているが、とにかく、やっと拝謁が叶って、ひと安心だ。幕府に仕える武士がすべてお目見えできるわけではない。鎌倉どのに拝謁できるのはごく一部の限られた重臣・近臣のみである。
今日、時繁がこうしてお目通りできたということは即ち、これをもって彼が名実ともに河越氏の跡取りとなったことを示すのだ。
広大な広間で、二人はかなり長い間、待たされた。やがて衣擦れの音とともに、
「御所さまのおなりにございます」
と、先触れの声があり、続いて頼朝が若い家臣を従えて入ってきた。今日の頼朝は渋茶色の狩衣を纏っている。

「苦しうない」
　その声で、並んで平伏していた二人は顔を上げた。
「そちがこたび、河越の婿となった時繁か？」
　ぞんざいに訊ねられ、時繁は恭しく頭を下げた。
「さようにございます。この度は鎌倉どののご尊顔を拝し奉り、恐悦至極にて」
　頼朝は時繁を無遠慮に眺め、更に視線を楓に移した。
「なるほど、楓を骨抜きにしたほどの男ゆえ、どのような色男かと思うておったが、流石に女を籠絡するだけの美男よの。楓、わしは弟同然に思うておる恒正の娘であるそなたをも我が娘と思うて参った。それゆえ、北条との縁組みを進めたのじゃが、どうも楓にはかえって迷惑だったようだの」
　今ここで持ち出す話題でもなかろうに、ねちねちと嫌みたらしく繰り返す頼朝の心が量れない。楓は戸惑い、縋るような瞳で時繁を見た。
　と、時繁がわずかに膝をいざり進めた。
「時に御所さま、私のような若輩者は鎌倉どのの数々の眩しいほどのご功労を昔語りにお聞きするだけなのは、いかにも口惜しうございます。どうか御所さまのご戦績をわずかなりともお聞かせ頂ければ末代までの栄誉となり、子々孫々までに語り継げましょう」
　これには頼朝も気勢をそがれたようで、〝うむ〟と黙り込んだ。頼朝はどちらかといえば線の細い優男である。武芸を嗜む武士というよりは、見た目は公卿のようでもあった。栄華を誇った平家を壊滅させ、幕府をひらいたと彼を英雄視する向きもあるが、少なくとも外見はそれほどの偉業をなすだけの豪傑とは見えなかった。

　頼朝は頭脳派の武将である。平家を壇ノ浦で完膚なきまでに敗北させたのは頼朝ではなく、義経だ。その時、頼朝は鎌倉にあった。この二人の兄弟は頼朝は頭脳派、義経は行動派。つまり、頼朝は頭で戦をし、義経は感性と閃きで戦をする。
　何事も理路整然と理詰めで考える兄に対し、弟は奇襲など相手の意表をつく戦法を次々に打ち出すことで勝利を勝ち取る。その性格の相違が兄弟の袂を分かつことになり、義経は頼朝に惨殺された。
　神経質で猜疑心の強い頼朝を常に傍で支え、彼の足りない面を補ったのはむしろ妻政子であった。政子もまた強烈な個性を持った女性である。女は屋敷の奥に引きこもっているのが常識であった当時、常に表で良人の傍に寄り添い、男たちを相手に互角に議論を戦わせ、時には周囲を圧倒するほどの意見を繰り出した。
　頼朝は時繁の願いに気を良くした様子であった。小さく頷くと、いきなりしゃべり出した。
「わしにとって忘れられぬと申せば、やはり、十三年前の源平の戦よのう。驕り高ぶった平家の滅亡は当然の理であり、我ら源氏が正義の鉄槌を神仏になり変わり下したのだ」
　時繁は淡々と訊ねた。
「真にそうなのでしょうか？」
「なに？」
　時繁の質問は聞き様によっては、頼朝に異を唱えると受け取られても仕方のないものだ。
　逆らわれることに慣れてない頼朝の顔色が瞬時に変わった。楓はハラハラして傍らの良人を見た。大切な初のお目見えで頼朝の不興を買うようなことを言うべきではない。それでなくとも、時繁や楓に対して頼朝は不快感を隠そうとしないといわれているのに。
　言外にそう良人を諫めたつもりだったのだが、当の時繁は涼しい顔で続けた。
「神仏になど誰もなれはしない。たとえ一天万乗の君である帝さえも」
　頼朝が眼を眇めた。
「そなた、何が言いたい？」
　一瞬、緊張が走った。時繁はその場に手をついた。
「私が申し上げたいのは、神仏にもできない偉業を御所さまが見事成し遂げられたと」
　見事な落ちに、頼朝がホウと息を吐いた。その場の緊張が一挙に緩み、楓は人知れず息を吐いた。
「なるほど、そういうことか。若いのに、回りくどい言いようをするヤツよの。面白い。恒正もなかなか気骨のある婿を迎えたものだ」
　頼朝は時繁の機転の利いた科白がたいそう気に入ったらしく、その場で手ずから砂金と蒔絵細工の文箱を賜った。家臣が運んできそれらは高坏に載っていた。時繁は腰を低くして御前にいざり進み、一礼した後、恭しく押し頂いた。
　その洗練された所作はどう見ても、漁師が昨日今日、にわか武士になったとは思えない。ここでも楓は時繁の正体を訝しんだ。
　その後、まず頼朝が退出した後、時繁らも辞した。だが、楓は確かに聞いたのである。頼朝が家臣を従えて出てゆく間際、隣の良人が聞き取れぬほどの低声で囁いたのを。

「そして、貴様は平氏を滅ぼした弟すら殺した。我が血を分けた弟を誅するとはいかにも畜生にももとる非道な行いではないか」
　恐らく頼朝はむろん、付き従う家臣にも聞こえはしなかっただろう。傍にいた楓でさえ、空耳かと思ったほどなのだ。しかし、楓にしてみれば、別の意味でその呟きが幻聴であれば良いと願わずにはいられなかった。
　黄泉の国から響いてくるような冷徹な声は聞く者の心を芯から凍らせる。そっと窺い見た時繁の美しい貌は淡く微笑んですらいた。まるで誰もかもを魅了する氷のように妖しくも蠱惑的な笑みだ。
　別人のような良人の変貌ぶりに、楓はおののいた。不吉な予感が押し寄せ、一向に鳴り止まない海鳴りのように胸騒ぎがしてならなかった。
　その後、楓はまた御台所政子に呼ばれて奥向きに伺った。
　奥向きには政子とそれに、次女の三幡姫が待ち受けていた。
「御台さま、姫さま、お久しぶりでございます」
　政子はけして美人というタイプではない。しかし、闊達な気性がそのまま容貌にも反映され、十人並みの容色をそれ以上に見せていた。
　楓が手をついてしとやかに挨拶すると、政子は明るく微笑んだ。
「よう参った。一時は行方知れずと聞いたに、まあ、ようも無事で」
　手招きされ、楓は親しく政子の傍に行った。子どもの頃から御所には何度も上がった。特に政子には幾たりとなく目通りをし、可愛がって貰ってきたのである。

政子は更に差し招いた。
「こちらへ」
楓は頷き、膝行した。すぐ傍まで来ると、楓の手を両手で押し頂き、実の娘に対するように髪を撫でた。
「それにしても、楓は美しうねびまさったものよ。私が最後に見たそなたはまだ、いかにも子どもであったがのう。恋とは惚れた男とは、そこまでおなごを変えるものか」
政子は呟き、気丈な彼女には珍しく声をつまらせた。
「大姫が去年の夏にみまかった。高名な医師も高直な薬も効果のありそうなものはおよそすべて試してみたが、薬石効もなく、まだ十八であった。この母が代われってやれるものならば代わってやりたかったが。あの娘はずっと義高どのの面影を引きずっていたゆえ。殿も酷いことをなさった。義仲どのはともかく、何も年少の義高どのまで殺すことはなかったのじゃ。殿の酷い所業への天罰を代わりに大姫が背負うて逝ったのよ」
頼朝と政子の間に生まれた長女大姫は去年、十八歳の若さで亡くなっている。幼少の砌、木曾義仲の息子義高と婚約し、筒井筒の仲であったにも拘わらず義高は頼朝によって惨殺され、幼い恋は無残に潰えた。
むろん頼朝の従弟に当たる義仲も頼朝に殺された。一体、頼朝という人はどこまでも猜疑心の強い傾向がある。彼が真に信頼しているのはこの政子だけなのだ。
政子が天罰というのは、源氏がこうやって骨肉であい争い、頼朝は血で血を洗った上に幕府を築いたことを指すのだろう。
政子の眼には光るものがあった。
「されば、せめて楓だけでも想うた男に添わせてやりたかったのじゃ。大姫のように報われぬ恋に一生身を灼いて、若い生命をむざと散らすのも哀れ。だが、今のそなたを見て安堵したぞ。そなたは惚れた男に愛されて幸せそうに輝いておる。この上は早うに跡取りを儲け、恒正を安心させてやりなされ」
政子はもう泣いてはいなかった。晴れやかな顔で笑っている。
「むろん、御所にも孫の顔を見せにくるのは忘れぬようにな」
と、念を押すのも忘れない。頼朝とは相反する心からの祝いの言葉に、楓もまた涙を滲ませた。
「御台さまのありがたいご諚(じよう)、この楓終生忘れませぬ」
「何を水くさいことを申すのじゃ、そなたは我が娘も同然ではないか。それに、その物言いはいかにもこれが今生の名残のようだぞ。このめでたいときに、そのような不吉なことを申してはならぬ」
「めでたいといえば、御台さま、この度は姫さまのご入内が内定されたとの御事、真におめでとう存じます」
それには政子も更に顔をほころばせた。
「おお、これで私も娘の嫁ぐ晴れ姿を見られそうじゃ」
京におわす後鳥羽天皇には元々、姉の大姫が入内する予定であった。天皇の後宮に娘を納れ、

娘の産み奉った皇子を次の天皇に一、かつて平清盛が実践したことを頼朝もまた夢見ていたのだ。
　頼朝にとって平家討伐の次の目的は京都の朝廷において多大な影響力を持つことであった。そのための布石として、長女大姫の入内は早くから準備が進められていたのだが、いかにせん、当の大姫が亡くなった。そのため、頼朝は次女三幡姫を入内させることにし、既にそれも内定しているとのことだ。
　現に頼朝は今年の春にも一度、上洛し鎌倉よりの公卿たちと親交を深め、入内のための下準備を着々と進めていた。早ければ翌年にも入内の運びとなるという話だ。
「姫さま、おめでとうございます」
　楓が今度は三幡姫に祝辞を述べるのに、まだ十二歳の姫はあどけない様で笑った。
「京は鎌倉にはない様々に珍しいものがあると聞いております。帝はたいそうお美しく、照り映える日のように輝いてあらせられるとか。帝にも早うにお逢いしたい」
　政子が〝これ〟と姫をたしなめた。
「嫁入り前にはしたないことを申すでない」
　口調とは裏腹に、政子の姫に向けるまなざしは限りなく温かい。昨年の大姫の哀しい逝去を思えば、無理もないことだ。
　母子の情は将軍家も名もない民も変わりはなく、微笑ましいものだ。楓は微笑み、政子に言った。
「既に女御の宣旨も帝より賜っているとか、これからはもう姫さまではなく、女御さまとお呼びしなければなりませんね」
　これには政子がホホと笑い声を上げた。
「それはまだ気が早いというものじゃ」
　こうして久方ぶりの対談は和やかに終わった。政子からは結婚祝いとして見事な小袖、打ち掛けが贈られた。打ち掛けは薄紅の地色に純白でしだれ桜が描かれた見事な逸品だ。小袖は萌葱色で上半身は白、裾へいくにつれ、色合いが微妙な濃淡を見せている。政子には幼時から言葉だけでなく、本当に心からの労りをかけて貰っているので、楓は素直に嬉しかった。

　政子への挨拶も滞りなく終わり、すべて首尾良く終わった。軽い疲労感を憶えて楓は御所の庭へ良人を捜しにいった。政子の許を辞す際、侍女が
一河越時繁さまは庭でお待ちとのこと、表より伝言を承りました。
　と伝えてきたからである。
　表の庭は今、蓮花が盛りであった。まだ昼時には間があるとて、純白、或いは濃いピンクの蓮が大きな池に所狭しと咲き誇っている様はまさにこの世の極楽、圧巻といえる。
　見慣れた上背のある良人の姿を認め、楓の声は弾んだ。
「時繁さま」
　時繁が振り向く。楓は彼の許に駆け寄った。
「御台さまとのご対面はどうだった？」
「無事に終わりました。御台さまも姫さまもお二方ともお変わりなく」
　楓は微笑み、政子との会話を良人に伝えた。
「姫さまは来年には入内されるそうです」
「そう、か」
　花を眺めていたらしい時繁は抑揚のない声で応える。その話題にさして気があるようではなかった。蓮見の邪魔をしてしまったかと楓が後悔した時、唐突に時繁が言った。
「お前は一楓は、入内したいと願ったことはあるか？」
　予期せぬ問いに、楓は眼を丸くした。
「私が？　入内なんて考えたこともありません。武家とはいえ平氏や源氏のような由緒ある格式の武門ならばともかく、私のような一介の武士の娘には思いも及ばないことです」
　時繁が小さく笑った。
「だが、そなたほどの美貌であれば、後宮に入れば必ずや帝の眼に止まるだろう」
　楓は良人の意を図りかねた。
「何故、突然にそのようなことをおっしゃるのですか？　私は栄耀栄華なんてしたくもありません。畏れ多い話ではありますが、私は一天万乗の君である帝よりも時繁さまのお傍にいる方が幸せです」
「楓は、ただ人の俺を愛してくれるというか」
　その時、時繁の脳裡を駆け抜けた複雑な感情をまだこの時、楓が理解できるはずもなかった。
「姫さまが仰せでした。帝は日のように輝く美貌の御方ゆえ、早く入内したいと。正直、姉君の大姫さまは入内に乗り気ではいらっしゃいませんでしたから、下の姫さまのように無邪気に嫁ぐ日を愉しみにしているお姿を見ると、ホッとします。私は幸運にもこうして時繁さまとめぐり逢い、晴れて夫婦になることができましたから、やはり姫さまにもお幸せになって頂きたいと思うのです」
「俺の方こそ、楓のような妻を得て幸せ者だ」
　時繁が呟くように言う。
「雲の上にお住まいの方について私などが知りようもありませんが、当今はそのようにお美しい方なのでしょうか？　時繁さまも整った面立ちをされていますし、世の中は美しき殿方が多いの

かしら」
　楓の無邪気な言葉に、時繁がまた感情のこもらぬ声で応えた。
「埒もないことを。兄弟でもあるまいに、俺たちのような一介の民と帝を比べるなど懼れ多いことだ」
「そうですね。つまらぬことを申しました」
　しばらく静かな刻が流れた。先にその静寂を破ったのは時繁であった。
「楓、蓮の花はこのように濁った池からも汚れなき清らかな花を咲かせる。俺も心に降り積もった何もかも棄てて生きられたなら、どんなにか心平らかでいられるだろう」
　時繁はひっそりと笑い、また視線を蓮池に戻した。
　その哀しげな言葉の響きに、楓は堪らず言った。
「人は痛みを知るほど、強く優しくなれると申します。我が身が痛みを知るからこそ、他の人には優しくなれるのだと。だからこそ、時繁さまはお優しいのだと思います」
「楓とともにいて安らぐのは俺の方だ」
「何が時繁さまをそこまで苦しめるのでしょう？」
　時折、彼が覗かせる孤独や翳り、それが彼をここまで追いつめている。楓はそう思えてならない。
　時繁は首を振った。
「お前が気に病むことはない」
「私は時繁さまの妻です。あなたの苦しみや哀しみ痛みを少しでも取り除いて差し上げたいのです」
　楓は時繁に寄り添い、蓮花を眺める。ふいに時繁に引き寄せられ、唇を奪われた。角度を変えて何度も口づけられ、呼吸すら奪うような烈しい接吻(キス)だった。
「時繁さま、こんな人眼に立つ場所で」
　頼朝の御所で熱烈な口づけを交わすなど、誰に見られているか知れたものではない。もし頼朝に報告がいけば、ただでは済まないだろう。
　非難するように睨んでも、長いキスで黒い瞳は潤み、唇は腫れている。おまけに唾液が糸を引いて唇の端からしたたり落ちていた。
「済まん、楓があまりにも可愛かったから、つい我慢がきかなくなった」
　時繁は平然と言い、指の腹で楓の唇からしたたる唾液をぬぐった。
　ふいに一陣の風が池面を吹き渡り、蓮の花たちがかすかに揺れた。あたかもざわめく楓の心をそっくりそのまま映し出したよう。
　二人はいつまでも名残尽きぬように清浄とした花を眺めていた。

疑惑

疑惑

季節は穏やかにうつろい、暑い夏が過ぎ、鎌倉の山々が澄んだ空気にすっきりと立ち上がる秋が来た。
河越の屋敷の庭も樹々が鮮やかに朱(あけ)の色に染め上がり、秋たけなわを感じさせる。そんな秋の昼下がり、楓は廊下に座り、仕立物にに精を出していた。師走に行われる鶴岡八幡宮の祭儀に良人時繁が身に纏うものである。
もう殆ど出来上がった。楓は時繁の小袖をひろげて四方八方から眺める。満足げに頷いた。これを着たときの時繁の美丈夫ぶりを思い描くと、つい一人でに笑みが浮かんでしまう。他人が見れば、一人でニヤニヤしていて、気味が悪いと思われるかもしれない。
芥子色の小袖には唐草模様。若い時繁にはいささか地味かもしれないが、かえって彼の美貌が際立つだろう。
楓は縫いかけの小袖を簡単に畳み、脇に置いた。立ち上がり、縁郎に佇み庭を眺める。風もないのに、赤児の手のひらのような紅葉がひらひらと舞っていた。地面は散り敷いた紅葉の絨毯が埋め尽くしている。
ひとしきり見事な秋の庭を堪能し、楓は厨房に脚を向けた。今宵の献立には御台所政子より下された柿を付けるようにと指示するのを忘れていたためだ。
娘時分は料理にはまるで関心のなかった楓だが、時繁という伴侶を得て、厨房にも頻繁に顔を出すようになった。海辺の小屋で暮らしていたときは自身で料理もしたので、今は時には自ら厨房に立つこともある。料理の上手な年嵩の侍女に教わりながら、少しずつ作れる料理の品数も増えていた。
これはやはり、愛する男に日々、美味しい手料理をふるまいたいという女心ゆえだろう。父時繁などは料理などしたことのない楓が厨房に立つようになったのを見て、
―さても、恋とは怖ろしきものよ。
と、口とは裏腹に成長した愛娘の姿に眼を細めた。
今朝、和歌山で採れたという珍しい柿が河越家に届けられた。数日前に早馬で和歌山の御家人から頼朝に献上された珍しい品だという。政子がその柿をわざわざ河越家にも下賜したのである。
いかに河越氏が将軍家から厚遇されていることが判るかというものだ。その珍しい柿を今夜は膳に付けるつもりだ。厨房に行きかけた楓はまたふと思い出した。縫いかけの小袖に針を刺したままにしてきた。今は幼い子がいないから良いが、誤って人が踏みでもしたら大変なことになる。とにかく一度部屋に戻り、針を安全な場所にしまった方が賢明だ。
楓は歩きながら、そっと腹部を押さえた。時繁と結ばれてから、七月(ななつき)が経とうしているが、まだ懐妊の兆しはない。ここのところ順調だった月のものが止まっているけれど、まだ懐妊と決まったわけではない。女の身体は心身のちょっとした変化で月事が狂うのはよくあるこ

とだ。
　だが、月のものが来なくなって、そろそろふた月になろうとしている。一度、薬師に診て貰った方が良いのかもしれないと思い、また引き返して廊下を歩き始めた。手前まで戻ってきたその時、ひそやかに交わす声が耳に飛び込んできた。
「それでは手筈はそのように。あまりに繋ぎを取りすぎて、怪しまれてもまずい。今後は一切接触はせず、今一度、ひと月後に」
「そのときが憎き頼朝の命運の尽きる日でございますね。それでは、その折までに薬を調達致します」
　顔は見ずとも、一人はそも誰であるかは判った。時繁に違いない。しかし、今ひとりは誰なのか？　声そのものは低くもなく高くもなく、男か女か判別はつかなかった。
　そこで楓は足を踏み出していた。時繁が人知れず親しげに言葉を交わしている相手を突き止めずにはいられなかった。が、次の瞬間、彼女は我が身が取った行動を心から悔いた。
　あろうことか、楓の居間で、良人が若い女と話していた。女は庭に跪いていたが、見たところ二十代前半くらい。黒髪の艶やかで色白の美しい女だ。女にしてはやや大柄な身体を葡萄茶色の小袖で包んでいる。
「ー！」
　楓は予想さえしていなかった光景に鋭く息を呑んだ。自分のヒュッと息を呑む音が聞こえた。
「では」
　美貌の臈長けた女は時繁に一礼し、風のように走り去った。
「楓」
　時繁が物言いたげに見つめてくる。楓は夢中で首を振りながら、一歩後ずさった。
「頼む、俺の話を聞いてくれ」
　間合いをつめながら、時繁が近づいた。室内にまで追いつめられ、楓は観念したように眼を閉じた。それから可能な限り、心を落ち着かせ口を開いた。

「あの方はどなた？」
　時繁は見られた以上、隠すつもりはないのか、意外にあっさりと応えた。
「鈴音(すずね)と申す者だ」
　楓は惚けたように呟く。
「鈴音ーさま」
　と、時繁が大きな声で言った。
「誤解するな。あの者とは男女の仲とか、そのような拘わりではない」
　楓は虚ろな視線を良人に向けた。
「では、何なのですか？　あの美しい女人は、あなたさまにとって、どのような存在だというの？　あのような侍女は、この屋敷では見かけたことがございません」
「ひと月前、当家に入った下女だ」
　楓は哀しい想いで時繁を見た。
「下女と関係を持っていたのですか」
　時繁は声を荒げた。
「だから、違うと言ってるだろうが！　俺はお前と知り合ってから、他の女を抱いたことは一度たりともない。それは真だ、信じてくれ」
　だが、口では何とでも言える。現に、鈴音という女と時繁は妙に親密そうだった。あれがただの使用人と主筋の人間だとは思えない。
　そのときだった。楓は動転のあまり、忘れていた大切なことを思いだした。
ーその日が憎き頼朝の命運の尽きる日でございますね。それでは、その折までに薬を調達致します。
　あの鈴音という女が去り際に囁いた禍々しい科白が耳奥でこだました。
　今は我が身の心配よりは、そちらが大切だ。楓は両脇に垂らした握り拳に力をこめた。
「それに鈴音という女が申していたことも気掛かりです」
「何も訊かないでくれ」
　苦渋に満ちた表情で時繁が言った。
　楓はかぶりを振る。
「そのようなわけには参りません。我が家は父祖の代から源氏にお仕えし、御所さまや御台さまには少なからぬご恩を賜っているのです」
　その頼朝の命運が尽きるなどと不吉な言葉はたとえ言葉だけでも口にしたくはない。いにしえから日本には言霊という言葉が信じられ伝えられてきた。一度口にした言葉は文字どおり魂を持ち、いずれは真になるというものだ。
「御所さまのおん名を確かに鈴音は口にしておりました」
　そこで、楓はハッとした。時繁の端正すぎるほど整った面を凝視した。
「よもや、あなたさまは御所さまをー」
　その先は到底口にできるものではなかった。刹那、これまで彼が口にした言葉の数々がありありと甦ってくる。

一宿願を果たしに。
一俺も心に降り積もった何もかも棄てて生きられたなら、どんなにか心平らかでいられるだろう。
　様々なものが押し寄せ、楓は気が狂いそうだった。いっそのこと、このまま気を失ってしまいたいとさえ思う。
「私は今まで、あなたさまの素性を突き止めようと思ったことはありませんでした。一つには知るのが怖かった。何故か、あなたさまが誰であるかを知れば、私はもう時繁さまとご一緒にはいられないと、そんな予感がしてならなかったのです」
　楓は小さく息を吸い込み、首を振った。
「でも、そういうわけにはゆかないようです。あなたが御所さまに明確な殺意、或いは敵意を抱いている以上、私はあなたが誰であるかを知らないわけにはいかない」
「一」
　時繁は口を開きかけ、つぐんだ。彼の美しい貌にもまた複雑な感情がよぎった。後悔、安堵、絶望、喪失。沈黙を守る時繁になり代わり、楓はひと息に言った。
「あなたさまは平家にゆかりのお方、平家の若君ではありませんか？」
「一っ」
　今度は時繁が息を呑む番だった。
「お前は知っていたのか！？」
　信じられないという面持ちだ。楓はひそやかに微笑った。
「あなたの生い立ちを聞いているときに、薄々はお察ししておりました」
　そう、決定打となったのは入水の話だった。時繁と生き別れになるほどなら、いっそ海に入って死にたい。そう泣いた楓に、時繁は入水した者の苦しみは判らないと言ったのだ。更に、自分は入水したことがあると。
「時繁さまのご年齢からすると、そのような大きな戦があったのは源平が戦った壇ノ浦くらいしかありません。あの折、平家では主立った方々はすべて入水され、お労しくも多くの方が生命を落とされました。あなたさまが平家の若君であるとすれば、あのお話も信憑性があります」

　時繁が遠い眼になった。その瞳はあまりにも彼方を見つめている。今、この時、彼は十三年前の壇ノ浦合戦の最中を見ているのかもしれなかった。幼かった彼が見た、まさにこの世の地獄としか思えぬ阿鼻叫喚の地獄図絵、平氏の無念の最期を。
「我が一族は源氏に深い遺恨を抱いている」
　楓の眼に涙が溢れた。
「ならば何故！　何故、私を妻になど迎えたのですか？　私は源氏の将の娘、あなたは平家の御曹司。たとえ天地が入れ替わろうと、共に生きることは叶わぬさだめなのですよ」
　ややあって、楓はポツリと言った。
「それとも、利用したのですか？　源氏方の娘だから、近づいて誘惑して、身体さえ奪った。私を手なずけて、こうして敵方の懐深くに飛び込むつもりだったと」
　楓のすべらかな頬を涙がつたい落ちた。
「それは違う！」
　時繁は振り絞るように叫んだ。
「断じて、それはない。最初はお前を河越恒正の娘とは知らずに出逢った」
　楓は時繁の黒瞳の奥に紛れもない真実を見た。この瞳には嘘偽りの欠片もない。かすかな希望を見出し、彼女は良人を縋るように見つめた。
「知ってからは一」
　その期待を込めた瞳から、時繁は耐えかねたように眼を背ける。落胆に楓の心は折れそうになった。
　時繁は小さくかぶりを振った。
「知ってからは利用しようという気がなかったとはいえない」
「やはり、そうだったのですね」
　怒りと衝撃に眼の前が一瞬、白く染まる。楓は初めて自分の頬が濡れているのに気付いた。この頬を濡らす涙は何のせい？
　時繁に裏切られたことへの落胆？　それとも、利用されたことへの怒り？
　いいえ、違うと楓は自身に応えた。
　私が何より哀しいのは利用されたことでも裏切られたことでも、ましてや騙されたことでもない。
　私は時繁さまを心からお慕いしていたのに、時繁さまの方はただ復讐のためにだけ私を愛しているふりをしていたから。そう、私は彼が私を愛していなかったと知って、こんなにも辛い。
「違うのだ」
　時繁が怒鳴った。もう、これ以上何も訊きたくない。好きな男が重ねる空言を聞きたくない。楓は踵を返し、時繁に背を向けた。
　数歩あるいたところで、楓は後ろから強く抱きすくめられた。楓は身を捩った。
「放して下さい」
「頼む、これだけは聞いてくれ。愛している。初めて楓を見たそのときから、忘れられなくなった」

　楓は抗うのを止めた。楓の良い香りのする黒髪に唇を押し当て、時繁はくぐもった声で続けた。
「お前も聞いたとおりだ。俺は頼朝を殺す。楓が先刻見た鈴音というのは、見た目は女だが、実は男だ。美しい容姿を生かして、自在に性を変えて変装することができる忍びの者。あれはその昔、平家の相国入道どのに仕えた諜報部隊〝落ち椿〟、つまり忍び集団の末裔なんだ」
「清盛さまに仕えた忍び集団、そのようなものがあったのですね」
「なければ、入道どのがあそこまで覇権を欲しいままにはできなかったろう。平家の力の源は都広しといえども、内裏から市井の隅々に至るまでのありとあらゆる出来事を収集できるその情報網にあったのだから」
「その力の源になっていたのが〝落ち椿〟」
「彼らは自在に変化(へんげ)して、何者にもなれる。その特性を活かして都はおろか全国津津浦々に散らばり、各地の情報を都にいる入道どのに送った。もっとも、その〝落ち椿〟も壇ノ浦合戦で随分と犠牲を出したが。鈴音はその生き残りだ」
　楓は小さく息を吸い込んだ。何かを喋ろうとすれば、泣いてしまいそうだった。泣いて時繁に縋り付き、
―たとえあなたが平家であろうが、私にはそんなことはどうでも良い。
　と訴えたかった。だが、それは所詮叶わぬことだ。父祖代々、源氏に仕え、将軍夫妻からは我が娘同然と可愛がられている楓である。その頼朝を裏切るような真似はできない。
「―私にそのようなことを話して良いのですか？」
　時繁は躊躇いなく即答した。
「構わぬ、私は楓を信じている」
　楓がまた身を捩ると、今度は時繁はすぐに離れた。
　今、ここで時繁の胸に縋り付いて思いきり泣ければ、どんなに良いか。父も河越の家も源氏も、何がどうなっても良いと自分を縛り付けるすべての柵(しがらみ)を断ち切れたとしたら。
　けれど、私はできない。時繁さまが平家の人間であること、源氏への憎しみを捨て去れないように、私もまた源氏の人間であることを忘れてはいけないのだ。

私はあなたの胸の中にはいられない。誰よりも大好きなあなたの傍にはもう、いられない。
何故なら、私は源氏の女、あなたは平家の男だから。
楓は泣きながら、その場から走り去る。風もないのに、また鮮やかな紅葉がはらはらと散り零れる。その色はあたかも死人(しびと)の流す血の色を生々しく思い出させた。
そのひと月後。月明かりもない夜更け、河越家の庭の奥深く、ひそやかに動く影が二つあった。
「それでは、予定どおりに」
男女の性別を感じさせない声はどこかに感情を置き忘れてきたかのように響いた。
対するのは男の声。
「薬は？」
「ここにございます。これを当日の朝、頼朝の膳に混入させます」
「判った」
短い沈黙の後、男の低い声が呟いた。
「鈴音、この計画、すべてはそなたに掛かっている。よしなに頼む」
「御意、必ずや我が生命に代えましても」
囁き交わす声はそれきり、ふつりと止んだ。後はただ生い茂った樹木が黒々とした影を庭に落とすのみ。
時繁の正体を知ってからも、表面上は穏やかな日々が流れていった。時繁が頼朝暗殺を企てていると知った今、彼を愛していても、心をひらくことはできない。
ただ、楓には彼を告発することだけはどうしてもできなかった。大恩ある将軍夫妻には裏切り行為に他ならなかったが、楓には他にすべはなかった。
彼女はただ沈黙を守り通すことで、愛する良人と自らの粉々に砕けそうになる心を守ったのだ。更に、幸か不幸か、楓は時繁がいつどんな形で、頼朝を暗殺するつもりなのかは詳細は知らなかった。鈴音という忍びと時繁の会話では、それが近い中に行われるというのは察せられたものの、それだけではいつなのか判らない。
そんな中、楓は自らの懐妊を知ることになる。
「おめでとうございます。ご出産は来年の六月辺りになりましょう」
楓が子どもの頃から河越家に出入りしている老いた薬師はにこやかに告げた。楓は薬師に十分な金子を取らせ、このことは当分は父恒正初め誰にも口外せぬようにと厳重に言い含めた。薬師は一瞬怪訝そうになったものの、すぐに深々と頭を下げた。
初めての懐妊、しかも最愛の時繁の子を授かった。この歓びの日を一日千秋の想いで待っていたにも拘わらず、楓は手放しでは歓べなかった。事が成功するかどうかに関係なく、万が一、時繁の仕業だと露見してしまえば、時繁の生命ばかりではなく、腹の子の生命まで脅かされることになる。
また、引いては父恒正や河越氏の家まで累が及ぶことは必定であった。
将軍暗殺、それは世の中を根底から揺るがすほどの陰謀だった。時繁がその大罪に手を染めようとしている今、懐妊が知れたのも良かったのかどうかと思えば、涙が零れた。

　このようなときに傍に居て欲しい乳母さつきは楓の結婚を機に屋敷勤めを辞め、遠江の御家人に嫁いだ次女の許に身を寄せていた。今は孫の守をしながら、安楽な余生を過ごしていることが時折届く文には綴られていた。

　運命のその日はふいに訪れた。建久九年（一一九八）、その年も押し詰まった師走の二十七日、相模川において橋の落成式が盛大に執り行われた。相模橋は檜という上質な材質を用いたものであり、当時としては最先端の建築技術をもって造られた。
　そもそもこれは稲毛三郎重成が妻の供養のために施主となって行った工事であり、重成の亡妻は御台所北条政子の妹に当たった。
　そのため、将軍頼朝も落成式には臨席するという大変栄誉あるものになったのである。落成式は厳粛かつ賑々しく行われ、頼朝は大いに満足して帰途についた。
　事件はその帰り道に起こった。頼朝が途中、落馬するという事故が勃発、直ちに応急処置が施され、その身柄は輿で鎌倉まで送り届けられた。
　鎌倉は蜂の巣をひっくり返したような混乱に陥った。侍医をはじめ、名医と呼ばれる医者が集められ、頼朝の枕頭に侍り手を尽くして不眠不休の治療が行われる中、次第に事件の詳細がつまびらかにされていった。
　落馬の原因は、頼朝の馬が暴走し、相模川に乱入したことだった。その際、弾みで馬から振り落とされたのである。面妖であったのは、その馬は普段からよく訓練され、急に暴走するようなことはかつて一度もなかったこと、更に暴走したときは異常に興奮していたこと。

　また、頼朝自身もまるで眠り薬でも飲んだかのように馬上でうつらうつらと船を漕いでいたという。これもまた滅多とないことであった。頭脳派の武将といえども、歴戦の戦をかいくぐってきた頼朝である。乗馬は第一級で、調教されていない野生馬ですら楽々乗りこなしてみせるほどの腕前であった。それが居眠りで落馬とは不自然といえば不自然だ。
―連日の激務のお疲れが溜まっていたのではないか。
　それが大方の見方だったが、中には首を傾げる者たちもいた。
　また、一部では怪談めいた怖ろしい話もまことしやかに囁かれた。
―頼朝さまの前にふいに貴人のなりをした童子が浮かんだというではないか。
―貴人のなりをした童子？
―そうじゃ、髪は角髪(みずら)に結い、眼の覚めるような深紅の小袖に純白の水干を纏った綺麗な童子であったそうな。
―それはもしやー。
　そこで人々は顔を合わせる。
―その童子は頼朝さまに〝我は安徳〟と言い、ふっとかき消えた。その瞬間、頼朝さまの馬が何ものかに怯えたように暴れ出したというぞ。
　安徳天皇は平清盛の娘徳子の生み奉った御子である。父は高倉天皇。第八十一代の帝ととして、わずかに御年一歳（数えは三歳）で即位した。平氏が外戚として繁栄する礎を築くための傀儡の帝ではあったが、清盛に溺愛され、源平の戦いでも終始、平家軍と行動を共にした。
　最期の戦いとなった壇ノ浦合戦ではいよいよおしまいと悟った平家方が帝のおわす御座船に集まり、源平双方が見守る中、祖母の二位の尼平時子に抱かれて三種の神器の中の二つと共に海中に身を投じられた。
　崩御されたときは六歳。その亡骸は後に漁師の網に引き上げられ、丁重に弔われた。安徳帝はそのため水神として祀られている。
　結局、安徳帝とともに海中に沈んだ神器二つの中の一つ、草薙の剣は見つからなかった。どれだけ探索の手を尽くしても発見できず、安徳帝が平家に報じられて西海に逃れてから、都では新帝が立った。それが頼朝の次女が女御として入内する予定の後鳥羽天皇、崩御した安徳天皇とは腹違いの弟であり、二つ下になる。
　つまり、後鳥羽天皇は神器なしで即位したということになる。その後も折に触れては神器の探索は行われたものの、ついに草薙剣はないまま、新しい剣が造られ内裏に納められたといわれている。
　頼朝の落馬は〝安徳幼帝の祟り、平家の呪い〟と巷で囁かれた。幕府は事実無根の噂を無責任に流す輩を取り締まったが、
―鎌倉どのが平家の亡霊に呪われた。
　という噂は野火が枯れ野にひろがるごとく鎌倉ばかりでなく都にもひろがった。噂好きの都人は寄ると触ると、そのことで持ちきりになった。
　そんな中、一進一退を繰り返していた頼朝の病状が急激に悪化の兆しを見せ、翌一月十三日、ついに薨去、五十二年の波乱に満ちた生涯を閉じた。

頼朝の死から一夜明けたその朝、父恒正は憔悴しきった顔で帰邸した。頼朝が十代の頃より兄弟のようにして育ち、主従を超えた絆で繋がっていた主君の死に、恒正は悲嘆を隠せない様子だった。

それもそのはず、頼朝が御所で寝ついてからというもの、その枕頭を一刻たりとも離れなかったのが恒正と御台所政子であった。頼朝の死を看取った恒正は疲れ果てて戻ってくるや、倒れるようにして深い眠りに落ちた。

楓は頼朝の訃報を耳にした刹那、御所の方角を合掌して伏し拝んだ。

―御所さま、御台さま、不忠者の私をどうかお許し下さいませ。

幼い頃には頼朝に抱き上げて貰ったこともある楓だ。神経質な面もあるにせよ、長く続いた公家社会から新たな武士の世へと大きく時代を切り開いた偉大な武将であった。

結局、楓は主君への忠孝よりは男への愛を選んでしまったのだ―。

仮に楓がすぐに頼朝や政子に、いや恒正にでも良いから事の次第を告げていれば、頼朝の落馬は未然に防げたはずだった。今や楓は時繁が頼朝の死の真相に深く関わっていると信じて疑っていない。

恐らくは平清盛の遺した忍び集団〝落ち椿〟の末裔である、あの鈴音という男（女）が御所の台盤所に忍び込み、ひそかに睡眠薬を頼朝の朝の御膳に混入させた。あの者はひと月以上も前に婢女(はしため)として河越家に潜入していたのだ。

自在に姿を変える術を持つ鈴音であれば、面体を変えて御所の厨房に入り込むことなど朝飯前であろう。また、普段は極めて大人しい頼朝の愛馬が俄に異変を起こしたのも解せぬ話であった。頼朝その人だけでなく、馬にも鞍に微小な針でも仕込んでいたか、もしくは薬を食(は)ませていたのかもしれない。大方、それも鈴音の仕業に相違なかった。それが時ならずして興奮した理由ではないか。

楓はそのように今回の事件を見ていた。

頼朝の死から二日経った。幕府内では現在、頼朝の葬儀のことで御台所政子の指揮の下、北条時政や河越恒正ら重臣たちが談合を重ねているという。初代将軍の格式をもって行われるため、準備にも入念に入念を重ねねばならない。
父は丸一日在宅しただけで、またその日の夕刻には慌ただしく御所に向かった。以来、一度も帰ってきていない。時繁は頼朝の家臣とはいえ、あくまでも恒正の配下のため、いつものように夕刻には帰宅していた。
頼朝の死が公表されてからというもの、夫婦の間に、殆ど会話らしい会話はなくなっていた。
三日めの深夜のこと、楓は咽の渇きを憶えて眼を覚ました。ふと傍らを見ると、良人が眠っているはずの夜具はもぬけの殻だ。慌て夜具に触れてみれば、すでにしんと冷たい。真冬の夜であることを差し引いても、この分では既にかなり前に出て行ったものと思われた。
楓は狼狽え、まろぶように部屋から転がり出た。
蒼褪めた満月が煌々と怖いほどに美しく間近に迫って見えた。月の面にくっきりと刻まれた模様まで見えるほど近い。かつてこれほどまでに凄艶な美しさを際立たせた月を見たことがなかった。
若夫婦の寝所前、小さな庭には今を盛りと紅椿が咲き誇っていた。突如として、手前の紅い花がポトリと落ちた。椿ほど色のないとかく沈みがちにな冬景色を艶やかに彩る花を知らないが、花冠ごとすっぽりと落花するその様が〝首が落ちる〟に通じ不吉だと見なされることも多いのだ。
何かしら厭な予感がし、楓は何気なく空を仰ぎ、慄然とした。先ほどまで蒼く神秘的な光を放っていた月が深紅に染まっていた。紅い月、まさにそんな呼び名がふさわしい。
―まるで死人の血のような。
楓は慌てて眼をこすった。もしや紅い椿を見ていたゆえ、その鮮やかすぎる色が残像となって紅い月などという幻覚を見せたのかもしれない。儚い期待を抱いたのである。
が、ふっくらとした月はやはりゾッとするほど妖しく美しく紅かった。時繁が出ていったその夜、このような月を見ることになるとは―。
薄い夜着一枚きりでは、一月の夜は寒すぎる。しんしんとした冷気が足許から這い上ってきて、楓の身体はすぐに冷え切った。
それでも、楓は頓着せず、唇を噛みしめ、ただ紅い月を食い入るように見上げていた。
今日も鎌倉の海はどこまでも蒼く、由比ヶ浜はきめ細やかな白砂がどこまでも続いている。絶え間なく鳴り響く海鳴りを聞きながら、楓は一歩一歩踏みしめるように浜辺を歩いていった。この道は愛する男へと続く一本道だ。この道を進めば、もう二度と後戻りはできない。
生まれた家も父も棄て、楓は再び愛する男の許へ走る。二度と戻れない修羅の道をゆくために。
父恒正の貌が眼裏をよぎる。ずっと慈愛深く見守ってくれた父を結果的には裏切ることになってしまった。自分はつくづく親不孝者だと思う。
―またいずこでひっそりと生きておるならば、それも良いと思ってな。
四月に楓が時繁と河越に戻った時、父はそんなことを言った。楓の探索を早々に打ち切った背

景には、影ながら娘の幸せを願う父の心があったのだ。今更ながらに、父の言葉が甦り、楓は瞼が熱くなる。自分が選ぼうとしている道は、どれだけの大切なものを棄てなければならないのか。

　それでも、楓は最早、あの男なしでは生きられない。今、時繁を追わずに河越の家で平穏だけれども虚しい日々を選べば、楓の心は永遠に死んでしまうだろう、

ーお父さま。ごめんさない。

　楓は唇をきつく噛みしめ、もう一度、心の中で父に詫びた。

　この懐かしい〝我が家〟に帰ってきたのは七ヶ月ぶりだった。去年の六月、河越の屋敷に戻るときには、またここに来るとは考えもしなかった。

　楓には予感があった。時繁は必ずやここにいるという確かな想いに導かれるようにして、ここに来たのだ。楓は少し軋む音を立てる扉を開けた。この戸が立てる音ですら以前は煩いと思ったのに、今は懐かしい。

　果たして、彼女の想い人はそこにいた。ただし、以前と大きく違うところは室内がガランとして持ち物らしいものは何一つないことだ。元々、男の一人暮らしらしく何もない家だったけれど、以前は申し訳程度にあった柳行李さえなくなっている。それはこの家(や)の主人が既にここを引き払うつもりでいることを何より物語っていた。

扉の音に時繁が振り向いた。楓の出現に愕いた風でもなく、さりとて、嬉しそうというわけでもない。その感情の窺えぬ瞳は既に時繁が楓から関心を失ってしまったとも思えた。
早くも折れそうになる心を奮い立たせ、楓は時繁を見つめた。
「どこかに行かれるのですか？」
時繁は無言だった。傍らには旅の荷物らしい小さな葛籠(つづら)があった。その脇には例の布に幾重にもくるまれた宝剣がある。平家代々の家宝だという代物だ。
彼は今、まさにその宝剣の包みを手にしようとしているところだった。
「あなたが私を復讐のために利用していないという言葉を、私は今も信じています。でも、もうお側には置いて下さらないほど、あなたは私をお嫌いなのですね」
時繁は宝剣をまた傍に置き、楓を見た。ぬばたまの幾億もの夜を閉じ込めたような深い瞳。知り合ってもう何ヶ月、夫婦としてさえ暮らしたのに、この男に見つめられるとまだこんなにも胸が妖しく騒ぎ、身体が熱くなる。
「もう一度、お訊きします。いずこに行かれるのですか？」
果てのない沈黙の後、ようやっと時繁が呟いた。
「ここではないどこかへ」
前向きな応えとは到底言い難いが、とりあえず時繁が口を開いたことに勇気を得て、楓は話を進めた。
「そんなに私はお邪魔ですか？」
今度はすぐに返答があった。
「俺がお前を嫌うはずはないだろう。確か、いつかも似たようなことを俺は言ったはずだ」
楓はつい声高になった。
「ならば、どうして河越の屋敷を出られたのです？」
時繁がフと自嘲的な笑みを洩らす。そんな表情をすると、時折垣間見える孤独の翳がいっそう濃くなる。楓は胸が引き絞られるように痛んだ。
「その応えであれば、楓がいちばん知っているだろう。俺はお前だけでなく、義父上も裏切ったんだぞ。父上はお前と河越の家を俺を信頼して託すと仰せになった。その信頼を俺はむざと裏切るような行為に走ったのだ。幾ら厚顔な俺でも、このまま何食わぬ顔で河越の屋敷にいるわけにはゆかないさ」
「―」
時繁の言い分は道理だ。二人ともに口には出さないが、頼朝の死に時繁が深く関わっていることは周知の事実である。恒正と頼朝は義兄弟ともいえるほど深い絆で結ばれていた。恒正は主君の死を心から悼み、傷心の極みにある。頼朝を殺した時繁がそんな恒正と何もなかったような顔で暮らすことはできないのは当然だし、また、時繁はそういう男だ。
「納得できたなら、お前はもう帰れ」
冷淡な声音に、涙が溢れそうになり、声では歯を食いしばった。
「私がお側にいてはいけませんか？」
「その必要はない。俺たちはもう終わったんだ。お前は河越の屋敷に戻り、新しい良人を持って

義父上の期待に応えて家を盛り立てていけば良い」
　あまりにも無情な言葉に、とうとう楓の眼から涙が零れた。
「あなた以外の人には触れられるのもいや。そんな私にあなたは他の男のものになれと言う。ならば、いっそのこと死にます。いつか、あなたはおっしゃいましたね。海に入るのは苦しみながら死ぬことだと。でも、あなたを永遠に失うほどならば、私は迷わず死を選びます。どんなに苦しくても、あなたのいない世界で生きるよりはマシだから」
「楓」
　時繁が愕いたように眼を見開いた。
「短い間でしたが、時繁さまのお側で楓は幸せでした」
　楓は深々と頭を垂れると、軋む戸を押して外に出た。別に脅しでも戯れ言でもない。本気だった。時繁を失い、愛してもいないどこぞの男を二度目の良人に迎えるよりは、この海に身を沈めた方がまだ救われる。
　楓は砂浜に草履を揃えて脱ぎ、躊躇うことなく海に向かって進んだ。打ち寄せる波が素足を洗う。そのまま真っすぐ歩いてゆこうとした時、背後から逞しい腕に閉じ込められた。
「馬鹿者ッ。むざむざ生命を落とすなとあれほど俺が言い聞かせたであろうが！」
　耳許で大喝され、楓はピクリと身を震わせた。
「お前を失えば、俺はまた大切な者を失う。楓、お前は知らないかもしれないが、楓は俺にとっては唯一無二の存在なんだぞ。俺だって、この世からお前がいなくなったら、生きている意味はない」
　骨が砕けんばかりに強い力で抱きしめられ、楓はかすかに喘いだ。その声にいざなわれるように、時繁は楓を抱き上げ、小屋に連れ戻った。
　今日の時繁は荒々しかった。まるで楓の小袖を脱がせるというよりは引き裂くといった方がふさわしく剥ぎ取ってゆく。やがて全裸にされた楓はすぐに彼の逞しい裸身に組み敷かれた。
「俺が黙って河越の屋敷を出たのは、そなたを巻き添えにしたくはなかったからだ。鎌倉にいれば、楓は有力御家人の娘として何不自由のない生活が送れる。だが、俺と共に来れば、一生苦労することになるのは判っている」
　楓は無心な瞳で良人を見上げた。
「女の幸せは惚れた男の傍にしかありません。私があなたなしでも生きられるような女であれば、七ヶ月前、河越に戻るときに一人でさっさと帰ったでしょう」
「ーそうだな」
　二人はしばし、見つめ合った。まなざしが絡まり合った場所から熱が生じ、やがて小さ焔が生まれる。時繁はいつものように丹念に楓の身体を唇で辿り、あちこちに小さな焔を点す。そして、その小さな無数の焔はいつか大きな焔となり、楓のすべてを灼き尽くすのだ。
「もう放してはやらないぞ」
「放さないで」
　時繁の熱い唇が、舌が乳房を這う。楓はいまだかつて感じたことのない鋭い快感に悶え、声を上げた。

　どれほど、そうしていたのか。幾度も互いに求め合い貪り合い、飢えた獣のように交わり合った。楓は時繁に抱かれ最奥まで深々と刺し貫かれ、数え切れないほどの絶頂に達した。河越の屋敷をひそかに出たのはまだ朝方だったというのに、時繁に抱かれている中にいつしか小屋に差し込む光は優しい蜜柑色に染まっていた。
「少し海を見たい」
　時繁の言葉に、二人はそろそろと起き上がり、周囲に散らばった着物を身につけた。だが、纏ってきた小袖は彼に殆ど引き裂かれてしまったため、到底着られたものではない。
　わずかに持ち出した手荷物の中に着替えの小袖を数枚入れていたので、それを身につけた。どれだけ身体を重ねても、時繁に裸体を見られることには抵抗がある。後ろ向きで手早く着物を着る楓を見、時繁が薄く笑った。
「残念だ、着替えを持ってきていたのか。俺は着物を着た楓より何も身につけていない楓の方が好きなんだが」
　こんなときにまで冗談の言える時繁は、やはり今までの彼と変わらない。そのことが嬉しくて、楓もまた、つられるように笑った。
　二人は身仕舞いを済ませ、浜辺に並んだ。巨大な太陽が熟れた果実のように紅く染まり、水平線の向こうに沈もうとしている。吐く息が白く細く溶けていく。
「寒くないか？」
　労りのこもった声音に、楓は微笑んで首を振った。
「ずっと夫婦として共に暮らすのなら、真実(まこと)のことを言わなければなるまい。こんなことがなければ、そなたには伝えまいと思っていた秘密だったが」
　いつしか〝お前〟が〝そなた〟に変わっている。心なしか良人の顔つきまで少し違っているようで、楓は我が身の思い違いかと眼をまたたかせた。
「楓、俺はそなたにまだ伝えていない秘密がある」
　時繁は眼を細めて夕陽を眺めたまま、ポツリと言った。
「この秘密を知ってもなお、そなたは俺を変わらず愛してくれるだろうか」
　どこか心細さを感じさせる響きには懇願すら込められているような気がして。
　楓は息を呑んで時繁の次の言葉を待った。
　唐突に、彼が身体の向きを変え、真正面から楓を見た。そして、彼の口から紡ぎ出されたのは。
「我は安徳」
　刹那、楓は何かの夢を見ているのだろうと思った。彼女の愛してやまない最愛の良人は今、何と言った？　楓が漸くその言葉の示す意味を認識した時、時繁は淋しげに微笑んでいた。
「主上(しゆじよう)におわしますか？」
　半ば夢であることを祈りながら問えば、時繁はかすかに頷いた。
　楓は蒼白になった。砂地であることも気にせず、その場に跪いた。
「止さないか」
「でも」

　大きな手が差しのべられ、楓はおずおずと時繁を見上げた。時繁はいつものようにその手で楓の小さな手を包み込み、そっと立ち上がらせた。
「あなたさまが帝だなんて」
　俄に遠い人に思え、涙が湧いた。つい今し方、あの小屋で情熱的に幾度も自分を抱いた男が先帝？　まるで悪い夢を見ているようで、俄には現のこととも思えない。
　混乱の最中、引き寄せられ優しく宥めるように背中をトントンと叩いてくれるのも同じ。時繁は楓の顔を覗き込み、まずは額に唇を落とし、次に目尻に溜まった涙を唇で吸い取った。
「主上(おかみ)ー」
　もう一度呼ぶと、時繁はまた儚く笑んだ。
「そうだな、昔はそう呼ばれていた時代も確かにあった。だが」
　改めて真正面から見つめて続けた。
「今はただの一人の男だ。愛しいと思う女を守りたいと願うもののふだ」
　いつしか短い冬の陽は落ち、周囲は夜の気配が立ちこめていた。時繁は手頃な流木に楓を座らせた。その間、集めてきた枯れ枝で火を熾し、自分も楓の隣に座った。
「長い話になるが、聞いてくれるか？」
　楓は深く、しっかりと頷いた。
「朕(わたし)はあの海で―あの海で一度死んで生まれ変わったのだ」
　時繁の瞳は、またはるかな向こう、暗い海の彼方を見つめていた。彼の魂(こころ)はまたしても十四年前の壇ノ浦に還っているのだろう。
　時繁は訥々と語った。生母女院との涙の別離や恐るべき入れ替わりのこと。
　楓はただ言葉もなく聞き入った。
「二位の尼御前、これは朕の祖母だが、その祖母に抱かれて海に沈む前、母上に最期のお別れをしたんだ。母上はずっと涙を流しておいでだった。朕を抱いて、朕がこのような宿命しかたどれなかったことを涙ながらに詫びておられた」

「確か女院さまはまだ生きておわされるのでは？」
　思わず言うと、彼は頷いた。
「知っている。洛外の大原の庵におられると聞いた」
「女院さまは主上がご存命でいらせられることをご存じなのですか？」
「いや」
　時繁は首を振った。
「秘密を知る者は一人でも少ない方が良い。朕が生きていることを源氏の者が知れば、ただでは済むまい。また、源氏でなくとも、先帝である朕を己が野心のために再び担ぎ出そうとする輩が出てくる。朕はもう利用されるのはこりごりだ。母上にひとめお逢いして無事をお伝えしたいのは山々だが、恐らく互いに母子の名乗りをすることは生涯叶うまい」
　その切なげな横顔に、楓は時繁の辿った数奇な宿命を思った。
ーどんなに辛い人生をこの男は生きてきたのか。
　わずか一歳の幼さで至高の位につき、その小さな肩に背負い切れないほどの重い荷物をたった一人で背負って生きてきたのだ。
　楓は手を伸ばして時繁を抱きしめた。それは男女のというよりは、母が息子を抱きしめるのにも似ていた。
「二位の尼御前に抱かれて入水をした話は、いつかそなたに話したとおりだ」
「私はあのときのお話で、あなたが平家にゆかりの方だと思ったのです。ですが、まさか先帝でいらせられたとは露ほども思いませんでした」
　時繁がフと笑う。
「朕は死んだことになっているからな」
「陸に流れ着き、漁師に助けられたことは聞きました。でも、入れ替わりとは、どういうことでしょう？」
「朕が流れ着いたのは長門国の浜辺だった。その近くの親切で善良な漁師が朕を見つけて助けてくれたのだ。朕を育ててくれた養い親はその時、咄嗟に考えた」
　このまま帝を源氏方に差し出せば、一生かかっても遣い尽くせないほどの褒賞を貰える。その頃、源義経は行方知れずになった安徳帝を血眼になって探していたからだ。
　だが、源氏方に身柄を引き渡せば、幼い帝はまたその本人のあずかり知らぬところで運命に翻弄される。漁師は考えた末、帝をこのまま死んだことにした。丁度、近くの漁村で溺死した子どもがいた。年格好も似ていたことから、漁師はその子の亡骸をひそかに盗みだし、帝と入れ替えたのだ。
　その機密を知るのは近くのさる寺の老僧と漁師夫婦のみだった。漁師は老僧に相談し、その入れ替えた子を亡き帝として葬ることにした。証人をこしらえるために、棺に入れて白布で覆った子どもの亡骸を何人かの村人に見せた。むろん、その前に帝が漂着したときに纏っていた立派な水干を亡骸に着せていた。
「顔は長時間水に浸かっていたから、二目と見られないほど醜く腫れていると言い訳して、布で覆っていた。村人に見せたのは、下半身の部分だけだったそうだ。生命からがら助かった俺が

漸く普通に動けるようになったのは、すべてが終わってからだったんだ」
　数人の村人が立ち会い、間違いなく先帝の亡骸だと確認した後、亡骸はすぐに荼毘にふされた。
「それから、朕は漁師夫婦の倅として育った。元々、養父は一徹な人で通っていて村からも離れた場所で夫婦だけで、ひっそりと暮らしていた。だから、突如として遠縁の子どもが引き取られてきたと聞いても、誰も訝しむ者はいなかったし、わざわざ朕の顔を見に来る者もいなかった」
　そうやって、身代わりを帝に仕立てて埋葬した後、寺の老僧は義経に事の次第を書き送った。すぐに義経の近臣だという武士がやってきたものの、既に亡骸がない状態では、どうにもならない。念のため、先帝の亡骸を見たという村人すべてが呼び集めれ、一人一人尋問を受けたが、皆一様に、自分たちが見たのはお労しくも幼くして海に散った帝の亡骸だと口を揃えた。
　源氏の武士はその言葉を鵜呑みにし、そのまま帰京していった。
　当時、帝は六歳だった。我が身が何者で、何故、このような目に遭うことになったのか。朧には理解し記憶していた。
　それから九年が流れた。養父母となった漁師は彼を〝トキ〟と呼び、大切に育ててくれた。何故なら、帝の名は〝言仁（ときひと）〟だったから。
　せめて幸薄い帝に本来の名で接してくれようとしたのか。
　時繁は養父母のことを語る時、とても温かい笑顔になる。たとえ生きながら死んだことになっていても、間違いなくその養父母の許で過ごした時間は時繁にとって温かく思いやりに満ちたものだったのだ。壮絶な過去を持つ彼が束の間でも人間らしい幸せを得たことが彼のために、楓は嬉しかった。

養父母との暮らしでささやかな幸せを得ても、彼は自分が何者であるかを忘れたことは片時たりともなかった。近くの寺に通い、老僧から学問を教わり、高度な教養をも身につけた。彼の学問の師匠となったその老僧こそ、養父母の他に先帝が生きていると知る唯一の人間だったのである。

十五歳を迎えたある日、時繁は養父に鎌倉に行きたいのだと申し出た。ただひと言それを伝えただけなのに、養父は息子の意図を正しく理解してくれた。

―あなたさまを今まで我が子としてお育てして参りましたが、本来なら遠い都におわす天子さまはその竜顔さえ我ら賤しき民は拝することも叶わぬ尊(たつと)き身。子のない我らに子を育てる歓び、親となる歓びを与えて下された。勿体なくも畏れ多いことにございます。

その時、既に五十を過ぎようとしていた養父の髪は白いものが大半だった。平家の生き残り、しかも先帝という特殊な立場にも拘わらず、源氏に売り渡すようなこともせず、我が子として慈愛深く育てくれた恩を思えば、これより先も子として孝養を尽くし、その恩義に報いるのが筋であることは判っていた。

しかし、時繁には、是が非でも果たしたい悲願があった。無念の想いを抱いて壇ノ浦に散っていった平家一門の宿敵頼朝を討つ。一族の恨みを晴らすまでは、自分がこの世に生き残った意味はないとさえ思える。

養父の皺に埋もれた眼には光るものがあった。

出立の日、時繁はその場に座り、養父母の前で手をついて深々と頭を垂れた。この人たちがいてくれたからこそ、今日の自分があり、天涯孤独の身が温かな人の温もりを知ったのだ。

―私の方こそ、長らく慈しんで下さり、ありがとうございます。私にとってこの世に父母と呼べるのは四人、私をこの世に送り出して下された高倉の帝と建礼門院さま、そして、あなたたちです。

時繁も養父母と実の親子のように接した日々を思い、泣きそうになった。養父に手ずから漁を教わったこと、母と並んで芋の皮を剥いたこと。九年という月日はけして短くはない。彼らは時繁の人間形成に大きな影響を与えた。

大切には育ててくれたけれど、けして特別扱いはされなかった。〝トキ、トキや〟と呼び、実の子のように厳しく温かく教え導いてくれたのだ。

旅立つ彼に、養父は家の奥からぼろ布にくるまれた包みを差し出した。

―これは？

物問いたげに見つめる時繁に対し、養父は応えた。

―これは神器にございます。

流石に時繁もこのときばかりは度肝を抜かれた。二つの神器は確かに祖母二位の尼が幼帝である彼と共に腕に抱き入水した。しかし、その一つ草薙剣はいまもって不明とされているからだ。

―もし、あなたさまが漁師としてこの地で生涯を終えるおつもりならば、一生お渡しすることはあるまいと思うておりました。けれど、ここを出てゆかれるというのならば、これはあなたさまにお返し致します。この神器があなたと一緒に流れ着いたのは恐らくは天の導きでございましょう。我々はあなたさまこそが正当なる帝であると信じております。

　時繁は震える両手でその包みを押し頂いた。
―父上、母上。長らくお世話になりました。
　九年間を過ごした海辺の小屋は、この由比ヶ浜に建てた小屋とよく似ていた。わざと似たように時繁が建てたのだ。
　その懐かしい我が家を出た時繁に養母の哀しげな声が追いかけてきた。
―行ってはなりません。今、ここを出たら、あなたは茨の道を歩むことになる。
　泣き崩れる養母を養父が横から支え、時繁はもう一度、二人に頭を下げ未練を振り切るようにその場を立ち去った。
　鎌倉の地に来て五年、漁師の時繁としてひっそりと生きながら、頼朝暗殺の好機を窺っていた。ひそかに平家残党の一味を探し出し、かつて祖父清盛が手足として使っていた諜報部隊〝落ち椿〟の生き残りと接触、彼らと繋ぎを取りながら時期が来るのを辛抱強く待ち続けた。
　更に運命はまた彼を思わぬ方へと導いた。源氏の娘との出逢い、生まれて初めての恋。
　楓とめぐり逢ってから、彼はつくづく今、我が身の生命があることを感謝した。叶わぬと諦めていた恋が叶い、楓は彼の妻となった。時繁はあろうことか頼朝の重臣河越恒正の婿となり、頼朝に仕えることになる。
　そして、平家が壇ノ浦で悲運の最期を遂げてから実に十四年を経て、時繁は一門の恨みを晴らした。
　すべてを話し終えた後、時繁はあたかも憑きものが落ちたような、むしろ晴れ晴れとした表情をしていた。

「お労しい」
　楓の眼から透明な雫が次々と滴り落ちた。
「そなたは朕のために泣いてくれるのか」
　時繁は微笑み、楓の涙を人差し指でぬぐう。
「そなたに出逢って、人生はまだまだ棄てたものではないと思えたよ。こうして生き存えているからこそ、そなたにめぐり逢えた。不思議な宿命が朕をそなたへと導いてくれたのだ」
　時繁は笑い、傍らの小枝をパキリと二つに折り、焔の中に投げ込んだ。それで火勢が一気に強くなり、パチパチと小気味の良い音がする。火の粉が一斉に舞い上がり、漆黒の闇に舞う。
「綺麗」
　眼を輝かせる楓を時繁は愛情のこもった眼で見つめた。
「養父が言ったように、朕が今日まで生き存えたのにも何か意味があるのだろう。朕はこれからの生涯はその自分が生かされた意味を探していこうと思う。楓はそんな朕についてきてくれるか？」
「はい。楓はどこまでも時繁さまについてゆきます」
　楓が明るい声音で応えるのに、時繁がふっと淋しげな笑みを見せた。
「時繁さま？」
　不安げに見つめる楓に、彼は笑った。
「朕の方こそ、そなたには済まないと思うている。世が世なら、そなたは女御として内裏で時めいていたであろうに」
　楓は彼の愁いを吹き飛ばすような屈託ない笑顔で言った。
「いいえ、以前にも申し上げたように、私はこの世の栄耀栄華などには何の魅力も感じません。あなたの傍にこうしていられるだけで幸せなのですから」
「そなたがそう申してくれたら、ありがたい」
　楓は子どもが甘えるように時繁の肩に身を預けた。触れ合った箇所が温かい。これが人を愛すること、温もりなのだと改めて時繁の傍にいられる幸せを噛みしめた。
　楓には彼が何者であろうが、関係はないのだ。彼女にとって時繁は出逢ったときから今も時繁であり、愛する男、それ以上でもそれ以下でもないのだから。ただ、時繁と同様、彼を今日まで生かして下された神仏には心から感謝した。
　二人はいつまでも燃え盛る焔を見つめながら、止むことのない海鳴りを聞いていた。
　夜も更けてから、楓は時繁に伴われて小屋に戻り、再び明け方まで時繁に抱かれた。
　翌朝、二人はまた浜辺へと行った。昨夜、焚き火をした後がまだくっきりと残っている。
　時繁は先刻から、携えてきた例の布包み一草薙剣をずっと眺めている。彼が何を考えているのか、楓には見当も付かなかった。
　突如として、彼は布包みを解き始めた。固唾を呑んで見守る楓の前で、時繁は幾重にも包まれた布を丁寧に解き、ひとふりの剣を手にした。
　帝位を象徴する神器だというから、どのようにきらびやかなものかと想像していたのだが、楓の印象では何の変哲もない長剣のように見える。銀色に鈍く光る刃は長く優美で、柄も特に変わ

った細工はない。豪華という形容は一切当てはまらず、むしろ地味と言いたい。
　時繁はその長剣を握り、感慨深そうな表情で試す眇めつしている。と、彼が突然、剣を片手に捧げ持ち天に向かって突き上げた。
　その瞬間、奇蹟は起こった。明るい太陽が輝き惜しみない光を海へと降り注ぎ、海は眩しくきらめいていた一はずだった。なのに、俄に空には暗雲が立ちこめ始めたのだ。
　更に墨を溶き流したような不気味な空には時折閃光までひらめき始めた。突然、大音声が響き渡り、天からひとすじの光が降りてくる。その光は時繁の掲げた長剣へと流れ込み、その瞬間、草薙剣はこの世のものとは思われぬほどのまばゆい光を放った。
　眩しくて、到底眼を開けていられない。楓は思わず手のひらで視界を覆ったが、当の時繁は悠然と微笑んでいた。漸く剣の光が徐々に弱まり始めた時、楓は小さく声を上げた。
　相変わらず薄墨色に染まった空を透き通った銀の鱗を持った龍が泳いでいる。
「時繁さま、あれは私が初めてあなたさまの小屋で過ごした夜、夢で見た水龍です」
　楓が興奮した口調で告げると、時繁は頷いた。
「天も朕が考えたことをお許し下さったようだ」
　水龍はしばらく悠々と気持ちよさそうに空を翔けていたが、やがて、空が少しずつ明るさを取り戻してくるのに従い、その姿は薄くなり見えなくなった。
　楓はハッと我に返る。慌てて周囲を見回すと、先刻まで暗かった空は元どおりの蒼穹となり、太陽が輝いて、すべてのものを明るく照らしている。まるで今し方、眼にしたものはすべて夢幻だったかのようだ。
　時繁は何事もなかったかのように、既に光を失い元の姿に戻った剣を握りしめていた。
「楓、これはもう、朕には無用のものだ」
　時繁は呟き、草薙剣の刀身を愛おしむかのように撫でた。
「ゆえに、この宝剣は海に帰そうと思う」
　楓は愕き、時繁を見た。
「良いのですか？　これは、あなたさまが主上であらせられると証(あか)す、たった一つのよすがでは」
　時繁は笑いながら首を振った。
「既に都には新しい帝が立って久しい。朕は既に亡くなり、あくまでももう過去の人間だ。今は新しい剣が造られ、神器として祀られていると聞いた。今更、これが本物の神器だと主張しても、何の意味もないんだ。楓、朕はもうただ人として生きたい。それが唯一の望みだ。そのためには、これはもうかえって邪魔なんだよ」

幼いときから平家に利用され、平家のために生きたといえる安徳帝だからこそ、言えることなのかもしれなかった。
時繁の手から剣が離れた。勢いつけて投げられたそれは、瞬く間に海中へと落ち、波にさらわれ沈んでいった。
第八十一代の帝、安徳帝の手により、草薙剣は今度こそ本当に海へと還っていった。この瞬間、安徳帝は本当にいなくなったのだ。帝は自ら自分自身の存在を海に葬った。自らの〝死〟とともに不遇の帝が得たのは永遠の魂の安息だった。
ひそかに生きてきたこの年月、安徳帝の心が安らいだことはかつてなかった。復讐と憎しみだけに生きてきた彼は楓という存在を得て、初めて人を愛すること、心の安らぎを知ったのだ。
「もし、お祖母さまの言われるとおり、真にこの波の下に都があるのなら、きっと剣は平家一門が暮らすとこしえの都に辿りつくだろう。朕は今日この時をもって、帝であることも平家であることも止める」
「それならば、私も今日限り、源氏とは縁を絶ちます」
二人は眼線を合わせ、頷き合った。
時繁が晴れ晴れと言う。
「最早、我らは源氏でも平家でもない。すべてのこの世の柵から解き放たれた」
ここまですっきりとした良い表情の時繁を見るのは初めてだ。
「憎しみはもう、剣と共に、あの海の底へと消えた。楓よ。俺は積年の復讐をやり遂げて、しみじみと感じたのだ。俺は確かに宿願を果たし一族の無念を晴らしたが、少しも心は晴れなかった。ただ自分も源氏と同じ、結局は謀略で相手を陥れたという虚しさだけが残った」
楓は静かな声音で言った。
「憎しみは憎しみしか呼びませんもの」
「もう、俺は忘れたいんだ」
「忘れましょう、子と共に親子三人で、どこか私たちを誰も知らない土地で暮らすのです」
と、時繁が黒い瞳を目一杯に開いた。
「今、今、何と申したか？」
楓は頬を染めながら、消え入りそうな声で告げた。
「時繁さまのお子を授かったようにございます。薬師の診立てでは今年の六月には生まれると」
懐妊を知ったのは霜月だったが、色々とあって言えなかったのだと告げた。
「そうか、そうだったのか。俺が父親になれるんだな」
時繁は男泣きに泣いていた。生きながら死んだとされ、別人として生きてきた彼の胸にこの時、去来する想いは何だったのだろうか。
「そうか、でかした、でかしたぞ、楓」
時繁は今にも踊り出しそうなほどの勢いだ。時繁が歓べば、楓も嬉しい。それに、こんなに歓ぶとは思ってみなかったので、余計に嬉しさもひとしおだ。
「とりあえずは長門の養父母の許に孫の顔を見せにいくとするか」
時繁がいっとう明るい声で言い、楓は微笑んで頷いた。

鎌倉の海はどこまでも蒼く、由比ヶ浜では今日も潮騒が聞こえる。

この日を境に、時繁と楓は鎌倉から姿を消した。その行方は杳として不明だが、これより十年ほど後、京都で二人の子どもを連れた幸せそうな二人を見かけた知り人がいたという。

男の方は何やら小商いをしているようで、まだうら若く美しい妻は二人の娘たちを育てながら商いを手伝っていた。小さいながらも、男の営む小間物屋は繁盛していたとのことだ。

（了）

蓮

ハス，はす（蓮）

花言葉一「雄弁」「休養」「沈着」「神聖」「清らかな心」「離れゆく愛」

第二話　黒髪～大原野寂光院～

　女院はひそやかな吐息を一つ落とす。つと顔を仰のければ、鈍色の天(そら)が間近に迫っている。それこそ、あと少し伸ばせば、手が届きそうなほどに。
　一空が低い。ここ洛外の大原野に来てからというもの、幾年を数えたであろうか。寺に女たち数人で人知れず棲む暮らしは単調で、流れゆく日々には何の変化もない。むろん、そのことを特に不満に思っているわけではない。
　そう、変化のある生活など、もう二度とご免だ。振り返ってみれば、我が生涯はけして平坦ではなかった。変化といえば、これほど有為転変を経験した者もおるまい。平清盛の娘として生まれ育ち、やんごとなき雲の上の帝の妻となり、更には彼女の産み奉った我が子もまた帝となり、彼女は国母と呼ばれ尊崇を受けたのだ。
　およそ女性としては最高の地位につき、栄誉を得たといえよう。しかし、その心の奥底を覗いてみれば、果たして我が心が満たされたことがあったろうか。
　良人である帝は次々と他の女を寝所に呼び、自分は形式だけの妻でしかなかった。中宮と呼ばれる帝の正妻でありながら、最後まで彼女が手に入れられなかったもの、それは良人の心だった。
　帝は才気煥発な女性を好んだ。もちろん、容姿も美しくなければならない。徳子は我が身を特に不器量だと思ったことはないけれど、さりとて、美人だと思ったことはなかった。第一、父清盛にお追従で〝徳子姫は美人だ〟と言う者があったとしても、それは所詮、お世辞でしかないことも知っていた。
　容貌も平凡で、気性も大人しやか、殊に取り立てて言う何ほどの特徴も特技もない。それが自分、世に並びなき権勢を誇った太政大臣平清盛の娘であった。
　例えば、我が身があの典侍(ないしのすけ)一坊門殖子のようにきららな美貌で、更に打てば響くように帝の話し相手ができるならば、もう少し帝との夫婦仲も変わったものになっていたかもしれない。
　しかし、残念なことに、徳子はどこまでも平凡な姫でしかなかった。可もなく不可もない、劣ったところもなければ、さりとて秀でたところもない。そんな自分が良人の気を引けるはずもないと、徳子はあっさりと諦めた。もしかしたら、良人はそんな徳子の気性を物足りなく思っていたのだろうか。
　嫉妬一つせぬ、つまらない女だと。
　だが、そんなはずがないではないか。この世に自分の良人が他(あた゜)し女に心を移し歓ぶ妻がどこにいるだろう？　徳子だって、高倉帝が夜ごと、他の女官を寝所に召した日は朝まで寝床でまんじりと眠れぬ夜を過ごしたものだった。
　とはいえ、物心ついたときから
―おなごというものは、いつでも己が心を露わにするものではございませぬぞ。
　と、周囲から教え諭された身では、その〝嫉妬〟と呼ぶ感情をどのように表現して良いのかさえも判らなかった。

女は堪え忍ぶもの。それが、平家の姫として、いずれは后になるやんごとなき身として育てられた徳子の矜持であり、礎でもあったのだ。
いずれにせよ、徳子と数歳下の高倉帝との結婚生活は淡々としたものだった。帝は徳子が清盛の姫だからこそ、正妻としての体面を保つだけの扱いはしたものの、皇子を儲けた後は義理は果たしたとばかりに、次々に内裏の美しい女官たちと戯れの恋に走った。
そんな味気ない日々の中で、徳子にとって唯一の慰めが我が子である幼い皇子となっていったのは自然なことだったろう。
徳子はまた人知れずため息を零した。
最後にあの子をこの腕に抱きしめたのは、いつのことだったのか。まだいとけない盛りで逝ったあの子のことを思う度に、胸は引き絞られるように痛む。
まだ六歳だったのに、母が恋しい年頃だったのに、冷たい海の底に沈んでいった我が子。平家の娘が生んだ皇子であるばかりに、帝であるばかりに、わずかな生涯しか送れなかった。
徳子はゆるゆるとかぶりを振った。何故か、今日は、あの子のことばかり考えてしまう。抱きしめたときのやわらかな身体や幼な子特有の甘い香り、すべてが今もしっかりと徳子の記憶に刻み込まれている。この世での母と子としての縁(えにし)は薄かったけれど、やがて自分も我が子安徳帝のおわす浄土にゆくときが来たら、そのときこそ叶わなかった分まで抱きしめて差し上げたい。
ぼんやりと昔の想い出に耽っていたまさにその時、背後から遠慮がちな声が聞こえた。
「女院さま、今宵は寒うなりそうでございますゆえ、鍋物などに致そうと思うておるのでございますが」
振り向けば、側仕えの右京が微笑んでいた。かつては徳子の側近く仕えた女官であり、右京大夫の女房名でその才色兼備ぶりを知られた女だ。今は徳子と同様、尼姿でこの庵に暮らしながら、徳子の世話をしている。
徳子もまたうっすらと笑みを浮かべた。
「それは良いのう」
右京は心もち肩を竦めた。
「いつもの者がまた新鮮な野菜を届けてくれております」
「そうか。ありがたいことじゃ」
徳子は両手のひらを合わせ、軽く頭を下げた。そして、ここ半年ばかりの間、十日に一度、決まったように野菜を届けてくれる者について初めて想いを馳せた。
「さりとて、半年もの間、洛中からこの大原野まで、たくさんの野菜を運んでくるのはさぞ難儀であろうに。一体、どのような者であろうか、まだ若いとはそなたから聞いてはおったが」
右京は小首を傾げた。
「年の頃は二十代後半にはなりましょうか。秀でた面立ちの若者にございます」

　そこで右京が呑み込んだ言葉をこの時、徳子はまだ知らなかった。
ーどことなく、亡き御方を思わせる良い瞳をした若者でございますよ。
　徳子は右京の心を知るはずもなく、何気なく訊ねた。
「名は何と申すのか？」
「時繁と申しておりました」
「そうーか、時、ときー」
　呟いた徳子はハッとした。弾かれたように面を上げ、右京に続けざまに問う。
「時繁と？」
　いつもは静まりかえった湖のような女院の人が変わったかのような剣幕に、右京は眼を見開いている。徳子は叫ぶように言った。
「その者はいつ頃、来たのじゃ？」
「先ほど帰ったばかりにございますが」
　徳子は矢継ぎ早に言った。
「早う、早うに行って呼び止めよ」
　徳子にどこまでも忠実な右京は怪訝な面持ちながらも、すぐに立ち上がって部屋を出ていった。
　だが、若い男の足は速く、右京が山門を出たときには既に時繁の姿は見えなかったという。少し先まで追いかけてみても、無駄脚になった。
　徳子は軽い落胆を憶えた。
「今度、もしその者が来たら、必ず引き止めるように」
　そう右京に命じ、放心したように居室の開け放した窓を眺めた。白いものがちらちらと舞い落ちている。今年初めての雪が降り始めたようだった。
　時繁なる男が姿を見せたのは、やはりきっちりと十日後だった。その日も雪が朝から降り止まぬ一日であった。いつものように山ほどの新鮮な野菜を籠一杯にしてやってきた彼は、そのまま右京に挨拶して引き返そうとした。が、右京は女院の厳命もあり、彼を引き止めたのである。
　時繁の整った面には、はっきりと困惑が現れている。が、女院の命であれば、彼をそのまま帰してやるわけにはゆかない。時繁は不審げな面持ちながらも、右京から子細を聞いて素直に従った。
　この洛外のうらさびれた庵を訪ねる酔狂な客はこの雪深い季節にはいないが、たまに来る客に逢う時、女院は本堂の隣の小さな座敷を使っていた。
　しかし、今日は何を思ったか、時繁には本堂で逢うとの意向だった。右京は予め命じられたままに時繁を本堂に案内した。
　女院は既に本堂にいた。主従が暮らすこの庵は寂光院と呼ばれている。本堂も女性らしいこじんまりとしたたたずまいだ。
　女院は今、本尊の地蔵菩薩像を背後にして端座している。その少し離れた下手に時繁なる若者は両手をつかえていた。
「面を上げなさい」

女院が声をかけても、時繁はなかなか従わない。傍らに控える右京が囁いた。
「女院のご命令です。従うように」
それで覚悟を決めたのか、時繁はゆるりと面を上げた。その漆黒の瞳が女院を真っすぐに捉えたその瞬間、徳子の背筋を戦慄が駆け抜けた。
やはり、と思った。もっとも、時繁という名のこの若者に逢ってみたいと思ったのは衝動的なものだった。しかし、女院をその衝動めいた行動に駆り立てたてのは、不思議な形容もできない勘であった。もしかしたら、それは母の勘であったのかもしれない。
溢れる感情は様々で、それらを纏めて言葉を紡ぐには更に長い刻を要した。
「一主上(おかみ)、主上ではありませぬか」
徳子の言葉に、傍らの右京がたじろぐ気配がした。
「もしや一」
右京の言葉を制するかのように、時繁が右京を鋭い眼で見た。女院は悟った。右京は帝がおん幼い時、その腕に抱いてあやしたり、独楽を回して一緒に遊んだりしたお側去らずの女房であった。流石に生みの母である女院のようにひとめ見て気づきはしなかったのだろうが、今の徳子の指摘で気づいたに違いない。
いや、この凛々しい若者の面は、確かに帝の幼な顔の名残をとどめていた。ずっと帝の側にいた右京が気づかぬはずがない。やはり、気づいていても余計なことだと口を閉ざしていたと考えた方が良いだろう。
帝は凛々しく立派に成長していた。別れたときは六歳の童子は今や二十七、八歳ほどの精悍な面立ちの青年になっていた。
何とご立派におなりあそばされたものやら。
その成長を側で見守りたかったという願いもさることながら、失ったと信じていた我が子がこの手に戻ってきたことが俄には信じられず、徳子はこみ上げてくる様々な想いを抑えるのに精一杯だった。

女院とは裏腹に、時繁は即答した。
「私のような卑しい身が帝であるなど、畏れ多いことにございます」
徳子は夢中で首を振った。
「母が我が腹を痛めて産みし子を間違うはずもございませぬ。そなたは、あなたはまさしく我が子、言仁さまでございましょう」
徳子の眼から、はらはらと涙の粒がころがり落ちた。壇ノ浦で共に海中に沈みながら、母である徳子は源氏方に捕らえられ生き延び、幼い帝は徳子の母二位の尼時子と共に海の藻屑と消えた一とばかり思い込んでいたのだ。
その幼くして逝った我が子が生きていたとは考えたこともなかった。
徳子は時繁と名乗る若者の顔をじいっと見つめた。
一哀しきかな、我らは終生、母子の名乗りはできぬ宿命。平家滅亡の壇ノ浦合戦ははるか遠く昔になり、我らが宿敵頼朝は既にこの世におらずとも、いまだ平家の残党狩りに幕府は目を光らせている時世にございます。
聡明そうな黒い瞳は女院に向かって静かに語りかけていた。徳子は、はるか昔に手放した我が子の言いたいことを正しく理解した。
そう、壇ノ浦合戦のあの最中、徳子は永遠に我が子の、御子の手を離してしまったのだ。今になって、その手を取ることなどできはしない。いや、こうして互いに生きてあいまみえただけで、御仏のお引き合わせともご加護とも思わねば罰が当たろう。
と、時繁の視線が自分の背後に向けられているのに気づいた。地蔵菩薩像の傍らには衣幡が掛けられている。
「それは一」
物問いたげに見つめられ、女院は微笑んだ。
「亡くなった我が子が着ておった衣にございますよ」
時繁が胸をつかれたように眼を瞠った。
「お亡くなりになったお子の衣、にございますか？」
女院もまた背後を振り返った。それは壇ノ浦で死んだはずの幼い帝が最後まで身にまとっていた御衣だった。徳子は亡き御子の形見となった御衣を法具の幡に自ら仕立て直し本堂に飾ったのだ。幼くして海に散った我が子へのせめてもの供養になれば、その御心を鎮めることができればと願ってのことだ。
今、その死んだはずの帝が成長してここにいる。時繁がどのような想いでそれを見つめているか、その心根はたとえ生みの母である女院ですら、うかがい知ることはできない複雑なものであるに違いなかった。
しばし静寂が狭い本堂の空間を満たした。
徳子は小さく息を吸い込んだ。
「今は、どのように暮らしておるのか？」
我が子である帝が母子の名乗りはせぬというのなら、徳子はその意を受け入れねばならない。ともすれば零れ落ちそうになる涙を堪え、女院は若者に向かって問うた。

「日々、京の町を小間物を売り歩いております」
　女院は幾度も頷いた。
「野菜を持参してくれているそうじゃの」
　時繁は淡く微笑んだ。
「家の裏にささやかな畑を作り、そこで野菜を作っております」
「今まで、どこでどうしていたものやら。ずっと京におったのか？」
　それが、徳子のいちばん知りたかったことだ。六歳の幼い帝が一人で生きてこられたと思えない。第一、二位の尼に抱かれて神器ともともに海中に没したはずの帝がどうやって助かったというのか。
　だが、時繁は多くを語らなかった。わずかな笑みをその秀麗な面にとどめたまま、淡々と語った。
「私は漁師の倅ゆえ、海の側近くで育ちましてございます。父親と日々、海に出て漁をして育ちました。ふた親は貧しいながら、そうやって日々を凌ぎ私を育ててくれたのです」
　そのひと言で徳子はおおかたの事情を察した。恐らくは帝が漁師に助けられ、奇跡的に生命を長らえたのだと。
　今この瞬間、徳子にとって最も大切なのは、我が子が生きていたこと、そして、先帝である我が子を源氏に差し出すこともなく大切に育ててくれた名も顔も知らぬ漁師夫婦への感謝だけであった。
　女院は滲んだ涙の雫を墨染めの衣の袖でそっとぬぐった。
「時繁と申したか。そなたは亡くした我が子によう似ておる。年格好も面立ちも、その子が生きておらば丁度同じであろう」
　時繁が遠い瞳になった。
「私にも幼い頃、失うた母がおりました。生き別れになった母にございます。私を育ててくれたのは養父母にて」
　彼の視線が強い光を取り戻し、女院に向けれた。
「もし、その母が生きていたとしたら、伝えたいことがございます」
　徳子は息を呑んだ。
「何と？」
　時繁は一語、一語をゆっくりと区切るように言った。
「私は一度、死にかけましたが、親切な養い親に助けられ、こうしてつつがなく今に至っております。どうか母上におかれましても、これからはお心安らかに私のことはご心配なさらず、お暮らし頂きたい」
「一その言葉をそなたの母が聞いたらば、さぞ歓ぶであろうな」
　徳子は涙に光る眼で若者を見つめる。彼は更に思いがけないことを言った。
「七年前に妻も娶りました」
　徳子の眼が見開かれた。
「そうか、妻を娶られたか！」

　徳子の脳裏にまだあどけなかった帝の姿がありありと浮かぶ。無邪気に独楽を回して笑顔を見せていたあの幼い子がもう妻を迎える歳になっていたとは！

　歓びと哀しみがない交ぜになり、つい、心が逸った。
「相手はどのような娘か？」
　勢い込んで、矢継ぎ早に質問を繰り出してしまう。
「孫、いや、子はまだなのか？」
　徳子の様子に時繁はうっすらと笑んだ。
「そのように幾つもの質問には答えられません」
　笑いながら告げられたのは、七年前に迎えた妻との間には二人の娘がいるとのことだった。
「上の娘は六歳、下の娘は二歳になったばかにございます。妻は朗らかな女です。苦労をさせていると思うのですが、苦労を苦労とも思わぬ春風のような女なのです」
　女院は心から言った。
「良き娘を伴侶に迎えられたものよ。夫婦の間に身分は関わりない。良人は妻を愛し、妻もまた良人によく仕える、美しきことじゃ」
　時繁の明るい瞳を見ていれば、今の彼が暮らし向きはささやかでも、幸せであることは一目瞭然だ。きっと我が子は若い妻一人を愛し、妻もまた我が子を恋い慕っているのだろう。
一良かった。我が子には夫婦が互いによそよそしく心通わぬままで、他の女に眼を向けなければならないような生涯を送って欲しくはない。
　それでも、徳子は今一度、訊ねずにはいられなかった。
「時繁どのは今、幸せか？」
「はい」
　迷いのない返答であった。女院は安心したように心からの笑みを見せ言った。
「また顔を見せてくれ」
　だが。時繁は今度は頷こうとはしなかった。笑顔ではあったけれど、きっぱりと首を振った。
「いいえ、もう参りませぬ」
　もう、我が子には逢えぬ、その現実が徳子の胸を絶望の色に染める。時繁は穏やかな口調で続けた。
「いまだ平家の残党には厳しい監視の眼が執拗について回っております。私のような卑しい者が尊い女院さまをお訪ねしては、女院さまのご迷惑になりましょう」
　言外に、これ以上人目に立つのは互いに危険だと告げていた。
　時繁の言うとおりである。互いの存在を知ってしまった以上、続けての接触は避けるべきであった。我が身は別にどうなりもしないし、今更どうなろうと構いはしないが、崩御したはずの先帝が生きていたとなれば、世間は大騒ぎになるのは必定だ。安徳帝をまた即位させようと平家の残党やゆかりの者たちが画策しないとも限らない。
　そうなれば、先帝は今の妻や子たちとの幸福どころか、生命すらも危うくなる。平家の血を色濃く引く先帝に生きて貰っていては困る人間は京方にも幕府方にもごまんといるだろう。
　せっかく生命を長らえた大切な御子をそのような危険にさらすことはできない。
「どうか女院さま、御身お健やかに、いついつまでもお暮らし下さいませ。この時繁、遠くより常に女院さまのお幸せを願っております」

時繁もまた名残惜しげな様子で立ち上がった。
時繁が辞して幾ばくも経たぬ時、徳子は突如として立ち上がった。
「女院さま？」
驚いた右京を尻目に、徳子は立ち上がり法衣の裾を翻して小走りに居間から出た。
短い階を降りて苔むした庭をひた走る。降り積もった雪の冷たさも今は少しも気にならなかった。
「お待ちくださいませ」
右京から背後から蒼白になって追いかけてくるのが判った。
ようよう小さな山門まで来た時、徳子は荒い息を吐きながら叫んだ。
「言仁さま」
それは、けして呼んではならぬ名前であった。時繁は既にかなりの距離を歩いていた。流石に若い男だけはある。長身で脚も長いから、歩幅も大きいのかもしれない。
振り向かぬかと思った時繁がつと立ち止まる。女院の方に向いたと思うと、深々と頭を下げた。やはり、市井に生きていても、その丹精な面立ちには気品があった。生まれ持ったものを人は隠せはしないのだと、女院は今更ながらに思う。
世が世ならば、九重の雲の上に住まうやんごとなき御身一、それが今は小間物の行商をして慎ましやかに暮らしているという。
だが、それで良いのだともまた思う。壇ノ浦で散っていたはずの幼い生命が親切で慈愛に満ちた漁師の夫婦に救われ、立派に成長を遂げた。

どのような姿であろうと、ただ生きていてくれさえすれば良い。それが、身分の高低に拘わらず、母の子に対する願いなのだから。ましてや、死んだはずの我が子は幸せな結婚をし、二人の子まで儲けているというではないか。これ以上、何を望むというのだろう。
顔を上げた時繁の眼にうっすらと光るものが見えたのは気のせいだったろうか。
女院は裸足のままだった。小さな素足が降り積もった雪を踏みしめていた。時繁の視線が動き、その脚を見つめた。彼は何を思ったか引き返してきて、懐から何やら取り出し、女院に差し出した。
「草鞋にございます。妻が編みました。この季節、雪深いこともありますので、いつも予備のものを持っております」
時繁は草鞋をきちんと揃えて、徳子の足下に置いた。徳子は草鞋を見つめた。しっかりとした作りだ、時繁の妻は春風のように暖かく、更に几帳面な良い女に違いない。
女院は彼が置いていった草鞋を履いてみた。彼女のためにあつらえたように丁度良い。熱いものがこみ上げてきて、泣くまいと唇をかみしめて御子の姿を追おうと顔を上げた時、既に時繁の長身の姿は小道の角を曲がって見えなくなっていた。
徳子はただ呆然とその場に立ち尽くしている。
「一ご立派にお健やかにご成長あそばされました。甲斐のなき生命でございましたが、この歳まで生きた意味がございました」
傍らで右京が呟いた。誰がとは言わずとも、その人がそも誰であるかは明らかであった。
「壇ノ浦では、この世には神も仏もない惨いものだと天をお恨みも致しましたが、女院さま、神仏は確かに我ら平家を守って下さったようにございますね」
平家の血を引く安徳帝はいわば、平家の象徴でもあった。平家は壊滅したが、その帝がひそかに生きていたのはせめてもの救いだった。徳子に言葉はなかった。ただ右京の言葉のとおりであると思ったので、静かに頷いただけだ。
一旦は止んでいた雪がまた降り出したらしい。
「濡れては、お身体に触ります。早うに中に入りましょう」
右京がそっと袖を引くのが判っても、徳子はなかなか歩き出せなかった。
出家したその時、この世への未練も執着も丈なす黒髪とともにすべて断ち切ったつもりであったけれど、やはり我が産みし子への想いまでを棄てることは叶わなかったようだ。
徳子は遠く洛中まで歩いて帰るあの子が雪に難儀しなければ良いがとひたすら祈るだけだった。
大原野寂光院に住まう建礼門院、この時、五十歳になり給うとしていた一。

※
本作に登場する右京こと右京大夫は実在した建礼門院右京大夫とは別人として描いております。実在の右京大夫は出家もしておらず、寂光院に女院を訪ねたことはあるものの、俗世にとどま

り平家滅亡後も内裏で女房として華やかに活躍しました。

　また、安徳天皇の御衣で仕立てた幡は寂光院ではなく建礼門院が出家した長楽寺にあります。

あとがき

こんにちは。今年は秋の深まりが早く、今日などは毛糸を着込むことになりました。まだ漸く九月の下旬に入ったばかりですから、これは少し異常気象ですね。

さて、今月は何と〝鎌倉物〟です。鎌倉時代を描いた作品は私の数ある作品の中でもけして多くはありません。しかし、私の原点となり、今の私を作ってくれたのは実はこの鎌倉時代なのです。

私が小説らしきものを書き始めたの小学校六年のときです。友達と交換日記みたいなものに小説を書いて読み合っていました。もちろん、当時は小説などと呼べる代物ではなく、あくまでも物語、お話のようなのだったと思います。

そして中学に入り、大河ドラマ〝草燃える〟と出逢いました。これが、私が歴史に興味を持つ直接の原因となったのです。幼稚園の頃から大河ドラマ〝平将門〟を見ていた私にとって、大河ドラマは身近なものでした。

しかし、この中一で出逢った〝草燃える〟は特別なものとなりました。まず興味をかきたてて止まなかったのが頼朝の娘大姫と木曽義高の悲恋物語です。幼いながらも父頼朝に殺された義高を一途に恋い慕い続け、十九歳の若さで亡くなった大姫。彼女の存在は衝撃的であり、ロマンチックでもありました。

この大姫を頼朝が後鳥羽天皇の許に入内させようとしていたのは事実ですが、私はそのことにも興味を持ちました。そのことは私の今回の作品でも少し触れましたが、結局、大姫亡き後、その代わりに入内させようとしていた次女も十三歳で亡くなります。

なので、頼朝には三女がいたという設定で、この末娘が後鳥羽天皇に入内したというお話を書いたのが初めて書いた歴史小説でした。この物語は書き出したのは良いものの、やはり十二歳には難しすぎたのか、完成はしていません。

しかし、後に二十代半ばで〝残像〟というタイトルで、後鳥羽天皇とその女御季子の宿命的な出逢いと愛憎を描いた作品として描き、初めて完結させました。もちろんここでも、最初と設定は同じで、頼朝の娘、三女という設定です。

ところで、大河ドラマでは頼朝を様々な人が演じましたね。私が知るだけでも、〝草燃える〟では石坂浩二さん、後、タッキーが主演だった〝義経〟では中井喜一さん、近いところでは〝平清盛〟でも若手の俳優さんが頼朝を演じました。あとタイトルは忘れましたが、確か長塚京三さんも大河で頼朝を演じられたことがあるのではないでしょうか。

ですが、私の中での頼朝といえば、やはり石坂浩二さんです。十二歳の私は、今に伝わる頼朝の肖像画に石坂さん演じる頼朝がそっくりに見えたものです。生まれて初めて見るドラマの中の頼朝だったからか、それとも石坂さんの存在感ゆえかは判りません。

また、中井喜一さんも流石にベテランらしい重厚さをよく表現していたと思います。〝清盛〟の頼朝はもう少し重みが欲しいかなと思いました。長塚さんは、頼朝という冷徹な猜疑心のなか

なか強いクールな面をよく出されていて、こちらも流石に演技派だなと思ったことを憶えています。

後は、この作品にも登場する〝さつき〟。この名は確か〝草燃える〟に出てきたその他大勢の政子役の岩下志麻さんに仕える侍女の名前でした。そういえば、今、これを書きながら〝ちぐさ〟という名前の侍女もいたことを思い出しました。千種と書くのか、千草と書くのかは記憶は定かではありませんが一。

以来、鎌倉時代が舞台のときには、よく千草とさつきが登場します一笑。

今回、鎌倉時代を描くのは実に二十余年ぶりです。なので、凄い不安がありました。しかも、今までとまったく違う題材や設定です。二十年前は中一のときに考えた設定をほぼそのまま使い話を展開していったので、そういう意味では一から考える必要はありませんでした。

今回の話は間違いなく平家の落人伝説を採用したものであり、今もなお全国各地に伝わる安徳天皇が実は生き延びていたという傍説ともいえない伝承を元にしたものです。

壇ノ浦で死んだはずの幼い天皇が実は生きていて、頼朝は事故ではなく暗殺、しかも復讐を企てた安徳天皇に殺されたのだ。ストーリーとしては興味深いですが、一つ間違えば荒唐無稽になる恐れがありましたし、また、既になっているかもしれません一汗。

とはいえ、私は今回は是非、これを描いてみたかった。私の今の力量では、これが精一杯で、できるだけ不自然にならないように努力したつもりですが、まあ、そのようなところは多々あるかと思いますが、お見苦しい点はご容赦いただけると助かります。

あとは、この作品はとある事情で原稿用紙二百枚以上という制約がありました。これも難しかった。無理をして話を引き延ばすことはできますが、それをやると作品そのものが冗漫になり、ますます拙作になります。なので、二百枚以上という規定は頭の端っこにとどめるだけにして、もし枚数に届かなければ、それはそれで良い、自然の流れというか、なりゆきに任せようと思いながら書き進めていきました。

それで、ラストまで書いてきたら、ありがたいことに丁度二百枚で収まりました。これは嬉しかったです。自分では特に無理に引き延ばして二百枚にしたという意識はないので、その点は大丈夫かとは思うのですが。

いつもにもまして、あとがきが長くて、くどいですね一笑。そういうわけで、鎌倉時代には大変思い入れがありまして、つい長々と熱く語ってしまいました。

どうぞ、つまらないあとがきなんて、もう要らないと思われる方は飛ばしてご覧下さい。

来月は引き続き、鎌倉シリーズ第二弾を描くつもりです。こちらも私が是非、一度取り上げてみたかった人物です。ラストまで心を込めて描きますので、よろしくお願いします。

終わりに。この作品内では実在と架空の人物が混在しています。また、すべてが歴史的事実どおりに描かれているわけではありませんことを付記させていただきます。

それでは、今回もありがとうございました。

東　めぐみ拝

虫の音に耳を傾けながら深まりゆく秋の宵に

二〇一四年九月二十日

華鏡（はなかがみ）～帝に愛された姫君～

http://p.booklog.jp/book/96534

著者：megumi33
著者プロフィール：http://p.booklog.jp/users/megumi33/profile

感想はこちらのコメントへ
http://p.booklog.jp/book/96534

ブクログ本棚へ入れる
http://booklog.jp/item/3/96534

電子書籍プラットフォーム：ブクログのパブー（http://p.booklog.jp/）
運営会社：株式会社ブクログ